

地（知）の拠点大学による地方創生推進事業

とくしま元気印イノベーション人材育成プログラム

平成 30 年度事業報告書



次世代技術



地域医療・福祉



６次産業化



地域づくり・観光・ICT

－ 目　　次 －

１．　はじめに …… 1

２．　事業概要
「とくしま元気印イノベーション人材育成プログラム」の
概要について …… 5

３．　事業協働機関について…… 9

４．　平成 30 年度実施会議一覧 …… １３

５．　COC+大学及び COC+参加校実施事業
徳島大学の取組 …… １９
とくしま元気印イノベーター教育プログラムの編成状況について … １９
実践力養成型（寺子屋式）インターンシップの実施について …… ２０
四国大学の取組…… ５４
徳島文理大学の取組…… ７０
阿南工業高等専門学校の取組…… ７３
徳島工業短期大学の取組…… ７５

６．　協働事業
参加校共同授業「徳島の魅力、徳島で働く」の実施について …… ８１
「徳島の魅力、徳島で働く～徳島で輝く産業を知る～」の
開催について …… １０１
FD 地域人材育成フェスタの開催について …… １０５

７．　参考資料…… １１３

は じ め に

「とくしま元気印イノベーション人材育成プログラム」は、文部科学省の平成２７年度「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（ＣＯＣ＋）」に採択され、今年度で４年目を迎えました。来年度は、いよいよ５年にわたる事業期間の最終年度、締めくくりの年となります。今、徳島をはじめとする我が国の「地方」は、少子高齢化と東京一極集中等により人口が急激に減少しており、特に、大学等高等教育機関への進学時や就職時の「若者の流出」は、非常に深刻な問題であります。

本プログラムでは、県内５０の高等教育機関、徳島県、経済団体、企業及びＮＰＯ法人等の皆様にご参画をいただき、徳島の産業振興と課題解決、イノベーションに積極的に参画する「元気印」人材の育成と、成長力ある産業の育成と雇用創出に取り組み、学生の県内就職率を、５年間の事業期間中に１０％アップさせることを数値目標としています。

この目標を達成するために、事業協働体「とくしま元気印イノベーション人材育成協議会」を組織し、徳島県において雇用創出と学生の就職率向上が期待できる４つの分野（①「次世代技術関連分野」、②「地域医療・福祉関連分野」、③「６次産業化関連分野」、④「地域づくり・観光・ICT 関連分野」）を設定して、その４分野に合わせた（１）「寺子屋式インターンシップを柱とした産官学連携による教育カリキュラム改革」、（２）「地域就職率の向上に向けた協働事業の実施」、（３）「徳島県の「vs 東京『とくしま回帰』総合戦略」による雇用創出」の３つの事業を推進しています。

平成２７年度には事業実施体制の整備を、平成２８年度からは、教育プログラムの開発・改善、新たなインターンシップ教育の開発、学生の創業支援事業などの具体的な取組をスタートさせ、今日まで、これら各種取組の充実・改善に努めてまいりました。平成２９年１０月に実施された「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業委員会」による事業の中間評価において、チュートリアル方式を取り入れた「インターンシップ」や、学生とその保護者を対象とした地元就職に関する「ガイダンス」などが優れた取組として評価され、最上位「S 評価」をいただくことができました。この「S 評価」は、事業選定された４２件のうち５件にのみ与えられた評価です。また、今年度２月には、「FD 地域人材育成フェスタ」の開催に合わせ、同事業委員会による「フォローアップ現地視察」が行われ、地域・大学間の連携、大学改革との連動が評価され、今後も全国の先導的な取組として積極的に事業を推進することを期待するとの講評をいただきました。



この度、平成３０年度の取組の詳細を成果報告書として取りまとめましたので、ご一読いただければ幸いです。今後は、これまでの取組を発展的に継続していくための体制づくり（コンソーシアム構想）に邁進するとともに、本事業の目標達成に向けて、事業協働機関一体となって地方創生に取り組んで参りますので、更なるご支援、ご協力をお願い申し上げます。

とくしま元気印イノベーション人材育成協議会会長
徳島大学長

野　地　澄　晴

事業概要

「とくしま元気印イノベーション人材育成プログラム」の概要について

本事業の目的は、地元の高等教育機関及び自治体・企業・NPO 等との間で「とくしま元気印イノベーション人材育成協議会（以下「協議会」という。）を組織してインターンシップをはじめとする教育プログラム開発に協働して取り組むことを通して、地域の未来にビジョンを持ち、地域イノベーションに意欲と専門知識等を持って主体的に参画する「元気印」のイノベーション人材を育成することで、新たな就労先の開拓を含めた卒業生の県内就職率の向上を目指すことである。

そのために本事業では、地域イノベーションを通じて徳島県で新たな雇用創出と学生の就職率向上が期待される 4 分野（①次世代技術関連分野、②地域医療・福祉関連分野、③6 次産業化関連分野、④地域づくり・観光・ICT 関連分野）を選定して、この 4 分野に対応した教育プログラムを学内に設けるとともに、事業協働機関に設置する「教育プログラム開発委員会」にも 4 つの分科会を置いて、地域のニーズを分野ごとに把握する。

さらに、産官学協働の取り組みによりインターンシップ受入企業の増加と受入れノウハウの共有を進め、申請大学の教育プログラムや参加校の教育にその内容を反映させる。また、これにより、大学以外の事業協働機関による事業への満足度 100%達成に向けて努力する。その際、インターンシップを受入機関任せにせず、事前学習からインターンシップ、そして事後の振り返りを徹底するため、課題とレポート、ディスカッションを繰り返す「寺子屋式指導法」（チュートリアル方式）を開発して導入する。この教育法の開発と普及のため、「COC プラス FD 委員会」を組織し、教育プログラム担当教員の FD 活動に組織的に取り組む。

加えて、既存のキャリア教育の中に地元で活躍する各分野のリーダーや OB・OG を講師とした、地域の将来のビジョンや地域で働くメリットを学生に伝える講座を取り入れるとともに、参加する高等教育機関との間で「とくしま高等教育コンソーシアム」を組織して、同様の講座や高校生向けの講座、地元企業の合同説明会を共同開催して、地域全体で学生の地域に対する関心を高め、地域に対する誇りや将来ビジョンへの認識を豊かにして、事業協働地域全体の県内就職率向上を目指すことが本事業の目的である。

平成27年度 地（知）の拠点大学による地方創生推進事業 ～地（知）の拠点COCプラス～

とくしま元気印イノベーション人材育成プログラム

徳島の課題 ……●人口減少・超高齢社会 ●若年層人口の流出 ●厳しい財政状況

徳島の可能性 ……徳島県で雇用創出と就職率向上が期待される4分野
① 次世代技術関連分野（LED・自動車・ロボット等）
② 地域医療・福祉関連分野
③ 6次産業化関連分野
④ 地域づくり・観光・ICT関連分野

とくしま元気印 イノベーション人材育成協議会

徳島県内の50機関で事業協働体を組織
- 高等教育機関［徳島大学・四国大学・四国大学短期大学部・徳島文理大学・徳島工業短期大学・阿南工業高等専門学校］
- 徳島県 ● 20の地元企業
- 4つのNPO法人 ● 19の関連団体

事業運営担当コーディネーター

PDCAサイクルの構築　外部評価委員会

徳島大学 人材育成

徳島大学 教育カリキュラム改革
- 全学生が地域志向科目を受講
  地域の文化や地域への理解・愛着
- ボランティアパスポートの普及
  課題に挑戦する元気・覇気

教育プログラム開発担当コーディネーター

4つの分野に対応した教育プログラムの開発
- 専門分野に必要な能力（知識・技術の向上）
- キャリア教育科目の充実
  「徳島の将来ビジョン」「徳島で暮らすメリット」2つの確信
- 寺子屋式インターンシップの導入
  職業人意識とコミュニケーション力の育成

「COC ＋ FD委員会」教育法の開発と普及

参加校

とくしま高等教育コンソーシアム
- e-learningによるweb配信授業の実施
- 地元で活躍するOB・OGによる合同授業
- 教育カリキュラム開発プログラムの導入

協働事業　地域に対する誇りや将来ビジョンの認識
- 駅前協働キャンパス授業の開講
- 学生・父兄向け「合同就職説明会」
- 「創業支援事業」
  ビジネスコンテストなどの起業支援
- 「FD地域人材育成フェスタ」
- 県内インターンシップの拡充（30%増）と企業メンターの導入
- 教育プログラム開発委員会（全機関参画）

協働事業担当コーディネーター

雇用創出
雇用創出に向けた事業
プログラムの政策的な支援と施策への反映
- 産学官金連携による4分野の雇用創出
  - 「LEDバレイ構想」の推進
  - 「とくしま『健幸』イノベーション構想」の推進
  - 「アグリサイエンスゾーン」の構築
  - 「とくしまサテライトオフィスプロジェクト」の推進
- 若者定着促進に向けた取組
  - 地元就職促進・奨学金返還支援制度
  - トビタテJAPAN! 地域人材コース
- 地域と連携した教育・研究活動の実施
  - 「地域連携フィールドワーク講座」の開講

VS東京『とくしま回帰』総合戦略
（平成27年7月策定）



とくしま元気印イノベーション人材

4つの能力
- 地域文化や地域への理解・愛着
- 専門分野の知識・理解
- 明確な職業人意識とコミュニケーション力
- 課題に挑戦する元気・覇気

2つの確信
- 地域の将来に対するビジョン
- 地域で暮らすことのメリット

雇用創出
- 先端技術開発による新領域への展開
- 多職種協働による医療・介護分野の新規雇用
- 6次産業化キャリアアップシステム構築によるイノベーション展開
- ICTを活用した地域づくり、観光等の新規雇用

数値目標 県内就職率を10%増

事業協働機関について

事業協働機関について

地元の高等教育機関並びに自治体・企業・NPO 法人等で「とくしま元気印イノベーション人材育成協議会」を組織して、インターンシップをはじめとする教育プログラム開発に協働して取り組むことを通じて、地域の未来にビジョンを持ち、地域イノベーションに意欲と専門的知識を持って取り組む「元気印」のイノベーション人材を育成し、新たな就労先の開拓を含めた卒業生の県内就職率の向上を目指す。

なお、平成 30 年度は、新たに１１団体が加入し、協議会は計５０団体となった。

機　　関　　名	備　　考
徳島大学	会長（徳島大学）
四国大学	
四国大学短期大学部	
徳島文理大学	
徳島工業短期大学	
阿南工業高等専門学校	
徳島県	副会長（徳島県知事）
一般社団法人 徳島経済同友会	
徳島県経営者協会	
徳島県商工会議所連合会	
徳島県商工会連合会	
徳島県中小企業団体中央会	副会長（徳島県中小企業団体中央会会長）
一般財団法人 徳島県観光協会	
全国農業協同組合連合会徳島県本部	
徳島県農業協同組合中央会	
徳島県木材協同組合連合会	
公益社団法人 徳島森林づくり推進機構	
徳島県漁業協同組合連合会	
公益社団法人 徳島県畜産協会	
一般社団法人 徳島県医師会	
一般社団法人 徳島県歯科医師会	
社会福祉法人 徳島県社会福祉協議会	
一般社団法人 徳島県自動車整備振興会	
日本自動車販売協会連合会徳島県支部	
大塚テクノ 株式会社	
株式会社 丸本	
日本フネン 株式会社	
株式会社 テレコメディア	
社会福祉法人 健祥会	

機　　関　　名	備　　考
社会医療法人 川島会	
有限会社 竹内園芸	
特定非営利活動法人 郷の元気	
特定非営利活動法人 マチトソラ	
特定非営利活動法人 グリーンバレー	
港産業 株式会社	
一般社団法人 徳島新聞社	
藤崎電機 株式会社	
四国化工機 株式会社	
有限会社 樫山農園	
アール・エスホーム株式会社	
株式会社あわわ	
徳島県赤十字血液センター	
廣間組有限会社	
一般社団法人　Ｄｉｓｐｏｒｔ	
徳島トヨタ自動車株式会社	
株式会社松本コンサルタント	
株式会社ＱＬＩＰ	
株式会社ネオビエント	
公益社団法人徳島県建築士会	
特定非営利活動法人ひとつむぎ	

平成30年度実施会議一覧

平成 30 年度実施会議一覧

とくしま元気印イノベーション人材育成協議会…1 回実施

平成 30 年 5 月 14 日（月）14:30～16:00
報告事項 1　平成 30 年度の事業協働機関について 2　COC+事業の概要とこれまでの進捗状況について 3　中間評価（S 評価について） 4　協働事業の報告と展望について 　① 参加校共同授業「徳島の魅力、徳島で働く」 　② 徳島の魅力、徳島で働く～徳島で働くためのガイダンス～ 　③ FD 地域人材育成フェスタ 5　地域との協働教育の報告と展望について 　① ボランティア・パスポート 　② 実践力養成型（寺子屋式）インターンシップ 　③ 四国大学の事業について 6　その他 協議事項 1　平成 30 年度事業計画について 2　コンソーシアム構想について 3　その他

【徳島大学】COC+推進本部執行会議…2 回実施

平成 30 年 7 月 17 日（火）16:00～17:00
協議事項 1　第１回ＣＯＣプラス推進機構会議の開催について 2　補助期間終了後の事業実施体制（コンソーシアム構想）について 3　第３回外部評価委員会の開催について 4　その他 報告事項 1　実践力養成型インターンシップ実施計画及び進捗について 2　参加校共同授業の実施について 3　ＣＯＣプラス事業ニュースレターvol.4 の発行について 4　フォローアップに係る平成２９年度実施状況報告書の提出について 5　その他
平成 30 年 12 月 11 日（火）16:30～17:30
協議事項 1　教育プログラム修了証の発行手続きについて 2　インターンシップ・マッチングシステムについて 3　その他 報告事項 1　「とくしま元気印イノベーション人材育成プログラム」新規参画機関について 2　先行事例調査（「九州インターンシップ推進協議会」視察）について 3　徳島大学インターンシップ専門委員会について 4　ガイダンス「徳島の魅力、徳島で働く～徳島で輝く産業を知る～」の開催について 5　フォローアップ調査（現地視察）について 6　その他

【徳島大学】COC+推進機構会議…1 回実施

平成 30 年 7 月 18 日（水）18:15～19:00
報告事項 1　前年度の事業報告と今年度の事業計画 2　とくしま元気印イノベーター教育プログラムについて 3　寺子屋式インターンシップについて 4　参加校共同授業の実施について 5　その他 協議事項 1　補助期間終了後の事業実施体制（コンソーシアム構想）について 2　教育プログラム開発委員会の開催について 3　その他

教育プログラム開発委員会 兼 協働事業に関するワーキンググループ
及び　参加校協働事業実施委員会…2 回実施

平成 30 年 9 月 26 日（水）10:45～12:00
報告事項 1　平成 29 年度の事業報告 2　平成 29 年度の就職率について 3　平成 29 年度 COC+事業外部評価委員会の実施について 4　その他 協議事項 1　平成 30 年度の事業の進捗・準備状況について ①　参加校共同授業の実施について ②　インターンシップ事業について ③　創業支援事業について ④　 学生＋保護者向け企業ガイダンスの準備について ⑤　ＦＤ地域人材育成フェスタの準備について ⑥　地方創生産官学コンソーシアムとくしまの準備状況について ⑦　その他
平成 31 年 3 月 20 日（水）10:30～12:00
報告事項 1　創業支援事業の取り組み 2　実践力養成型（寺子屋式）インターンシップの取り組み 3　共同授業の取り組み 4　徳島の魅力、徳島で働く～徳島で輝く産業を知る～の取り組み 5　FD 地域人材育成フェスタの取り組み 6　その他 協議事項 1　来年度の実施計画について 2　地域創生産官学コンソーシアムとくしま（仮称）構想について 3　その他

とくしま元気印イノベーション人材育成プログラム外部評価委員会…1 回実施

平成 30 年 8 月 29 日（水）13:30～15:30
報告事項 1　平成２９年度における事業概要について ①　徳島大学の取組 ・「とくしま元気印イノベーター教育プログラム」の編成 ・「実践力養成型（寺子屋式）インターンシップ」の実施 ②　四国大学・四国大学短期大学部の取組 ・ 創業支援事業の実施 ③　徳島文理大学の取組 ④　徳島工業短期大学の取組 ⑤　阿南工業高等専門学校の取組

⑥　協働事業の実施 ・参加校共同授業「徳島の魅力、徳島で働く」 ・「徳島の魅力、徳島で働く ~徳島で働くためのガイダンス~」 ・ＦＤ地域人材育成フェスタ 2 その他 ①　中間評価の結果について ②　コンソーシアム構想の進捗について" 質疑応答・意見交換

コンソーシアムプロジェクトチーム会議…2 回実施

平成 30 年 8 月 7 日（火）15:30～17:00
協議事項 1　コンソーシアム事業の各主体にとってのメリットについて 2　インターンシップのコンソーシアムにおける位置づけについて 3　県内のインターンシップ（ISP）に関する調査方法について 4　その他
平成 30 年 9 月 13 日（木）15:30～17:00
協議事項 1　コンソーシアムＩＳＰアンケートの策定について 2　ＣＯＣ+参加校におけるＩＳＰ実施状況に関する調査について 3　コンソーシアム他大学の事例について 4　その他

【徳島大学】インターンシップ専門委員会…1 回実施

平成 30 年 12 月 25 日（火）16:00～17:00
1）COC プラス事業の概要と進捗状況について 2）各学部等におけるインターンシップ実施状況について 3)その他

協働事業に関するワーキンググループ兼参加校協働事業実施委員会…8 回実施

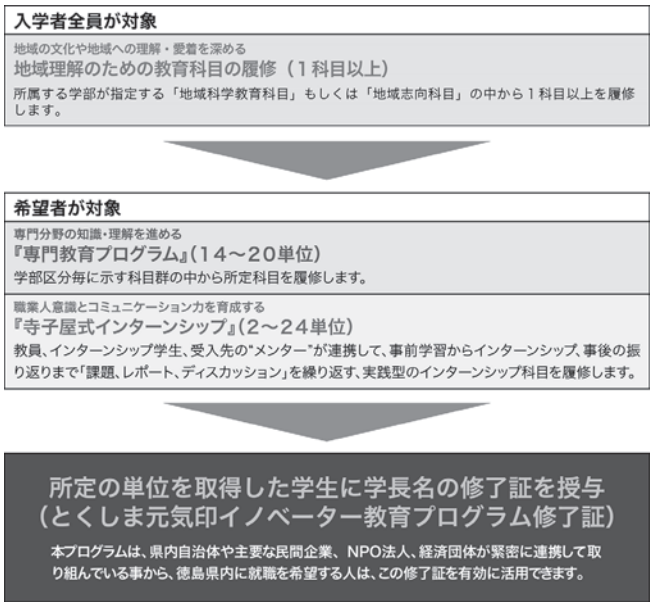
平成 30 年 4 月 25 日（水）10:45～12:00
協議事項 1　今年度の事業計画 2　とくしま元気印イノベーション人材育成協議会の実施について 3　地方創生産官学コンソーシアムとくしま（仮称）について 4　その他 報告事項 1　平成３０年度補助金の交付内定について 2　その他
平成 30 年 5 月 23 日（水）10:45～12:00
報告事項 1　とくしま元気印イノベーション人材育成協議会の開催について 2　実践力養成型（寺子屋式）インターンシップ　インターンシップフェアの実施について 3　その他 協議事項 1　創業支援事業の実施について 2　参加校共同授業「徳島の魅力、徳島で働く」の進捗状況について 3　その他
平成 30 年 7 月 4 日（水）10:45～12:00
報告事項 1　［徳島大学］実践力養成型（寺子屋式）インターンシップの実施について 2　［四国大学］チャレンジショップ他　協働事業報告 3　ニュースレターVol.4 の発行について 4　その他 協議事項

1　参加校共同授業「徳島の魅力、徳島で働く」の実施について 2　コンソーシアムプロジェクトチームについて 3　教育プログラム開発委員会の実施について 4　その他
平成 30 年 8 月 1 日（水）10:45～12:00
報告事項 1　COC プラス推進機構会議の実施について 協議事項 1　参加校共同授業「徳島の魅力、徳島で働く」の実施について 2　教育プログラム開発委員会の実施について 3　学生+保護者向け企業ガイダンスの実施について 4　FD 地域人材育成フェスタの実施について 5　その他 ①コンソーシアムプロジェクトチーム会議の実施について
平成 30 年 10 月 31 日（水）10:45～12:00
報告事項 1　実践力養成型（寺子屋式）インターンシップ中間報告会の実施について 2　コンソーシアム　インターンシップ現況調査の進捗について 3　その他 協議事項（プロジェクトチーム会議） 1　徳島の魅力、徳島で働く～徳島で輝く産業を知る～について 2　FD 地域人材育成フェスタの実施について 3　フォローアップ調査への対応について 4　第 2 回教育プログラム開発委員会の実施について 5　その他
平成 30 年 11 月 28 日（水）10:45～12:00
協議事項 1　徳島の魅力、徳島で働く～徳島で輝く産業を知る～について 2　FD 地域人材育成フェスタの実施について 3　その他 報告事項 1　実践力養成型（寺子屋式）インターンシップ最終報告会の実施について 2　先進事例調査（「九州インターンシップ推進協議会」視察）について 3　その他
平成 31 年 1 月 9 日（水）10:45～12:00
協議事項 1　FD 地域人材育成フェスタについて 2　フォローアップに係る現地視察の実施について 3　第 2 回教育プログラム開発委員会の実施について 4　平成 30 年度事業報告書の作成について 5　その他 報告事項 1　徳島の魅力、徳島で働く～徳島で輝く産業を知る～の実施について 2　実践力養成型（寺子屋式）インターンシップ最終報告会の実施について 3　とくしま学生ビジネスプラン道場最終審査会の実施について 4　その他
平成 31 年 2 月 13 日（水）13：00～14：15
協議事項 1 第 2 回教育プログラム開発委員会及び第 9 回参加校協働事業実施委員会 兼 ワーキンググループについて 2 FD 地域人材育成フェスタの実施について 3 平成 31 年度共同授業「徳島の魅力、徳島で働く」について 4 平成 30 年度事業報告書の作成について 5 その他 報告事項 1　実践力養成型（寺子屋式）インターンシップ最終報告会の実施について 2　とくしま学生ビジネスプラン道場最終審査会の実施について 3　その他

COC＋大学及びCOC＋参加校
実施事業

徳島大学の取組

とくしま元気印イノベーター教育プログラムの編成状況について



徳島大学では、徳島県内に就職して地域の産業振興と地域課題の解決に積極的に参画する「元気印イノベーション人材」を育成するために必要となる「4 つの能力」と「2 つの確信」を付与するための教育カリキュラムと指導方法の開発を進めている。

そのためのプログラムとして、①入学者全員が履修する「地域理解のための教育科目」、②徳島県の未来を想像する 4 分野で活躍するための「専門プログラム」、③「課題・レポート・ディスカッション」を繰り返す「寺子屋式インターンシップ」 の 3 段階のカリキュラムを編成し、所定の単位を取得した学生に学長名の修了証を授与する「とくしま元気印イノベーター教育プログラム」を開発（右図参照）し、平成２８年度以降の入学者が履修できる体制を整備している。

① 入学者全員が履修する「地域理解のための教育科目」

平成２８年度から「地域の文化や地域への理解・愛着を深める」のための地域志向科目を入学者全員に履修させる体制として、教養教育に「地域科学教育科目群」を編成した他、一般教養科目群及び専門科目の中に「地域志向科目」を設定した。このうち「地域科学教育科目群」については、２９年度に１０科目を追加、３０年度にはさらに４科目を追加し２６科目を開講した。

② 徳島県の未来を想像する４分野で活躍するための 「専門プログラム」

各学部のカリキュラムの中から４分野の「当該業種に必要な専門分野の知識・理解」に関わる科目の編成を行い、その中から所定単位数を学生に選択履修させる体制を整備した。

③ 「課題・レポート・ディスカッション」を繰り返す「寺子屋式インターンシップ」

平成２８年度に７つの企業・団体にて「寺子屋式インターンシップ」の試行となる「実践力養成型インターンシップ」を実施し、３５名の学生が参加したことに引き続き、２９年度には、新規科目「実践力養成型インターンシップⅠ」「実践力養成型インターンシップⅡ」を開講し、受入企業・団体も１５団体に増加、正課授業科目として履修できる体制が整った。３０年度には４４名の学生が１６の企業・団体において課題解決型のインターンシップに取り組んだ。

なお、医学部、歯学部、薬学部については、２９年度から実習科目の位置付けを明確にしたことにより「寺子屋式インターンシップ」として履修可能な体制が整っている。

以上のプログラムについて、履修の要項を冊子形式に編集し、年度当初に新入生をはじめ、専門科目が始まる学部２年生にも配付した。

平成 30 年度　実践力養成型（寺子屋式）インターンシップの実施について

1．申請書上の計画と実施について

（1）実践力養成型インターンシップの趣旨・目的

実践力養成型（寺子屋式）インターンシップとは、徳島の企業・団体の抱える経営課題から抽出したミッションに対して、企業・団体と学生が協働して取り組む、プロジェクト型のインターンシップである。特に徳島県にて雇用の創出が見込まれる、次世代技術関連分野、地域医療・福祉関連分野、6 次産業化関連分野、地域づくり・観光・ICT 関連分野の 4 つの分野の企業・団体を中心にインターンシップ実施のための関係構築を行っている。

関係構築後は、受入先の経営者および受入担当者と COC プラス推進コーディネーターが連携してプロジェクトを組み立て、参加希望学生と企業のマッチングを経て、学生がインターンシップに参加するとともに、プロジェクトに取り組む中でのアドバイスやメンタリングなど、インターンシップ開始後もコーディネーターおよびドン（学内メンター）がプロジェクト達成の為の支援を行う。（図１）

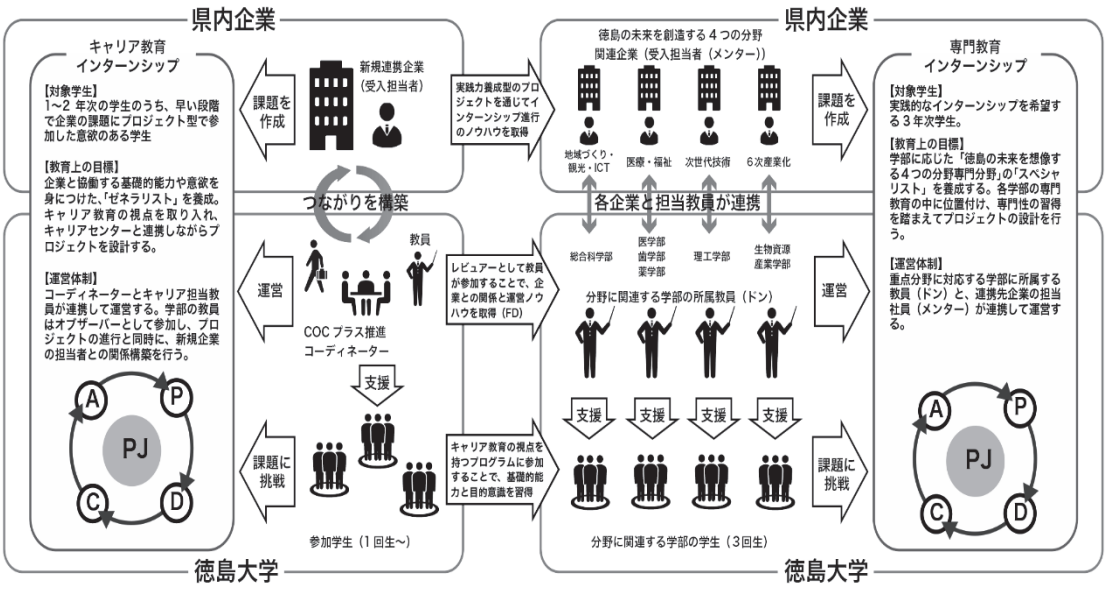


図 1　実践力養成型（寺子屋式）インターンシップ事業スキーム図

（2）計画と実績

(1) 受入団体数と参加学生数

		計画	実績	達成率
29年度	受入団体数	１５社	１５社	１００％
	参加学生数	５０名	５４名	１００％
30年度	受入団体数	１６社	１６社	１００％
	参加学生数	４４名	４４名	１００％

(2) 受入企業・団体

	平成 29 年度	平成 30 年度
COC+参画企業	有限会社樫山農園（２年目） 一般社団法人徳島新聞社（２年目） 大塚テクノ株式会社（２年目） 株式会社テレコメディア	有限会社樫山農園（3 年目） 大塚テクノ株式会社（3 年目） 株式会社テレコメディア（２年目） 株式会社 QLiP（３年目） 廣間組有限会社（２年目） 株式会社ネオビエント（２年目） 有限会社竹内園芸 徳島県農林水産部水産振興課
その他企業	株式会社 QLiP（２年目） 株式会社あわわ（２年目） 日本赤十字血液センター 港産業株式会社 徳島トヨタ自動車株式会社 徳島大学院社会産業理工学研究部 アール・エスホーム株式会社 株式会社松本コンサルタント 一般社団法人 Disport 廣間組有限会社 株式会社ネオビエント	Ｎ＆Ｅ株式会社 株式会社ＮＤＫ 喜多野安心市 四国放送株式会社 一般社団法人大学支援機構 株式会社基 公益社団法人徳島県建築士会 株式会社 AWA-RE

２．平成 30 年度実践力養成型(寺子屋式)インターンシップ実施にあたっての主要改善点と効果

	29 年度	30 年度	効果
体制の変更	本インターンシップを教養教育の正課科目に位置づけ、前期開講「実践力養成型（寺子屋式）インターンシップⅠ」および、後期開講「実践力養成型（寺子屋式）インターンシップⅡ」を実施した。各プロジェクトを 1～2 名の大学教職員が担当した。	・生物資源産業学部の「インターンシップ（専門科目）」との単位互換を開始した。 ・当該インターンシップの修了生が今期インターンシップ生をサポートするしくみが生まれた。	
外部評価委員指摘事項	・とくしま元気印イノベーター人材育成プログラムの一部なのか別なものなのかが分かりにくい。 ・実践力養成型インターンシップについては、寺子屋式インターンシップの試行として実施され, 参加学生、企業の意見を収集した上で 29 年度の正規科目としての開講に結びつけている、内容が充実しており、学生、企業の満足度も高く、進捗は順調、内容は計画以上である。 ・成果目標を設定しにくいが、学生の意欲、能力を評価する手法や視点が必要ではないか。 ・各企業のプロジェクトが丁寧に設計されており高い学習効果につながることが期待される。ただし、評価指標としては思考行動特性を評価できるものが望ましいと考える。 ・「寺子屋式インターンシップ」については従来のインターンシップの分類とは別次元で、様々なインターンシッププログラムにおいて高い教育効果をもたらす仕組みとして機能することが期待される。そのためにコーディネーターと教員、受入企業のメンターの役割を明確にすることが望まれる。	・「コーディネーターを増員して欲しい」、「重要度の高い経営課題を解決するため、複数年での実施を検討して欲しい」、「インターンシップ先の選択肢を拡大して欲しい」といった企業側の声もあるようなので、必要に応じて、対応を検討して頂きたい。 ・現在の取組は関係者の多大な努力によるところが多い。教育の効果、ひいては地元定着の実質的な効果が現れるにはCOC+事業機関よりもずっと長い時間が必要であり、現在の取組を長期的に持続可能なかたちで維持する方策を検討していくことが必要と考えます。 ・事業終了後に向けて、コンソーシアムの具体的な動き（予算や人員配置を含む）を加速していただけることを期待する。 ・イノベーション人材を志向した評価が望まれる。通常の就職活動に用いる「PROG」は不適切であり、より適切な指標を用いる必要がある。	・2019 年４月、COC プラス推進本部事務局は、地域創生センター、大学開放実践センター、研究支援・産官学連携センター産業人材育成部門とともに、新しく人と地域共創センターに統合された。新センターは専任教員４名、コーディネーター４名が所属しており、組織全体で COC+事業に協力する体制に強化した。 ・事業継続を担う組織として 2020 年度にコンソーシアム設立する。2019 年度は設立準備のための協議を進める。 ・従来の PROG に加えて、他の効果測定指標の導入を検討している。

3．実施概要とスケジュール

平成 28 年度から導入、平成 29 年度に正課目となった「寺子屋式インターンシップ」が 3 年目を迎えた今年度。16 受入団体において 44 名が受講、各プロジェクトを 1～2 名のドン（学内メンター；大学教職員）が担当した。

PROG(別添資料①)によるインターン前後の進捗率を計測したところ、知識を活用し問題を解決する能力であるリテラシー及び自分を取り巻く環境に働きかけ対処する力であるコンピテンシーに大きな伸長が見られたことにより、同インターンシップの学習効果が確認できた。(参考資料①~③参照)

(1)平成 30 年度のドン（学内メンター）のプロジェクト担当状況は以下の通りである。

分野	NO	受入団体名	ドン（学内メンター）
次世代技術関連分野	1	大塚テクノ株式会社	川崎　克寛（COC プラス推進コーディネーター）
	2	Ｎ＆Ｅ株式会社	金井　純子（助教）
	3	株式会社ＮＤＫ	原口　雅宣（教授）
地域医療・福祉関連分野	4	株式会社テレコメディア	畠　一樹(特任講師)
6 次産業化関連分野	5	有限会社樫山農園	橋本　直史（講師）
	6	喜多野安心市	田中　佳（准教授）
	7	有限会社竹内園芸	橋本　直史（講師）
	8	徳島県農林水産部水産振興課	後藤　優樹（助教）
地域づくり、観光・ICT関連分野	9	株式会社 QLiP	浮田　浩行（講師）
	10	廣間組有限会社	田口　太郎（准教授）
	11	株式会社ネオビエント	川崎　克寛（COC プラス推進コーディネーター）
	12	四国放送株式会社	日下　一也（講師）
	13	一般社団法人大学支援機構	北岡　和義（講師）
	14	株式会社 AWA-RE	川崎　克寛（COC プラス推進コーディネーター）
	15	株式会社基	川崎　克寛（COC プラス推進コーディネーター）
	16	公益社団法人徳島県建築士会	河村　勝（技術専門職員） 森本　恵美（専門研究員）

(2)参加学生数内訳

16 の受入団体で、1 年生 14 名、2 年生 9 名、3 年生 21 名、4 年生 0 名の計 44 名の学生が参加した。受入団体別参加者数の内訳は以下に記す。

分野	受入団体名	参加学生数（1 年生）			参加学生数（2 年生）			参加学生数（3 年生）			参加学生数（4 年生）			合計
		総合科学部	工学部/理工学部	生物資源産業学部	総合科学部	工学部/理工学部	生物資源産業学部	総合科学部	工学部/理工学部	生物資源産業学部	総合科学部	工学部/理工学部	生物資源産業学部	
次世代技術関連分野	大塚テクノ株式会社		1	1					2					4
	Ｎ＆Ｅ株式会社							1	1					2
	株式会社ＮＤＫ		1		1				1					3
地域医療福祉関連分野	株式会社テレコメディア				1			3						4
6 次産業化関連分野	有限会社樫山農園			3						1				4
	喜多野安心市	1					1							2
	有限会社竹内園芸	2					1							3
	徳島県庁農林水産部水産振興課									2				2
地域づくり・観光・ICT関連分野	株式会社 QLiP				1				1					2
	廣間組有限会社				1				1					2
	株式会社ネオビエント	1			1		1	1						4
	四国放送				1				1	1				3
	一般社団法人大学支援機構							1	1					2
	株式会社 AWA-RE		1	1					1					3
	株式会社基			1					1					2
	公益社団法人徳島県建築士会	1							1					2
合計		5	3	6	6		3	6	11	4				44

(3)実践力養成型(寺子屋式)インターンシップ　年間プログラム実施スケジュール

時期	項目	
4 月	**企業訪問・プロジェクト組み立て** コーディネーターが受入団体を訪問し、プロジェクトの組み立てを行う。・・・①	**学内広報・周知** ・新入生オリエンテーションでの広報 ・2 年生向けガイダンスでの広報 ・キャリア支援室主催 ISP 説明会での広報 ・授業での広報 ・実践力養成型 ISP ガイダンスの実施 ・エントリーシート書き方講座の実施 ・追加プロジェクト説明会の実施
	インターンシップフェア開催（4 月 26 日） 受入団体が学生にプロジェクトの紹介を行うインターンシップフェアを開催。 （プレゼン企業 15 社 / 来場者数 161 名）・・・②	
5 月	**マッチング** 受入団体とエントリー学生が面談を行い、マッチングを行う。・・・③	**事前講習** 受入団体担当者に対し事前講習を実施。・・・④
6 月	**事前研修** 参加学生に対し、コーディネーターが事前研修を実施。・・・⑤	**第 1 回ドンミーティング** 各プロジェクトを担当するドン（学内メンター）とコーディネーターがインターンシップの進め方等について協議。・・・⑦
	効果測定の実施（1 回目：インターン参加前） 社会人基礎力を測る自己分析テストを受験。・・・⑥	
7 月	**インターンシップ開始** プロジェクト毎に随時インターンシップ開始。 受入団体数 16 社 / 参加学生数 44 名	**企業訪問** インターンシップスタートアップの企業訪問。・・・⑧
8 月		
9 月	**ポスターセッション講習を実施** 中間報告会に向けての振り返りとポスターセッションについての講習を実施。	
10 月	**中間報告会開催（10 月 6 日）** プロジェクトの進捗報告、気づきの共有のため、中間報告会を開催。 ①各プロジェクトチームのポスターセッション ②他プロジェクトの参加学生・受入団体との情報交換・・・⑨	**企業訪問** 中間報告会後の受入団体訪問。 ・プロジェクトの進捗確認 ・学生の取り組み姿勢 等・・・⑧
11 月		
12 月	**最終報告会に向けたフォローアップ** 最終報告会に向けての資料作成アドバイス、プレゼン練習などを実施。	**企業訪問** 最終報告会前の受入団体訪問。 ・最終報告会についての説明 ・プロジェクトの進捗確認 等・・・⑧
	効果測定の実施（2 回目：インターン参加後） 社会人基礎力を測る自己分析テストを受験。・・・⑥	
1 月	**最終報告会（1 月 12 日）** プロジェクトの成果報告を行う最終報告会を実施。（来場者数 116 名） ①学生+企業報告（全体向けショートプレゼンテーション） ②学生報告（分科会形式のプレゼンテーション） ③企業報告（分科会形式のパネルディスカッション）・・・⑩	
	学生向け振り返り会兼 PROG 解説会（1 月 26 日） インターンシップに参加しての学びを深めるための振り返り会を実施。・・・⑪	
2 月	**受入団体振り返り会（2 月 5 日）** 今回のインターンシップの知見の共有と来年度のインターンシップの課題について協議。・・・⑫	
3 月		**第 2 回ドンミーティング** 各プロジェクトを担当するドン（学内メンター）とコーディネーターが次年度の方針について協議。・・・⑦

実践力養成型(寺子屋式)インターンシップ　年間プログラム実施スケジュール

※項目番号は前ページ「年間実施スケジュール」の表と対応

①プロジェクト組成（企業訪問）（2 月～4 月）

インターンシップ受入先の開拓、及びプロジェクトの組み立てを行うため、県内企業及び団体への訪問を実施した。

経営者ならびに受入担当者とコーディネーターが協議を行い、①経営と直結した課題であること、②課題解決が受入団体の益になること、③学生にとって充分な学習効果が見込まれること、という 3 つの条件のもとにインターンシップで取り組むべき課題を整理し、プロジェクトを組み立てた。

受入団体とコーディネーターが共同でプロジェクトを組み立てることで、インターンシップの事前準備段階での受入団体の負担を軽減した。また、課題解決型のインターンシップとすることで受入団体にとってのメリットを明確にする効果を図った。

②インターンシップフェア（4 月 26 日）

組み立てたプロジェクトの内容を学生に伝え、インターンシップへの参加を募るため、受入先担当者から学生に向けてプロジェクトを紹介するプログラムを実施した。（16 団体がそれぞれのプロジェクトを紹介）

第 1 部は、各受入団体が参加学生全体に向けて 3 分でプロジェクトを紹介するプレゼンテーションを実施した。第 2 部は、各プロジェクトのブースを設け、興味を持った学生がプロジェクトの詳細な説明を受ける個別説明会を実施した。

③エントリー受付およびマッチング（5 月～6 月）

インターンシップ開始後のミスマッチを防ぐため、インターンシップへのエントリー学生と受入先担当者が面談する場を設けた。受入団体からは、学生の参加動機や志望理由、その他の活動（アルバイト、部活、授業等）の状況等を、学生からはプロジェクトの内容や実施日程等についての確認を行い、プロジェクトへの参加に関しての諸条件や最終意思を相互に確認した。

④受入団体向け事前講習（5 月）

受入団体担当者を対象に、学生受入にあたっての留意点(学生への対処法、法令等)について、事前講習会を実施した。

⑤学生向け事前研修（6 月）

インターンシップ開始後の活動を円滑に進めるため、社会人基本動作などのマナー講習や、プロジェクトの推進に必要となる基礎知識等を学ぶ研修を実施した。

⑥効果測定の実施（6 月、12 月）

インターンシップ参加前と参加後での学生の社会人基礎力（ジェネリックスキル）をはかるため、効果測定を実施した。本インターンシップ参加者の学生、約 50 名に受験を実施した。

⑦ドンミーティング（ 6 月、3 月）

各プロジェクトを担当するドン（学内メンター）とコーディネーターで各プロジェクトの進め方や進捗状況等の情報共有を行うと共に、本事業の効果や課題等について協議した。

⑧受入団体訪問（8 月、10 月、12 月）

インターンシップの開始時、中間報告会前、最終報告会前の計 3 回、コーディネーターとドン（学内メンター）が受入団体を訪問し、学生の取り組み姿勢や進捗状況について情報共有を行った。インターンシップを進める中で発生した問題点と、その対応について、受入担当者と大学側が共有することで、プロジェクトの円滑な推進に繋がった。また、上記タイミング以外にも適宜必要に応じて受入団体を訪問し、プロジェクトの円滑化をはかった。

⑨中間報告会（10 月 6 日）

プロジェクトの進捗の中間段階において、これまでの取り組み状況の振り返りを行い自己評価すると共に、各プロジェクトに取り組む受入団体、学生間での情報交換を行い、目標達成に向けた課題

の整理や今後必要となる取り組みの確認、意識の共有を図ることを目的として中間報告会を開催した。

⑩最終報告会（1 月 12 日）

受入団体担当者、事業協働機関担当者、徳島大学学生及び教職員等を招き、インターンシップへの取り組み内容、成果、得られた学びを報告する最終報告会を実施した。

⑪修了生振り返り会（1 月 26 日）

修了生が、インターンシップを通して得られた学びや気づき、参加前後での職業観などの変化について振り返り、これをもとに今後の学生生活の課題を展望するための振り返り会を実施した。

⑫受入団体振り返り会（2 月 5 日）

受入団体が、インターンシップの振り返りをもとに知見を共有し、次年度のインターンシップ事業の課題について協議するための振り返り会を開催した。今年度の受入団体と次年度の受入を検討する COC+事業関連団体、およびドンが参加し、インターンシップ実施の効果を共有すると共に、負担となった点・問題点の整理と対応策を協議した。

４．徳島県連携事業

(1)徳島県地域グローカル人材育成事業トビタテ！留学 JAPAN 地域人材コース（COC+連携コース）

徳島県地域グローカル人材育成事業トビタテ！留学 JAPAN 地域人材コースと連携し、COC+連携コースを設置。県内企業のうち海外での事業展開の強化推進を図る企業３社を対象に、参加校から参加者を募り、イギリスや東南アジア周辺国への留学体験も含めた課題解決型インターンシップを実施した。

COC+連携コース概要

受入団体名	期間(予定)	プロジェクトテーマ	留学先	参加学生
市岡製菓株式会社	H.30 年 8 月～H.30 年 9 月	ベトナムの市場調査を元に現状分析を行い、効果的なブランディング方法を提案・実践する	ベトナム	四国大学 4 年 象潟　奈央
四国化工機株式会社	H.30 年 8 月～H.30 年 9 月	日本での豆腐の売り上げを拡大する	イギリス	徳島大学 3 年 齊藤　晴菜
株式会社基	H.30 年 8 月～H.30 年 9 月	「徳島県産品」と「歴史・文化」をマレーシアに発信する	マレーシア	四国大学 3 年 大森　彩波

5 .プロジェクトの内容と成果について

1．大塚テクノ　株式会社

【ミッション】新時代に向けた働き方改革　社員満足度向上プロジェクト

（1）プロジェクト背景・目的

社員満足度の向上、働きやすい職場環境への取組みとして、生産性向上、業務効率化を進めていきたいが、一部業務の社外委託を推進する一方で、社内に知識やノウハウの蓄積が進まず、社員サービスの低下を招く恐れが生じている。

そこで、業務の効率化×社員満足度 UP を目指せるシステムの構築を目的とし、具体的に、健康保険の申請を各社員が個々で申請できるようなシステムの完成を目指した。

（2）スケジュール

時期	実施内容
7 月	健康業務の実態をヒアリング ⇒健康保険サイトの問題点を洗い出す
8 月	健康保険内容の認知度 UP を目指して ⇒社内アプリの導入案 費用対効果 ⇒社内システム Xpoint の拡大へ
9 月	システムの制限を考慮 ⇒ppt を使った書類検索システムの製作 申請書類検索のロジック作成 ⇒システムの下地を構築
10 月	簡易システム完成 ⇒見やすさ、使いやすさを考慮
11 月	企業報告会

（3）実績・成果

社内のポータルサイトに健康保険書類検索 Book を up し、各社員が自力で健康保険の申請が出来るシステムの構築を行った。その結果、大塚グループ内で申請業務を行っている部門に直接問合せが行えるようになり、より専門性の高い対応を社員が得られるようになった。

今後は、今回の成果物を基盤に、他の業務についてもシステム化を進めていくことや、書類の提出を電子化していくことを考えている。

（4）プロジェクトメンバー

	氏　　名　（　所　　属　）
受入団体担当者	千葉　雄介（人事総務部　次長）、中山　真一（人事総務部　係長）
学生	角宮　大輝（徳島大学理工学部理工学科 1 年生） 篠原　将希（徳島大学理工学部理工学科 3 年生） ユン　ジェヒョン（徳島大学生物資源産業学部生物資源学科 1 年生） 森本　美沙希（徳島大学理工学部理工学科 3 年生）
ドン(学内メンター)	川崎　克寛（ＣＯＣプラス推進本部　コーディネーター）

（5）ドン（学内メンター）コメント

興味深かったのは、インターン生達がその場の効果や効率を向上させるためにミーティング等の進め方を独自に創りあげていったところです。その背景には受入先様、担当者様による配慮があったと聞いています。

学生達の主体性を発露させる環境、事業スピードを加速させていくための指示・命令・アドバイスの仕方、一つ一つの成果に対してのフィードバック、これらの対応に学生達は自身の未来像を重ね、多くの指標と確信、そして課題をいただいたことと思います。



活動の様子

2．エヌ・アンド・イー　株式会社

【ミッション】人と自然を技術でつなぎ、地産地消・地元地域のさらなる活性化をめざす

（1）プロジェクト背景・目的

徳島県産木材を使用し、徳島県内における地産地消、地元地域の活性化に大きく貢献している当社の取組み及びＭＤＦをアピールし、「徳島県産木材利用促進」のさらなる拡大につなげていくと共に、新たなビジネスチャンスの発掘と、今後の人材確保のための情報発信を行っていく。

そのための広報ツールを作成し、徳島県内に広くその情報を発信したい。

（2）スケジュール

時期	実施内容
７月	・N&E、同業社への工場見学等を通して、N&E や MDF について把握する。 ・PR の問題点について調査する。
８月	・決まっていた企画についての構想 ・他大学とのノベルティ制作
９月	・小松島市へのプレゼンテーション
１０月	・N&E の社員が自分の仕事について説明できる媒体「お仕事説明書」の作成 ・木づかいフェアへの参加 ・小学校工場見学

（3）実績・成果

ノベルティやお仕事説明書（社内広報ツール）の作成、とくしま木づかいフェアへの参加、香川短期大学とのインターンシップコラボ、新開小学校出張授業、小松島市での活動（同業他社・市との連携）など 11 企画の実施により、2,523 人への広報効果を得た。

それに留まらず、広報ツール（ノベルティー等）の量産化・商品化が進むと共に、新たなツール拡大に向け社内ベンチャーの検討にまで至った。地元地域である小松島市内の企業連携の枠組みが構築でき、それを起点として小松島市全体へと大きな相乗効果を生み出した。さらには、徳島県から取組内容を高く評価頂き、県の各分野からオファーをいただけるまでになった。それ以外にも、産・学・官の取組みにおいて小松島市の小学校、市内外の高校生、徳島県内外の大学生との継続的取組みの基盤ができるなど、多くの副次的効果を生み出し、副次的効果同士の相乗効果が、また新たな副次的効果へと発展している。

（4）プロジェクトメンバー

	氏　　名　（　所　　属　）
受入団体担当者	籠谷　陽介
学生	檜垣　向日葵（徳島大学総合科学部社会総合学科 3 年生） 若林　拓実（徳島大学理工学部理工学科 3 年生）
ドン(学内メンター)	金井　純子（徳島大学創新教育センター　助教）

（5）ドン（学内メンター）コメント

多くの企業人と接したことで、インターンシップ生の社会性は飛躍的に伸びたと感じます。しかし、学生自身の達成感は低いという結果になりました。後悔や反省もあると思いますが、この経験を自身の適正や思考を再確認する機会とし、仕事観を醸成する糧にしてほしいと思います。



活動の様子

３．株式会社　NDK
【ミッション】知られざる町工場の魅力を発信するプロジェクト

（1）プロジェクト背景・目的

株式会社ＮＤＫの事業は、ＢtoＢ(法人向け取引)が主であり、主要商品が「ＦＡ機械」という特殊な商品であるため、地域の方や学生に対しての知名度はそう高いとは言えなかった。そんなＮＤＫを学生目線で見つめ、地域の方やこれから社会人となる学生に向けてのブランディングプランを共に考える。具体的には、社員へのインタビューを実施し、その取材情報をベースに広報誌を作成。また、広報誌の紹介とともに、インターンシップ期間中に感じた考察を学生の視点から社内プレゼンテーションする。

（2）スケジュール

時期	実施内容
8月	・社員さんの声を聴く（アンケートとヒアリングを行う）
9月	・広報誌の構成を考える（項目・レイアウトの決定）
10月	・文章を考える（載せる文章の推敲、決定）
11月	・広報誌の完成（広報誌を印刷して実際に形にするまで）
12月	・社内プレゼンと報告書の作成
1月	・最終報告会での発表

（3）実績・成果

株式会社ＮＤＫのことをより多くの方に認知してもらうためにパンフレットを作った。今回のパンフレットは就活生が対象なのだが、対象を地域の方や取引先の方に変えても作れるように、かつ、インターンシップ生がいなくなっても継続できるシステムとして「STYLE BOOK」を作った。

パンフレットを作る過程で、直接ＮＤＫと就活生をつなげる手段「ツアー」と、それを会社だけで考え実行するシステムとして「TORISETSU」というものを作った。

副次的な効果として、このインターンシップに社員を巻き込むことで、採用は会社全体で行うという方向性の発信、先輩社員と新入社員の教育の機会やコミュニケーションの増加、今後の会社運営や社員満足度の向上につながった。

（4）プロジェクトメンバー

	氏　　名　（　所　　属　）
受入団体担当者	久米　智之（代表取締役）
学生	幸　大志（徳島大学理工学部理工学科３年生） 横山　智（徳島大学理工学部理工学科１年生） 川村　有理英（徳島大学総合科学部社会総合学科２年生）
ドン(学内メンター)	原口　雅宣（徳島大学大学院社会産業理工学研究部 教授）

（5）ドン（学内メンター）コメント

全般的にメンバーがお互いに力を出し合う形が構築できて比較的順調に進みました。後期授業が始まってからの時間確保や成果物をどのような形でまとめあげるかの問題は、工夫しあってうまくクリアしています。総合的に見て及第点は十分クリアできていますが、夏休み明け以降もっとでることはなかったか？　あるいは今からもう一段できることはないか？　メンバーで議論しあって欲しいと思います。



活動の様子

４．株式会社　テレコメディア
【ミッション】学ぶって楽しい♪　社会人も学生も一緒に学べる　場づくりプロジェクト

（1）プロジェクト背景・目的

昨年確立させたキャリアアップを目指す学生が継続的に入ってくる仕組みと「キャリバイト講座」という人材育成講座があるが、社内での認知度が低く、講座受講者の少なさ・固定化が課題となっていた。「キャリバイト講座」を社員にも定着させ、今ある以上のおもてなしをお客さまに提供できるようになるための学びの場を充実させたい。そのために今年度は「キャリバイト講座」について①認知度 90%以上、②講座受講率 50%以上、③講座参加者常時 5 名を具体的な目標として取り組む。

（2）スケジュール

時期	実施内容
7 月	・ミッション・成果物に対するチーム内での意識統一
8 月	・従業員のキャリバイトに関する意識調査
9 月	・キャリバイト講座の内容決定
10 月	・キャリバイト講座の開催・運営
11 月	・フィードバック

（3）実績・成果

どのような講座に興味があるのか従業員全員にアンケート調査を行い、その結果に沿った講座を企画。「キャリバイト講座」を知ってもらうために動画、ポスター、挨拶運動、朝礼参加、座談会を行った。その結果、「キャリバイト講座」の認知率を 25.7%→88.0%に引き上げ、社員向けキャリバイト講座普及の土台形成ができた。

その過程で、当初は想定していなかった社内向け広報誌ができ、社内研修制度への展開のヒントが生まれた。また、受入担当者やまわりの社員の成長につながった。

今後は講座内容をブラッシュアップする、広告期間を長く取るなどして「キャリバイト講座」を活かしていきたい。

（4）プロジェクトメンバー

	氏　　名　（　所　　属　）
受入団体担当者	平島　夏美、阿部　茜（コーポレートデザイン部）
受入団体メンター	葛籠　枝美（コーポレートデザイン部　部長）
学生	二橋　みづき（徳島大学総合科学部社会総合学科 3 年生） 纐纈　恵利菜（徳島大学総合科学部社会総合学科 3 年生） 竹田　愛美（徳島大学総合科学部社会総合学科 3 年生） 山下　真美（徳島大学総合科学部社会総合学科 2 年生）
ドン(学内メンター)	畠　一樹（徳島大学総合教育センター　特任講師）

（5）ドン（学内メンター）コメント

社内のキャリアアップ講座を開設するという経営課題に対して、導入時期の様々な試練・困難に向き合いながら一定の「成果（認知率、定着率の目標達成）」を挙げることができたと思います。その過程において、スケジュール管理やチームビルディングにはじまり、社員に寄り添いながら“伝える”ではなく”伝わる”といった相手本位の視座に立つことの難しさに向き合いながら、多くの「気づき」と「成長」を得られたのではないでしょうか。

今回の「成果」は企業様にとっては通過点であり、今後の改善案を引き継いでいただくとともに、自身には今回の成長代をさらに研鑽してください。



活動の様子

5．有限会社　樫山農園
【ミッション】①販売スキームの確立　②販売営業企画部の発足

（1）プロジェクト背景・目的

樫山農園では「樫山農業で世界を幸せにする」という経営理念のもと事業を展開している。近年、6 次産業への業態転換を図り、“家業”ではなく“事業”としての農業経営のスタイルを確立することを目指している。それに向け、昨年度は“経営戦略にちなんだ事業戦略を可視化する”をテーマにインターンを実施した。今年度は次のステップとして、“販売スキームの確立”と“販売営業企画部の発足”を社員と共有することを目的とする。

（2）スケジュール

時期	実施内容
7 月	①自社商品が販売されている場所（あいさい広場など）でアンケートによる市場調査を実施。その結果をもとに商品のパッケージを製作。 ②当部署の運営に必要な部署の仮組織案を作成し精度を向上させる。
8 月	①マーケティングにおけるモノと買い手の設定を明確にし、それらを最良な方法でつなげるためのプロセス（セールスプロモーション）を仮定。 ②組織案を確定させ、社員の特性や本人の希望をもとに各部署に人材を配置。一部を実際に現場で運用する。
10 月～11 月	①セールスプロモーションを考え、実際にマルシェなどで何度か販売し検証する。 ②仮運用の結果をもとに、組織案を改良していく。社員に理解しやすい営業販売部の案を仕上げる。
12 月上旬	①検証した結果をもとに、販売スキームを確立する。 ②社員への関心を引き出す視点で、販売営業企画部を発足させる位置づけや意義を見出す。
12 月中旬	①社員へ向けた説明会を実施する。その中でセールスプロモーションの大切さを社員に伝え、経営戦略を社員が理解してもらう。 ②販売営業企画部の発足に至る背景・現状・課題・ビジョンを伝え、社員が新規部署について「意義がある」「面白い」と感じてもらう。

（3）実績・成果

紫もち麦販売スキームの確立。また、新商品や既成商品の販売につなげるための組織づくりに取り組み、４つの部門からなる販売営業部と間接部門について組織化した。

（4）プロジェクトメンバー

	氏　　名　（　所　　属　）
受入団体担当者	堀江　祐輔（フィールド課　係長）
受入団体メンター	樫山　直樹
学生	新田　和加（徳島大学生物資源産業学部生物資源学科 1 年生） 松本　尚子（徳島大学生物資源産業学部生物資源学科 1 年生） 松浦　啓一郎　（徳島大学生物資源産業学部生物資源学科 1 年生） 山本　菜々美（徳島大学生物資源産業学部生物資源学科 3 年生）
ドン(学内メンター)	橋本　直史（徳島大学大学院社会産業理工学研究部　講師）

（5）ドン（学内メンター）コメント

長期の取り組みの中で様々な壁に直面し、グループで仕事をする意味や各々の役割の重要性についての気付きが多々あったと思います。まず、業務の遂行において”何故、困難・壁が出来たのか”を振り返ることが大事です。スケジュール調整・準備やメンバー間で全体の進捗の把握、意思疎通や連携でしょうか。とは言え、スタート当初に比べて格段の改善が見られ、立派な成果物を仕上げるに至りました。今回の経験は将来への財産になります。


活動の様子

６．喜多野安心市
【ミッション】お店を舞台に大実験！“安心市スタイル”店舗運営の方法を探る！

（1）プロジェクト背景・目的

多店舗展開を計画する上で独自の運営スタイルを確立するためにコンセプトを顧客に伝える手法・一人あたりの単価をあげる方法・新規客を呼び込むための集客方法と情報発信の方法の３つの部門を実際に運用できるレベルで考える。

（2）スケジュール

時期	実施内容
７月～８月	・客層を把握するために、店内で 200 人のお客さまに聞き取り調査を行い、集計を行い、仮設のヒントを得た。 ・安心市は自発的に宣伝しないことを方針としている、したがって今回の企画では客同士で宣伝をして認知させることを目標とする。これらの客を「広告客」とする。
９月	・広告客をターゲットとした企画（生産者ブース、お米手帳、分配システム）の内容の決定
10 月	・企画システムの決定
11 月	・検証

（3）実績・成果

安心市の強みである米の販売、サービス向上、またお店全体としての売上アップを図るため、一回購入毎にスタンプが着き、購入履歴が残る「お米手帳」の導入を提案。それにより、顧客の固定化と顧客満足度のアップを図った。また、マニュアルを作成しＰＯＰを作るためのシステムを提案。それによりお客様と生産者と安心市の輪を作り、生産物の差別化を行った。

その過程で、顧客に対する新しい視点を持つことができ、違うアプローチを考えるきっかけとなった。また生産者の方々とのコミュニケーションが以前より取りやすくなり、より協力し合えるようになった。社内では、学生との関わりの中で、危機感を共有することの大切さ、自社の人材育成について視野が広がり、より深い関わり方ができるようになった。

（4）プロジェクトメンバー

	氏　　名　（　所　　属　）
受入団体担当者	中川　純（社員）
学生	藤川　達矢（徳島大学総合科学部社会総合学科１年生） 鎌田　慎也（徳島大学生物資源産業学部生物資源学科２年生）
ドン(学内メンター)	田中　佳（徳島大学大学院社会産業理工学研究部　准教授）

（5）ドン（学内メンター）コメント

喜多野安心市の魅力を的確に把握し、それをより分かりやすく伝え活かしていくための方策を考案できたと思います。ひとつの問題を多面的に追求していく姿勢は、社会のあらゆる場面で求められると思いますので、今後の学生生活の中でもしっかり磨いていってほしいと思います。このたび学生達に貴重な体験をさせていただいた中川さんをはじめ、喜多野安心市の皆様に御礼申し上げます。



活動の様子

７．有限会社　竹内園芸
【ミッション】農家さんとのコミュニケーションツールの作成

（1）プロジェクト背景・目的

竹内園芸は、種から苗までを育て、その苗を販売している育苗会社であり、農業・農家を支えている。しかし現在、農家さんとのコミュニケーションの充実が課題となっている。農家さんのニーズが会社に伝わりづらいために、サービスの向上に繋げにくい状況にある。そこで、コミュニケーションツール作成を３段階に分け、その第１段階として、コミュニケーションシートを作成する。

（2）スケジュール

時期	実施内容
４月－５月	・方向性の統一
６月－７月	・社員ヒアリング
８月－９月	・ヒアリング分析
９月	・農家ヒアリング
10 月－11 月	・シート案作成
１２月	・シート完成

（3）実績・成果

来年度プロジェクトが作成するツールの内容部分であるコミュニケーションシートを社内・農家ヒアリングを行い実用的なものにした。その過程で、映像・画像も使用することによりリアルタイムで苗の状態を確認するなど、文字だけの情報共有でなくコミュニケーションシートにプラスして来年考えるべき機能の発見があった。今後はＦＡＸやメールだけでなく有効に活用できるような通信方法、情報蓄積方法を検討していきたい。

副次的効果としてはこのプロジェクトを進める中で、社員にとって顧客満足度の充実について考えるいい刺激になった。また、農家様に伺った際に聞く項目が明確になり、会話がスムーズにできるようなった。そのことにより、生産物、品種、販売先の提案、他の産地情報など農家様が竹内園芸に求めているものを聞き取りやすくなった。

（4）プロジェクトメンバー

	氏　　名　（　所　　属　）
受入団体担当者	小林　俊之（総務部　部長）
学生	中川　貴澄（徳島大学生物資源産業学部生物資源学科２年生） 田伏　紗希（徳島大学総合科学部社会総合学科１年生） 久保　成美（徳島大学総合科学部社会総合学科１年生）
ドン(学内メンター)	橋本　直史（徳島大学大学院社会産業理工学研究部　講師）

（5）ドン（学内メンター）コメント

受入先である竹内園芸様のご尽力もあり、今回のプロジェクトの柱の一つとなった農家調査、それに基づく社内報告会を立派にこなせたと思います。振り返りとしては、準備過程で何が成功のキーポイントだったのか？　仮に全てを自力で遂行する必要があったならば業務達成＝成功への準備体制とは？　その為にはそのような行動が求められたか？　に想いを巡らせることが欠かせません。また、次年度に向けた業務の引き継ぎも重要なタスクであり、これらからも学びがあったと思います。立派なフィナーレを飾ること、期待しています。



活動の様子

８．徳島県農林水産部水産振興課
【ミッション】漁業就業希望者を募るための広報ツールの作成

（1）プロジェクト背景・目的

徳島県庁は平成 29 年度から「とくしま漁業アカデミー」を開設しており、漁業アカデミーに入ると漁師になるまでに必要な学習や免許取得、さらに徳島の多種多様な港を選んで、その場所で漁師として働いていくことができる。だが、平成 30 年度の研修生は全て県内からの応募であり、全国に十分に認知されていない状況である。

本プロジェクトは徳島の漁業の特徴や魅力、とくしま漁業アカデミーの研修内容・卒業生の現在の暮らしなどを伝える広報ツールを作成して全国に発信することで、全国から漁業アカデミーの応募数を増やすことを目的としたプロジェクトである。

（2）スケジュール

時期	実施内容
7，8 月	・徳島県の漁業を学ぶ
8，9月	・現地にて聞き取り調査
10 月	・広報ツール作成
11 月、12 月	・広報物を広める
2 月	・とくしま漁業アカデミー応募者 10 名を獲得

（3）実績・成果

現在、「とくしま漁業アカデミー」の広報物としてあるリーフレットに加え、本プロジェクトでは新たに漫画とパンフレットを作成した。漫画は、若い世代に共感が得られるよう主人公を就職に悩む若者に設定し、漁業アカデミー入学までの過程が描かれており、親しみやすい内容となっている。パンフレットは、とくしま漁業アカデミー卒業生の現在の暮らしを取り上げ、卒業後の生活を想像することができるようになっている。

これらの広報物は徳島県ＨＰへの掲載、県有施設や「とくしま漁業就業マッチングセンター」に設置されており、今後はＳＮＳを活用して情報発信も視野にいれて考えていく。

（4）プロジェクトメンバー

	氏　　名　（　所　　属　）
受入団体担当者	鈴木　貴志（農林水産部水産振興課主任）
学生	三橋　望未（徳島大学生物資源産業学部生物資源学科３年生） 平田　結風（徳島大学生物資源産業学部生物資源学科３年生）
ドン(学内メンター)	後藤　優樹（徳島大学大学院社会産業理工学研究部　助教）

（5）ドン（学内メンター）コメント

インターンシップ開始直後は、漁業についての知見はほとんどありませんでしたが、現地に何度も足を運び、現役漁師やアカデミー卒業生と交流することで知識を深め、本魚礁アカデミーの課題を早期に洗い出しました。他県の広報ツールやプロモーションと比較することによって他県の漁業と「徳島県」の漁業の差別化を図り、圧倒的に分かりやすいアカデミーの広報物の作成をすることができました。



活動の様子

9．株式会社　QLIP
【ミッション】小学校プログラミング教育用学習指導案作成プロジェクト

（1）プロジェクト背景・目的

2020 年より、全国の小学校にて新たに必修となる「プログラミング教育」に向けて、教育委員会をはじめ教育機関は指導方法について、様々な検討、模索を行っている。小学校の現場ではプログラミング教育をどのように行っていけばよいのか？　そこで、石井町教育委員会・石井町内の小学校と協力し、授業プログラムの実施を行う。 また、実施結果を踏まえて学習指導案をまとめ、石井町教育委員会に提出する。

（2）スケジュール

時期	実施内容
7 月	・実際に全国で実施された授業例を調査
7 月～10 月	・プログラミング教室・ロボット教室に参加
9 月～10 月	・模擬授業を行う際の授業案を作成
10 月～12 月	・小学校で模擬授業を行う
12 月	・石井町教育委員会へ学習指導案を提出

（3）実績・成果

石井町内の小学校、三校で実施した模擬授業に向けて、低学年、中学年、高学年に向けた学習指導案を作成。三校で実施した模擬授業の内容を石井町教育委員会に報告。このプロジェクトにより、民間企業におけるプログラミング教育の役割を把握し、次年度以降の経営方針を固める予定である。

今後は今回作成した小学校での学習指導案をもとに中高でのプログラミング授業に連結・発展させる垂直展開、また、石井町以外の自治体でもプログラミング教育を行うことで、「プログラミング教育のアドバイザー」という地位を確立する水平展開を考えている。

（4）プロジェクトメンバー

	氏　　名　（　所　　属　）
受入団体担当者	江本　大輔（情報責任者）
学生	矢野　里奈（徳島大学理工学部理工学科 3 年生） 山田　恵里花（徳島大学総合科学部社会総合学科 2 年生）
ドン(学内メンター)	浮田　浩行（徳島大学地域創生センター　講師）

（5）ドン（学内メンター）コメント

本プロジェクトでは、2020 年度からの小学校におけるプログラミング教育の実施に当たって、学年に応じた 3 種類の授業内容を考案し、実際に模擬授業を行い内容について検証している。授業の内容は、小学生が非常に興味を持って実施できるものであったが、それ以上に、小学校の先生に対して、具体的な実施例として非常に参考になるものであったと考えられる。

今後、本プロジェクトの内容を教育委員会等を通じて、より多くの小学校の先生方に知ってもらうとともに、プログラミングに必要な論理的思考能力を従来の他の科目でも養えるような内容を検討することや、小学校の先生に対する研修の実施等も検討することが望まれる。





活動の様子

10. 廣間組　有限会社
【ミッション】RRPG 型ツアーを開発せよ！Vol.2

（1）プロジェクト背景・目的

廣間組は木頭地域において、道路の維持管理や治山・治水、災害復旧などの校費によって賄われる事業を請け負い、木頭地域を維持（守る）ことに繋げている。しかし、過疎化にともない人口減少と担い手不足のためその事業が成り立たなくなり、地域維持がさらに困難となることが考えられる。

これらの課題解消のため木頭に人・経済の循環を生み出す必要があると考え、木頭の価値を伝えられるツアーを考案することに至った。

木頭住民が受け継ぎ残してきた歴史・文化、営みをヒアリングにより聴き出し、『木頭がたり』としてまとめる。また、RRPG 型ツアーを考案し、その可能性の検証を行うため、デモツアーの実施・検証を行う。

（2）スケジュール

時期	実施内容
7 月	・現地調査と現場視察
9 月	・現地ヒアリング
10 月	・ツアーデザイン
11 月	・マップ作成
12 月	・ツアーデモ
1 月	・ツアー検証とプレゼン

（3）実績・成果

木頭住民が体験してきたことや歴史・文化、暮らしの知恵をヒアリングによって聴き出し、『木頭がたり』としてまとめた。RRPG 型ツアーを考案し、そのためのツール、ツアープラン作成マニュアルを作成し、デモツアーを実施した。デモツアーの分析・検証により、今後は専門性のあるツアー、五稜箸の販売促進などに取り組む。

（4）プロジェクトメンバー

	氏　　名　（　所　　属　）
受入団体担当者	松本　恭典（環境事務局/局長）
受入団体サポーター	西田　靖人（専務取締役）
学生	田村　文勇（徳島大学理工学部理工学科 3 年生） 篠原　美沙紀（徳島大学総合科学部社会総合学科 2 年生）
ドン(学内メンター)	田口　太郎（徳島大学大学院　社会産業理工学研究部　准教授）

（5）ドン（学内メンター）コメント

廣間組さんとの協働の中で実際のツアー実験までたどり着いたことは一つの成果と言えると思います。また、一方で“やって満足”ではなく、その達成度について問題点を自覚していることは良かったと思います。

ツアーというのはお客さんを相手にすることですので、値段設定やスケジュールについて、主催者側の都合を極力排除する必要があるということです。また、不特定多数（いわゆる大型バス型観光客）を相手にするのか、ニッチ（いわゆるマイカー観光客）を相手にするのか、の検討が不十分だったと思います。

木頭の場合、大型観光バスで来られても地域も困りますし交流も難しい。ならばニッチでリピートしてくれ、学生と同じようなポイントに感動するような人をターゲットにする必要があり、さらにそこにどうすればリーチできるかも要検討でしょう。

とはいえ、体験的に課題認識に至っている点は良いと思います。





活動の様子

11. 株式会社　ネオビエント

【ミッション】5 年後「とくしまマルシェ」を徳島を代表する地域ブランドに育てるために「とくしまマルシェ」の現状を知り、課題に気づくためのプロジェクト

（1）プロジェクト背景・目的

現在約 8000 人であるとくしまマルシェの来場者数を 5 年後に 16000 人へ倍増させたい。そのために初年度の今年は「客」「出店者」「とくしまマルシェに来ていない人」の声を集め、そこから見えるとくしまマルシェの課題、その解決案を企業に提示する。

（2）スケジュール

時期	実施内容
8 月	・徳島経済研究所ヒアリング調査 ・第 1 回とくしまマルシェヒアリング調査（客） 調査内容：客層、交通手段、目的
9 月	・第 2 回とくしまマルシェヒアリング調査（出店者・来ていない人） 調査内容：店の売り、客層 調査内容：マルシェの認知度、マルシェに来ない理由
10 月	・第 3 回とくしまマルシェヒアリング調査（出店者・来ていない人）
11 月	・データ分析
12 月	・対策案の提示（徳島経済研究所へ報告）

（3）実績・成果

実際にとくしまマルシェ会場及び各現場に足を運び、生の声を聞き、試食会、経済研究所ヒアリング、来場者ヒアリング、会場外ヒアリング、出展者ヒアリングを通してデータを収集した。仮説を課題毎に立て対策案をとくしまマルシェの発案元である徳島経済研究所に報告した。

情報発信に関する対応案はすでに運用済のものもあり、今後は実行する対策案の優先順位を検討し、来年度半期で実行、その後の期間で検証を行う。

（4）プロジェクトメンバー

	氏　　名　（　所　　属　）
受入団体担当者	佐藤　博隆
受入団体メンター	藍原　理津子（代表取締役）
学生	前川　智紗子（徳島大学総合科学部社会総合学科 1 年生） 太居　郁弥（徳島大学総合科学部社会総合学科 3 年生） 林　萌（徳島大学総合科学部社会総合学科 2 年生） 山本　桐也（徳島大学生物資源産業学部生物資源学科 2 年生）
ドン(学内メンター)	川崎　克寛（COC プラス推進本部　コーディネーター）

（5）ドン（学内メンター）コメント

とくしまマルシェの現状と課題に気づき、解決案を見出すためのプロジェクトとして臨む。これまでアウトリーチが充分ではなかった客層や出展者へのヒアリング等を通じて、新たな視座から現状把握、課題発見のためのアプローチを行った。

学生からの報告としてビジネスマナーの在り方、事前準備を周到に行うことの大切さなどの見解を聴衆することができた。

現実は、自分たちが想像し、描いたようにはいかない（天候やメンバーとのスケジュール調整も含めて）ということを少なからず痛みを伴いながら経験したことで、それぞれに今後の学生生活において取り組むべき課題を明確にすることができた。今後のインターン生たちの動向に期待したい。



活動の様子

12. 四国放送　株式会社

【ミッション】電波をジャックする！！ワカモノたちのワカモノたちによるワカモノたちのための番組制作プロジェクト

（1）プロジェクト背景・目的

現在、若者のラジオ離れが言われているが、ラジオは災害時にはなくてはならない情報インフラである。そこで、若者に聴いてもらえるようなラジオ番組を制作して放送し、どのような内容の番組であれば聴いてもらえるかを探ることがミッションである。若い世代にラジオの魅力を感じてもらい、将来的に情報インフラとしてのラジオを存続させることにつなげたい。

（2）スケジュール

時期	実施内容
7月末	・若者（徳大生）に対して、ラジオへの関心度をアンケート調査
8月上旬	・既存の番組を聴いてもらい、番組の印象や感想を調査
8月下旬～9月上旬	・放送日や放送時間、担当日、番組内容を具体的に決定
9月下旬～10月	・サークル等へ取材。収録と編集を行う。
11月	・番組の反響を調査し、結果をまとめる。

（3）実績・成果

事前アンケートを元に番組内容を決定し、10月に約15分の番組を5回放送。放送した番組「徳大Style」は高校生の制作意欲を刺激し、実際に県内の高校生が制作する番組「ハイスクール Style」の放送が決定。

このように「徳大Style」は今後、初めてラジオ番組を制作する人にとって雛形として使用できる。また、番組放送の事前・事後アンケートは今後、番組制作をする際の参考となる。

（4）プロジェクトメンバー

	氏　　名　（　所　　属　）
受入団体担当者	中津　一人
受入団体サポーター	早川尚吾(共同代表/コンサルティング事業部長)
学生	高松　有希（徳島大学生物資源産業学部生物資源学科3年生） 吉岡　美紗（徳島大学総合科学部社会総合学科2年生） 川野　真子（徳島大学理工学部理工学科3年生）
ドン(学内メンター)	日下　一也（徳島大学大学院社会産業理工学研究部　講師）

（5）ドン（学内メンター）コメント

非常に難しい課題であったが、スケジュール管理、役割分担を行い、放送に穴を空けることなく番組を制作できた点は評価できる。インタビューで他人から情報を聞き出す能力、声だけで情報を正確に伝える能力など学べた点は多く、回を重ねるごとに成長が確認できた。目的を達成するためには、制作する番組の「内容」と「広報」が重要となるが、宣伝活動に失敗したため、番組内容について評価するのが難しい現状である。Twitterの活用を提案したまでは良かったが、機能させる工夫が必要であった。





活動の様子

13. 一般社団法人　大学支援機構
【ミッション】地域による大学資源を活用したクラウドファンディングの実践と提案

（1）プロジェクト背景・目的

大学支援機構は、Otsucle「おつくる」のクラウドファンディングサービス事業を行っている。これまで多くの案件は「大学発信のプロジェクトや研究に対して地域の方々から支援を募集する」という形で実施しているが、今後は大学が地域から支援されるだけでなく、「地域が大学の研究成果や知識、人材を活用して支援を募集するプロジェクト」を地域で活動する方に提案していきたいと考えている。

（2）スケジュール

時期	実施内容
7月中旬～8月上旬	・プロジェクト方針の策定 ・大手3社（キャンプファイヤー・Ready for・Makuake）の地域条件での成功事例と失敗事例を3つずつ調べ、傾向を分析 ・自社のビジョンや現況の情報共有
8月中旬～9月中旬	・県内の地域案件で起案された方に、起案の動機サービス会社を選んだ理由・資金集めの工夫・サポート体制等をヒアリング調査を実施 ・起案者に対してサポートできることをタイミングに沿って5つ（広報、ネットワーキング、PJ内容、チームビルディング、ハード面）で分類し、メニュー表を作成。 ・実践する起案者の決定 ・起案者に寄り添った「虎の巻」の作成
9月下旬～11月下旬	・起案者に寄り添った「虎の巻」の実践 ・タイミングごとに修正と評価 ・起案者に寄り添った「虎の巻」の完成
12月上旬	・サポート体制「虎の巻」の修正と評価
1月	・サポート体制「虎の巻」の完成

（3）実績・成果

クラウドファンディング（ＣＦ）の実証とフィードバックを経た大学支援機構のサポート体制をまとめた「虎の巻」の作成。「虎の巻」は今後、ＣＦ挑戦へのサポートに活用。

（4）プロジェクトメンバー

	氏　　名　（　所　　属　）
受入団体担当者	橋爪　太（理事長補佐）
学生	本田　剛士（徳島大学理工学部理工学科3年生） 中野　恭輔（徳島大学総合科学部社会総合学科3年生）
ドン(学内メンター)	北岡　和義　（徳島大学教養教育院　講師）

（5）ドン（学内メンター）コメント

インターン開始から終了までいろいろ不安や悩みもあったかと思いますが、クラウドファンディングについての調査や実際の支援を通じて、インターン先である大学支援機構様にとって意義ある成果を残せたのではないかと感じています。

今後どのような仕事に就くにしろ、資金の獲得、ファンの獲得に取り組んだ経験はきっと有意義なものであったと思います。インターン生二人のさらなる飛躍を期待しています。



活動の様子

14. 株式会社　基

【ミッション】「地域商社」が地域産業に対して果たす役割と活用の仕方について整理し、分かりやすく発信する

（1）プロジェクト背景・目的

基は生産者の作った産品を発掘し、魅力を海外へ発信することで地域産業に大きな役割を果たすことを目的とする。しかし、基という会社の役割を知られていないというのが現状である。

そこで、基についてより多くの人に知ってもらうため、配布用の資料を作成し、事業説明会でプレゼンテーションを行う。

（2）スケジュール

時期	実施内容
8 月	・現状把握と状況整理
9 月	・トリセツの雛形作成 ・生産者インタビュー
10 月	・トリセツの構成・デザイン
11 月	・事業説明会の企画、アナウンス
12 月	・事業説明会の開催、総括

（3）実績・成果

基について知っていただくための事業説明用トリセツ（1 枚モノの配布用パンフレット・A3 両面と発表用のプレゼン資料）を作成し、農家に向けた事業説明会を行った。

今後は今回できたトリセツのブラッシュアップを重ね、事業説明会等の機会があれば、社員も自身の会社を PR できるよう活かしていきたい。

（4）プロジェクトメンバー

	氏　　名　（　所　　属　）
受入団体担当者	端村　圭
学生	大曲　未紗（徳島大学生物資源産業学部生物資源学科 1 年生） 梅田　一輝（徳島大学理工学部理工学科 3 年生）
ドン(学内メンター)	川崎　克寛（COC プラス推進本部　コーディネーター）

（5）ドン（学内メンター）コメント

このプロジェクトは“地域商社”という県内においてようやく認知度が高まってきた業態のさらなる周知とその対象者に向けた事業の参画を促し、ＰＲを行うことを目的とした取り組みでした。

インターン生 2 名（後に 1 名となる）がまず直面した壁は“コミュニケーション”でした。チームでことに当たる上で必須となる意思疎通の難しさを知り、また互いに企画・立案を図るための意見交換をしていくなかで、本来であれば“事を為す”ために行うべき議論の場が、気がつけば互いの意見に対する相違点の指摘に留まり、無駄に時間を費やすことも多くありました。さらには終盤、対象者（受益者）に向けたプレゼンテーションを準備していく段階で、メンバーのひとりが離脱し、残るひとりで全行程を担うことにもなり、残った学生は当時の力量以上の成果が求められる場面にも直面しました。

受入先さまである、基、社長さまをはじめ社員の皆様には、本プロジェクトにおいて学生たちに最初から最後まで粘り強く接していただきましたことを心より感謝申し上げます。



活動の様子

15. 株式会社 AWA-RE
【ミッション】食を通じて世界と地域を結ぶプロジェクト

（1）プロジェクト背景・目的

にし阿波では、地域に昔から伝わる農法が世界農業遺産に認定され、海外からの旅行客数も大幅に増加しており、世界から着目を浴びている。一方、その地域の価値を表現した食を提供する事業者は少なく、それを旅行客に提供できる機会が不足している。

そこで、“地域の山の幸を包み込む”をテーマとし、“食”を通して地域の価値を旅行客に提供できる仕組みを開発する。

（2）スケジュール

時期	実施内容
6 月	・祖谷の文化、食、風土について知る。
7 月	・現地調査　祖谷はどんな場所か ・協力企業へ訪問　生産物調査
8、9 月	・製造拠点の決定 ・試作品製作 ・試食会企画
10 月	・試食会開催
11 月	・喫食イメージ ・商品の認定基準　パッケージ　販売法
12 月	・食べ方企画ワークショップ ・商品消費イメージ策定

（3）実績・成果

調査した県西部の農産物データを元に、開発の連携先である有瀬という地域で「有瀬ごんだ焼き」を開発。外国人を対象とした試食会を開催、アンケート調査を行い、その結果から商品の改良を行った。

その商品を現地でどのような状態・環境でどのようにして食べてもらうかというプロモーション方法を考え、実際に祖谷に外国人を招待してその方法を体験してもらい検証した。

今後はそのデータをもとに、商品の改良、種類を増やし、販売ネットワークを構築。来年度の販売に向けて連携先の確定、テスト販売の実施を行いたい。

（4）プロジェクトメンバー

	氏　　名　（　所　　属　）
受入団体担当者	井上　琢斗（取締役）
学生	砂川　佳吾（徳島大学生物資源産業学部生物資源学科 1 年生） 川崎　結梨（徳島大学理工学部理工学科 1 年生） 眞野　雅己（徳島大学理工学部理工学科 3 年生）
ドン(学内メンター)	川崎　克寛（COC プラス推進本部　コーディネーター）

（5）ドン（学内メンター）コメント

昨今、外国人観光客の訪問が目立つ“にし阿波エリア”で行われたプロジェクト。一見して商品開発とも見えなくもない取組みではあるが、目指したのは「地域と訪人をつなぐための機能を持ちうる“何か”」であった。この“何か”を探るところからこのプロジェクトはスタートする。

現地へ訪問、文化・歴史・環境・慣習などの情報を収集し、仮説を立て検証を行う事を繰り返した。そのなかで、チームでは対処しきれないことや難局難題に直面することも多く、一時は進捗が頓挫することもあったが、それらを外部の縁者を頼り、語り、巻き込むことで打開した。

成果を出すまでの過程には多くの軋轢や葛藤はあったものの、最後まで粘り強くやり抜いたことは何よりの経験になったと言える。



活動の様子

16. 公益社団法人　徳島県建築士会
【ミッション】増田建築アーカイブ構築プロジェクト

（1）プロジェクト背景・目的

現在徳島県鳴門市にある市役所、市民会館、文化会館、健康福祉交流センターは DOCOMOMO JAPAN という学術組織に認定された徳島県唯一の建築物である。これらを設計した建築家増田友也の作品は鳴門市に多く存在しているが、ほとんど知られておらず、老朽化から解体が検討されているものもある。そこで私達は増田建築の価値をもっと多くの人に知ってもらうために建築群アーカイブを作成することにした。今年度はステークホルダーを集め、さらにその増加の戦略を打ち出す。

（2）スケジュール

時期	実施内容
6 月下旬～8 月	・増田友也と作品の理解
8 月～11 月	・資料収集
8 月～10 月	・GOAL の下準備
10 月～11 月	・ステークホルダーが集うプラットフォーム創出のため宣伝活動
12 月	・ホームページ作成のキーマンとの接触

（3）実績・成果

より多くのステークホルダー（賛同者・理解者・フォロワー）が集うことのできるプラットフォームを創出するため、マラソン・鳴門バザー・地元有力企業・県内イベント・市役所（検討委員会議）など多方面に出向し、自作のチラシを配布して宣伝。キーマン（ホームページ作成に詳しい方、写真撮影・画像処理技術に長けた方など）との接触を行うことで、プラットフォームの基盤が見えて来た。

（4）プロジェクトメンバー

	氏　　名　（　所　　属　）
受入団体担当者	笠井　義文、山元　尚武、福田　頼人
学生	田中　凌星（徳島大学理工学部理工学科 3 年生） 横山　遙香（徳島大学理工学部理工学科 1 年生）
ドン(学内メンター)	河村　勝（徳島大学技術支援部　技術専門職員）、森本　恵美（徳島大学　社会産業理工学研究部　専門研究員）

（5）ドン（学内メンター）コメント

中間報告までは、企業とインターンシップ生とドンとのミーティング、活動において、学生に増田建築のことを学んでもらい、アーカイブとしての資料収集ということで、学生は受け身（受動的）であったが、中間報告で学生は自分を止まってしっかり見つめ、反省し気付くことができた。その後、学生は意識し能動的に学生主体で取組み始めた。が、あと、プロジェクトを終わらせる計画能力、時間管理能力も足りないものと感じていると思っています。今後、さらに能動力、論理的思考能力、問題解決能力を伸ばしていくことを期待しています。



活動の様子

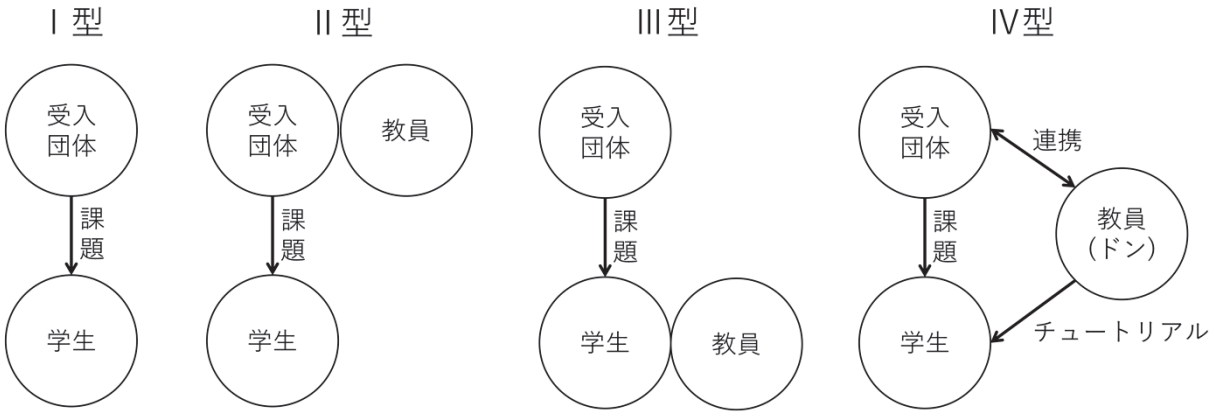
（参考資料①）寺子屋式インターンシップの考え方について

１）寺子屋式インターンシップの位置付け

寺子屋式インターンシップとは、本学が COC プラス事業の一環として導入を進める新しいインターンシップの形式である。受入団体から提示されたプロジェクト型の課題に学生が取り組むに際し、チュートリアル方式を取り入れ、教員が「ドン」となって少人数の学生を担当し、受入団体のメンターとも連携して事前学習からインターンシップ、事後の振り返りまで「課題・レポート・ディスカッション」を繰り返す「寺子屋式指導法」を行うことが大きな特徴である。プログラムやその進め方が受入団体に一任されている従来型のインターンシップと異なり、専門性やプロジェクトマネジメントに知見のある教員が介在することで、より高い教育効果が得られることが期待できる。

インターンシップに参加して社会を擬似的に体験することは、大学の中では得られない学びの機会である。ある種理想的な状況に教育が設計される大学でのプログラムと異なり、実社会では答えの出ない課題、意見や立場の異なる複数の依頼人、実現不可能な要求など、不条理な壁が立ちふさがることも多い。時には壁を乗り越えるだけではなく迂回路を探すようなやり方も模索しつつ、課題解決への道を探らねばならない。効果的に社会の疑似体験を得るためには、このような社会の生の課題に取り組むことが必要であるが、同時に体験が挫折で終わらぬような補助線が得られることも教育上重要である。

企業や団体と関わりながら学生が学ぶにあたり、教員が関わる形式はいくつか考えられる。教員が介在しない従来型のインターンシップ（Ⅰ型）に対して、教員と受入団体が協働で課題を考え、学びのプログラムを開発する形式（Ⅱ型）や、受入団体が課題を提示し教員と学生がチームで課題に取り組む形式（Ⅲ型）が考えられる。



Ⅱ型については、本学理工学部が専門科目として実践している「プロジェクトマネジメント基礎」の教育などが該当するであろう。「プロジェクトマネジメント基礎」では、食品加工を行う企業の食品廃棄物のリユースの手法を学生が考え、企業の担当者からレビューを受けるなど、実社会の課題を扱う PBL としての学習が提供されている。Ⅲ型については、大学院で行われている企業との共同研究や、ゼミ形式で実際の社会課題を学ぶような教育が該当するであろう。

Ⅱ型、Ⅲ型の特徴として、教員が課題設定や課題解決のプロセスの指導にあたることで、限られた時間内で効果的な教育を行うことが可能となるが、Ⅰ型の持つ社会の疑似体験的な側面は弱まる。受入団体（クライアント）と学生の独立した関係を維持しつつ、教員（ドン）が学生に対して補助線を示す役割を担う（Ⅳ型）ことが、寺子屋式指導法の狙いである。

２）寺子屋式指導法の特徴

１）で示したように、寺子屋式指導法においては受入団体（クライアント）と学生の独立した関係を維持することが重要となる。教員は、学生がプロジェクトで取り組む作業を直接指導することは避けなくてはならない。こうした条件下で成功裏にプロジェクトを進めるためには、教員が次の点に留意しながら、受入団体・学生の双方と情報共有をしていく必要がある。

①プロジェクトの最終的な到達目標は、受入団体の経営上の課題とつながるように設定する

プロジェクトで意義のある成果を出すためには、受入団体が学生とともに課題に真剣に取り組む必要がある。インターンシップのためだけに設定した課題では、受入団体側のモチベーションは高まら

ず、各段階の学生の取り組みに対する評価も甘いものとなる。プロジェクトの立ち上げ段階で教員と受入団体がしっかりと協議し、企業側が望む到達目標を設定することが重要である。

②事前にプロジェクトの進め方をプロセス化し、各段階で求められる成果物を設定する

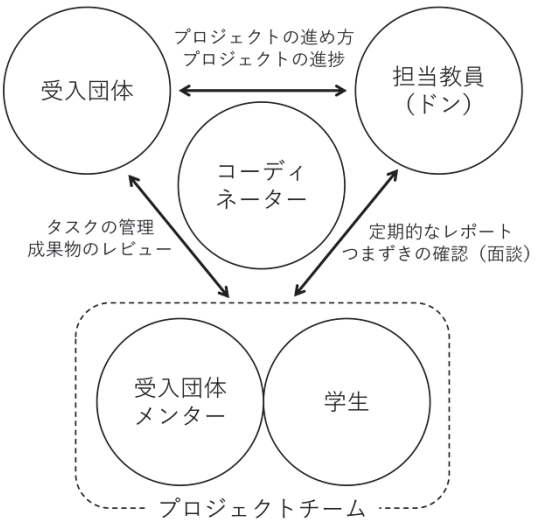
目標到達に向けてプロジェクトを進める中で陥りがちな状況として、受入団体、学生共に次にやるべきことを見失い、徒に議論や会議を重ねるだけで日数が過ぎるケースがある。この状況は、到達目標が抽象的で、受入団体と学生の間で求められる具体的な成果物が共有されていないことに起因する。このような状況を避けるため、プロジェクトの立ち上げ段階でプロセスをいくつかの段階に分け、各段階で求められる成果物を明確にする手法が有効である。

③学生の作成した成果物を定期的に確認し、つまずきに対して適切な助言を行う

目標到達に向けた歩みを停滞させず、つまずきに早期に気がつくためには、頭で考えたり机上で議論するだけではなく、何かしらの具体的な成果物を作成し、適切なレビューを受けることが必要である。担当教員は、取り組みについての報告、受入団体に提出する資料の叩き台、今後の作業計画など、学生に定期的なレポート作成を求め、レポートを作成した意図やプロセスを聞き、必要に応じて助言を行う役割を担う。

以上、3つの留意点をもとに、受入団体、担当教員、プロジェクトチームで行うべき情報共有を示したものが右図である。受入団体のメンターは、プロジェクトの完遂を使命として学生と共有し、両者合わせて一つのチームの意識を持ってプロジェクトに取り組むことが望ましい。

受入団体はチームのタスクを管理し、成果物のレビューを行う。担当教員は受入団体とプロジェクトの進め方、大まかな進捗状況を共有する。そして、プロジェクトチームが作成するレポートと定期的な面談を手掛かりにつまずきを確認し、適宜学生にアドバイスを行う。



3）コーディネーターの役割

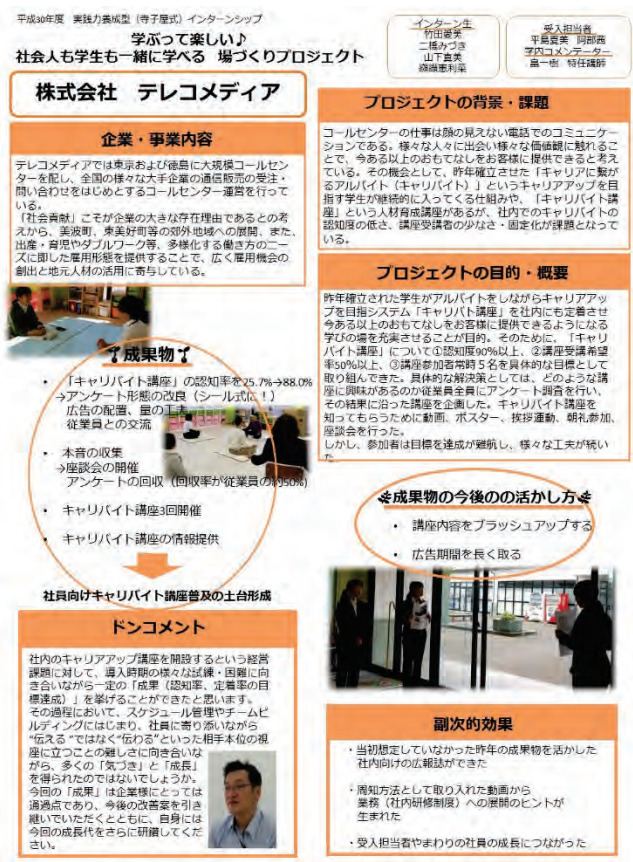
コーディネーターは、受入団体と担当教員、担当教員とプロジェクトチーム、プロジェクトチームと受入団体が情報共有を行う場にオブザーバーとして参加し、全体的な流れを把握して三者の情報共有が円滑に行われるように調整する。最終的にはコーディネーターが介在せずとも寺子屋式指導法が成立するようにノウハウを蓄積し、担当教員に対して情報提供（FD）を行う。

（参考資料②）合同最終報告会で用いたポスター









平成30年度　実践力養成型（寺子屋式）インターンシップ

樫山UPSTAIRS PROJECT

【メンバー】
山本菜々美、松浦啓一郎
松本尚子、新田和加

【受け入れ担当】
樫山農園　堀江祐輔さん

【ドン】
橋本直史先生

樫山農園

企業概要・事業概要

樫山農園では「樫山農業で世界を幸せにする」という経営理念のもと事業を展開しています。
現在ではトマト、麦、米、大豆、小松菜、しいたけを生産し、BtoB取引中心に農作物を出荷しています。地域人材の育成と事業体制の確立に向けや経営課題の解決を図るため、本インターンシッププラに2016年から取りくんでいます。

プロジェクトの背景

【BtoB取引の拡大】
→六次産業化
→消費者を意識した商品作り
→セールスプロモーション
→販売スキームのある商品ができる
→売れる商品があっても営業部がないと成果ができない
→作った商品をBtoBで販売するためには
　営業部と他部署との連携が必要

プロジェクトの目的

・販売スキームの確立
・営業部を含んだ組織案の策定

成果物

1　**新もち麦販売スキームの確立**
BtoBの販売拡大をするためにもBtoCの観点を持ってないといけない。そのために私たちが取り組んだことはセールスプロモーション、並びにセグメントを考え販売スキームを確立することです。そのための検証として今回のインターンでは米にも麦の販売スキームの確立、特にパッケージやPOPについて取り組みました。

2　**組織案**
新商品、並びに既成商品の販売につなげるための組織づくりとして取り組みました。現在の樫山農園では、大体の役割を担っている人はいますが枠組み化されていません。そのため今後6次産業化の販売を行う上で会社内の組織をスムーズに動かすために４つの部門からなる販売営業部と関係部門について組織化しました。



成果物波及効果

1．もち麦の販売スキームの確立
2．組織編制
1について
これにより販売スキームを用いたものの売りかたの前例ができた。そもそも販売スキームとはセグメント、セールスプロモーションを用いて自社の商品と消費者をつなげるための仕組みである。また、これらを組み立てるためにはSWOT観点を意識したうえで組み立てることが重要である。また、販売スキームを構築するセグメントとセールスプロモーションを理解することで会社の新商品などがあのずとニーズのある消費者に還切な手段で届けることが可能になる。また、この仕組みを利用するときセールスプロモーションを先に決めておくとセグメントがより明確化する。

2について
組織編制は現状の組織とやっている仕事があいまいな状態から枠組みを作るために行われた。そのため、社員がなぜこの部署の仕事をしているかがよくわからないこともある。また、社員は現状では生産部だけであるが、営業Pr部などに配属されることでより消費者の目線に立ち生産部の仕事に取り組むことができる。そのため、より消費者のニーズに合った生産物を作ることができさらに、商品の付加価値をとげることで、単価をとげることにつながる。また、組織編制を行うことでより個人の得意分野を生かせる部署へ配置されることで活躍の場が増える。そのため、社員自身のモチベーションの向上にもつながる。

ドンレビュー



生物資源産業学部
橋本直史先生

長期の取り組みの中で様々な壁に直面し、グループで仕事をする意味や各々の役割の重要性についての気付きが多々あったと思います。まず、業務の遂行において"何故、困難・壁が出来たのか"を振り返ることが大事です。
同時に、"あの時こうしておけば"と思う事項が各自にある筈です。スケジュール調整・準備やメンバー間で全体の進捗の把握、意思疎通や連携でしょうか？しかし、とは言え、スタート当初に比べて格段の改善が見られ、立派な成果物を仕上げるに至りました。今回の経験は将来への財産になります。自信を持って最後までやり切って下さい。

副次的効果

◎対面販売を通して社員の成長が見えた
BtoC目線における検証段階で徳島マルシェで直接消費者にテスト販売を行ったことで、参加した社員の意識や顔つきが変わりました。樫山農園としてもまでこういった機会を作っていませんでしたが、半年からは毎月の一環として10月11月全ての農作物が揃う時期は対面販売を行っていきたい。

◎社の原点に立ち返れた
日々、当たり前の様に栽培している農産物に対してnsを通して本来の強みを考えることができました。
当初は「安全で安心の美味しいと農産物が当社の商品です」といった考えでしたが、今は「安心安全なのは当たり前、美味しいだけじゃつまらない」という考えにに切り替わりました。
美味しい「○○○」が当社創業時からの本来の強みであり、こだわりがあるからこそ独度も会社の危機を切り抜けてきたのだと理解しました。このいしきをこれからの会社に反映し、社の強みを「伝統」にしていきます。

喜多野安心市

お店を舞台に大実験！"安心市スタイル"店舗運営の方法を探る！

安心市とは？

心神町にある産地直売所です。お客さまと生産者の方をつなぐのが主な仕事です。『安心・安全・新鮮で美味しい野菜をお客さまに食べて欲しい』が会社の理念です。

プロジェクトの背景

将来的に徳島県内中に店舗を展開していくことを考えています。
その中で、必要になっていくのが、現在の店舗のさらなる売り上げアップです。今回のインターンシッププロジェクトでは、安心市の店舗運営の方法を検討していきます

今回のプロジェクトの目的
１安心市のコンセプトを顧客に伝えるための手法を確立させる
２一人当たりの単価を上げるための明確な取り組み方法を生み出す ３ターゲットとなるお客様を呼び込む集客方法と情報 発信の体制を作ること

成果物

お米手帳の導入提案

目的
安心市の強みである米の販売サービス向上、また、お店全体としての売り上げアップを図る。

工夫点
①一回購入ごとにスタンプが付く
②購入履歴を残すこと

成果物の活かし方
①顧客の固定化
②顧客満足度アップ（接客・接遇力の向上によるサービス強化）

POPのシステム提案

目的
popを作成するためのシステム提案

工夫点
マニュアルの作成

成果物の活かし方
①お客様と生産者と安心市の輪を作る
②生産物の差別化

ex



ドンレビュー
喜多野安心市の魅力を的確に把握し、それをより分かりやすく伝え活かしていくための方策を考案できたと思います。ひとつの問題を多面的に追究していく姿勢は、社会のあらゆる場面で求められると思いますので、今後の学生生活の中でもしっかり磨いていってほしいと思います。このたび学生たちに貴重な経験をさせていただいた中川さんをはじめ、喜多野安心市の皆様に御礼申し上げます。



田中先生

【副次的効果】
・プロジェクトを進めていく過程で出たアイデアやアンケート等から自社の顧客に対して新しい視点を持つ事ができた。これによりまた違うアプローチを考えるきっかけとなった
・担当者として得られた気づきで大きかったのはチーム内での危機感を共有することの大切さ。社内での別プロジェクト、日々の業務でも大切にしたいと改めて学ぶ事ができた。
・生産者さんとの関係性がよりよくなった。学生たちが関わってくれた生産者の方々とのコミュニケーションが以前より取りやすくなりより協力し合えるようになった。
・社内での意見が出やすくなり、スタッフの考えと会社の考えをすり合わせる良い機会となった。
・担当者として学生と協力する中で、自社の人材育成について視野が広がりより深い関わり方ができるようになった。

鎌田慎也 藤川達也	ドン　田中佳 担当　中川純

平成30年度　実践力養成型（寺子屋式）インターンシップ

有限会社 竹内園芸

田伏　紗希 久保　成美	PJメンバー 安藤　雅也 /橋本　直史

有限会社 竹内園芸

企業概要・事業概要

「育苗業者」は、苗を育てて苗を農家さんに売ることを仕事としています。農業においては育苗は重要であり、また手間のかかる難しい作業です。そこで、農家さんに代わり苗を作るのが、私たち育苗業者。私たちの仕事とは、いわば農家さんの野菜作りを支える仕事であり、現代農家にとって、育苗は必要不可欠なものなのです。



成果物(Seeds：シーズ・種)

・コミュニケーションシート
…来年度PJが作成するツールの内容部分
　社内・農家ヒアリングを行い実用的なものにした

・コミュニケーションシートにプラスして来年考えるべき機能の発見
…文字だけの情報共有でなく、映像・画像も使用することにより、リアルタイムで苗の状態を確認

竹内園芸：ドンコメント



橋本　直史

受け入れ先である竹内園芸様のご尽力もあり、今回のプロジェクトの柱の一つとなった農家調査、それに基づく社内報告会を立派にこなせたと思います。振り返りとしては、準備過程で何が成功のキーポイントだったのか？仮に全てを自力で遂行する必要があったならば業務達成＝成功への準備や体制とは？その為にはどのような行動が求められたか？に想いを巡らせることが欠かせません。また、次年度に向けた業務の引き継ぎも重要なタスクであり、これらからも学びがあったと思います。立派なフィナーレを飾ること、期待しています。

プロジェクトの背景
(企業としての将来ビジョン等)

当社では、野菜苗を犠種から接ぎ木から接木・育苗して出荷しても、その後農家さん・家庭菜園において定植直後の状態からその後一定期間、どのように生育しているのかの情報を把握していなく、出荷した苗が良い苗だったのかどうなのかを、出荷時の苗の状態だけで判断しています。

今回のプロジェクトの目的

このことから、定植後の生育状態の情報を農家さん・家庭菜園これまで以上にいい苗をお届けし、ひいては農業界の発展に繋ぐことができればと考えています。また、本企画で創出した体制・ルートに、近い将来には、温度・湿度測定、土壌分析等々のサービスを追加し、農家さんへの最適環境作り・栽培方法をアドバイス・提案する「農業サポート・サービス体制」を"新しい農業"として創出していきたいと考えております。

成果物の活かし方

納品先に生育状況確認に伺った際の聞き取り資料としてコミュニケーションシートをすでに活用しています。今後は苗と一緒にコミュニケーションシートを添付したり、FAXメールを利用してお客様からのご意見をいただきますが、有効に活用できるような通信方法、情報蓄積方法を検討していきたいと考えています。
得られた農家様のご要望、ご意見を反映して、将来的に最適な環境で農業を営むことができる様々なサービス、サポートを追加した竹内園芸の良質な苗を提供できるような体制を構築していきます。

副次的効果

農家ヒアリングによって会社側としては想定していなかった内容の回答があり、それを元に行った社内報告会によって社員にとっては顧客満足度の充実について考えるいい刺激になった と思います。
また、農家様に伺った際に聞く項目が明確になり、会話がスムーズにできるようになりました。
そのことにより育苗過程の様子を知りたい、生産物、品種、販売先の提案、他の産地情報など農家さんが竹内園芸に求めているものを聞き取りやすくなっています。

平成30年度実践力養成型（寺子屋式）インターンシップ

漁業就業者を募るための広報ツール作成

平田結菜 三橋望未	徳島県 鈴木主任主事 ドン　後藤優樹先生

受入先：徳島県農林水産部水産振興課

【徳島県農林水産部水産振興課について】

徳島県農林水産部水産振興課は平成27年に策定した「とくしま水産創生ビジョン」に掲げる
①浜を支える意欲ある担い手作り
②次世代へ繋ぐ水産資源と漁場づくり
③競争力の高い産地づくり
④安心・安全で活力ある浜づくり
の４つの基本方向に基づき、関係部局と連携し、「もうかる漁業」の実現に取り組んでいる。



【プロジェクト背景】

徳島県水産振興課は関係機関と連携し、徳島の浜を支える意欲ある漁業者育成を目的に、平成29年度から「とくしま漁業アカデミー」を開設した。徳島の浜を活性化するためには全国から優秀な人材を呼び込む必要があるが、平成30年度の研修生は全て県内からの応募であり、徳島県の漁業の魅力が全国に十分に認知されていない状況である。



【プロジェクト目的】

本プロジェクトでは、徳島県の漁業の特徴や魅力、とくしま漁業アカデミーの研修内容・卒業生の現在の暮らしなどを伝える広報ツールを作成して全国に発信することで、とくしま漁業アカデミー研修生を全国から募ることを目的としている。

【成果物（Seeds：シーズ・種）】

現在、「とくしま漁業アカデミー」の広報物としてリーフレットがある。このリーフレットにはアカデミーのスケジュールや研修生募集要項が記載されている。本プロジェクトでは新たに「とくしま漁業アカデミー」の広報物として、漫画とパンフレットを作成した。漫画は、若い世代に共感が得られるよう、主人公を教職に悩む若者に設定した。物語は漁業アカデミー入学までの過程が描かれており、親しみやすい内容となっている。パンフレットは、実際にとくしま漁業アカデミー卒業生の現在の暮らしを取り上げ、漁業アカデミー卒業後の生活を想像することができるようになっている。また、徳島の漁業の魅力のひとつである多種多様な水産資源に着目しているところや徳島の若い漁師による魚食普及活動の内容を取り上げている。





漫画



パンフレット



【成果物(seeds：種)の活かし方】

- 徳島県HPへの掲載
- 県有施設や、徳島と東京に設置している「とくしま漁業就業マッチングセンター」に設置
- 移住や一定年齢に興味がある方への説明時に使用
- その他、設置が可能なところには随時設置依頼

上の４つを検討している。
これらの広報物を全国に広めるために、SNSを活用しての情報発信も視野に入れて考えていく。今回の成果物は徳島の漁業の魅力やアカデミーの具体的な研修内容・卒業後について記載していることから、漁業に興味がある方の入学を後押しするきっかけとなっている。

【ドンレビュー】

インターンシップ開始直後は、漁業についての知見はほとんどありませんでしたが、現地に何度も足を運び、現役漁師やアカデミー卒業生と交流することで知識を深め、本漁業アカデミーの課題を早期に洗い出しました。他県の広報ツールやプロモーションと比較することによって他県の漁業と「徳島県」の漁業の差別化を図り、圧倒的に分かりやすいアカデミーの広報物の作成をすることができました。

ドン：後藤優樹先生

【副次的効果】

・受け入れ担当者の成長につながりました。
部下を持つ立場にない職員が担当したため、プロジェクトの進捗管理の難しさを始め、今後に活かせる良い経験となったと思います。

・ＳＴＰの重要性に気づかされました。
ブログで情報発信はしておりますが、若者はブログではなくＳＮＳを見るとのことです。
移住を検討している方などをターゲットとしていましたが、それ以上のＳＴＰはあいまいだったと感じています。

平成30年度　実践力養成型（寺子屋式）インターンシップ

小学生向けプログラミング教育カリキュラムの開発

【インターン生】
矢野里奈
山田恵里花

【受け入れ担当者】
江本 大輔
【ドン(学内メンター)】
浮田 浩行 講師

株式会社 QUIP

企業概要

新しい時代に活躍できる人材の育成を目指し、"ICT教育""心の教育""論理的思考の育成"の三本を柱に教育事業を展開する株式会社QUIP(クリップ)。その一部門である「クリッププログラミングスクール」では、"ICT教育"を通じた、公的職業訓練（情報系訓練）などの社会人講座を始め、小中高校生を対象にしたプログラミング講座を実施しています。今後社会において必須のスキルとなるプログラミングの普及・教育に努めて、ます。これまでの詰め込み型授業ではなく、HOWにどうしてどWHYなぜを学ぶ能力を大切にして、徳島の子ども達が世界に通用する人になってほしいと考えています。

プロジェクトの背景

2020年から必修となるプログラミング教育に向けて、教育委員会をはじめ教育機関は指導方法について様々な検討、模索が行っています。小学校の教育現場ではプログラミング教育をどのように行っていけばよいのか、なにから始めればよいのかわからず手探り状態が続いています。株式会社QUIPでは2016年より徳島大学と協働でプログラミング教育の普及に努めており、本年度は石井町教育委員会の協力の元、三校の小学校でプログラミング教育の模擬授業を実施しました。

プロジェクトの目的

2020年必修科目となる小学生向けのプログラミング教育カリキュラムを石井町（自治体）と協働開発する

成果物(seeds：種)

Ⅰ．学習指導案
石井町内の三校で実施した模擬授業に向けて作成した。

①小学校低学年向け授業案
→PCやタブレットを用いずに行う「アンプラグドプログラミング」を題材にした授業案。人間をロボットに見立てて、命令を出して迷路を歩かせる。

②小学校中学年向け授業案
→視覚的にわかやすい教材を使って行う「ビジュアルプログラミング」を題材にした授業案。オリジナルの漢字クイズを作成し、プログラミングの「順次」と「条件分岐」について学習する。

③小学校高学年向け授業案
→ロボットを使って行う「ロボットプログラミング」を題材にした授業案。ロボットの動きを自分達で考えて制御しながら、コースをうまく走るようプログラミングする。



Ⅱ．授業実施報告書
三校で実施した模擬授業の内容を、石井町教育委員会に報告する。（1月下旬予定）現在報告書を作成中

成果物(seeds：種)の活かし方

①民間企業におけるプログラミング教育の役割を把握し、次年度以降の経営方針を定める予定である。具体的には「学校で学んだことをさらに発展できるプログラミング学習」を目指し、コンテンツの充実化を図りたい。

②今回作成した小学校での学習指導案をもとに垂直展開、水平展開を行い、さらなる公教育現場でのプログラミング授業の実施を重ねたいと考えている。

垂直展開：今回作成した小学校低学年・中学年・高学年での学習指導案を中学校、高等学校でのプログラミング授業に連結・発展させる。水平展開：石井町以外の自治体でもプログラミング授業を行うことで「プログラミング教育のアドバイザー」という地位を確立する。



副次的効果

Ⅰ．小学校の教育課程について深く知ることができた。これにより、QUIPのスクール生に対しても、現在の小学校で受けている教育を踏まえたより細やかな学習サポートが提供できる。

Ⅱ．少人数制の自社のスタイルと違った小学校現場での授業を行うことを通して、「一対多」の授業スタイル（バリエーション）が生まれることになった。

Ⅲ．学習指導案の具体的な作成ノウハウを蓄積することができた。これにより、新規コース立ち上げのフローを見直し、目標設定などを明確にする手法を学べた。

Ⅳ．当初予定していたよりも、より具体的に学校現場でのプログラミング教育の問題を把握することができた。
また、授業実施日に観覧いただいた、他の教育機関の方々からも意見を得ることができた。

ドンレビュー

本プロジェクトでは、2020年度からの小学校におけるプログラミング教育の実施に当たって、学年に応じた3種類の授業内容を考案し、実際に模擬授業を行い内容について検証している。授業の内容は、小学生が非常に興味を持って実施できるものであったが、それ以上に、小学校の先生に対して、具体的な実施例として非常に参考になるものであったと考えられる。
今後、本プロジェクトの内容を教育委員会等を通して、より多くの小学校の先生方に知ってもらうとともに、プログラミングに必要な論理的思考能力を伏せ中の他の科目でも使えるような内容を検討することや、小学校の先生に対する研修の実施等も検討することが望まれる。



徳島大学理工学部理工学科機械科 浮田浩行

平成30年度　実践力養成型（寺子屋式）インターンシップ

RRPG型ツアーを開発せよ!Vol.2

【インターン生】
田村 文勇　篠原 美沙紀

【受け入れ担当者】
西田 晴人　松本 恭典
【ドン】
田口 太郎

廣間組有限会社

企業・事業概要

廣間組有限は、徳島県那賀郡の那賀町木頭にて公共土木工事を主体とした地域密着型の総合建設会社である。昭和３３年の創業以来、林道開設や予防治山、国道改良や災害復旧、道路維持管理など地域のライフラインを担ってきた。
「環境保全」にもカを入れており、平成２７年には、日本古来種であるヤマザクラの保全と積極によるcozの削減を行ないながら地域振興を図る「山桜プロジェクト」を立ち上げた。また、木頭杉の間伐材を用いたお箸「五枝箸」の製作・販売も行っている。

成果物（Seeds：シーズ・種）

①木頭がたり　②RRPG（リアル・ロール・プレイング・ゲーム）型ツアー実施
③ツアープラン作成マニュアル　④廣間組の課題

プロジェクトの成果物として（⑤～⑧）が挙げられる。
①：木頭を舞台に体験してきたことや歴史・文化、暮らしに触れることをヒアリングによって聴き出し、まとめたもの。
②：ヒアリング内容を基に住民の体験したことを追体験できるRRPG型ツアーを作成し、12月1、2日にデモツアーとして、参加者5人を招待し実施した。
③：デモツアーに参加者に用いたチラシ、旅のしおり、ツアーマップを作成した。
④：ツアープランを作成のためのマニュアルを作成した。また、他のツアー事例と今回実施したデモツアーと比較し、分析・検証を行った。

⑤：デモツアーの分析・検証を行い、（⑥～⑧）の成果物だけでなく、それ以外のこれらを廣間組の今後の課題・可能性を見つけることが出来た。以下4つ挙げている。
1 一般客向けツアー　（例.今回のデモツアー）
2 専門性のあるツアー　（例.環境教育ツアー、林業ツアー）
3 Woodmeet五枝箸の販売促進）
4 資料・文献の作成　（例.大学との連携→研究で木頭に足を運ぶ）

【成果物(seeds：種)の活かし方】

（⑤～⑧）の成果物の活かし方
・今回インターン生を中心にツアープランを考えた。しかし、今後廣間組社員、その他関係者が新たなツアープランを作成する際、誰でも簡易にカーナビの木頭の座標が検索できるようにする活用していく。
また、①～③の成果物を参考に必要な改善点を改善しながら、今後のツアーに活かしていく。

⑤の成果物の活かし方
・デモツアーの分析・検証の際、基準としたのが以下3点である。
・旅費が掛ける
・廣間組ならでは
・今あるリソースで効果を最大化させる
デモツアーの検証結果、旅費が掛れず、改善が必要であることが分かった。これを基に上記基準を満たし、廣間組ができる事・可能性がある成果物である。これにより、五枝箸の販売促進のため、検証されたツアーの様子を考慮しながら殿り組むという、表裏関係の目標が見えることに繋がった。



徳島大学大学院 社会産業理工学研究部 理工学域 講師 田口太郎

プロジェクトの背景

廣間組は木頭地域において、道路の維持管理や出山・治水、災害復旧などの公共によって携われる事業を通じ真っ、木頭地域を維持することに貢献している。しかし、建設社が減れにつれ、歴史・文化の継承が困難となるだけでなく、主産業であった林業の衰退から山の荒れが進い行かず、災害が起こりやすい状況となっている。さらに、人口減少と担い手不足のため廣間組の事業が受けられなくなり、地域維持ができに困難となることが考えられる。これら課題解消のために木頭に人・経済の循環を生み出す１つの手法として「RRPG型ツアー」を考案し、その可能性の検証を行うため、デモツアーの実施・検証を行う。

今回のプロジェクトの目的・概要

木頭住民が受け継ぎ残してきた歴史・文化、営みをヒアリングにより聴き出し、「木頭がたり」としてまとめる。また、人・経済の循環を生み出す１つの手法として「RRPG型ツアー」を考案し、その可能性の検証を行うため、デモツアーの実施・検証を行う。



【副次的効果】
今回得られた副次的効果は企業、木頭住民、プロジェクト関係者の３者にみられた。

■企業
・今回作成した木頭語りを社員が見て、住民一人一人に思い出や感動があり、それらを"がたり"として次の世代に引き継ぐ大切さ、文化や故郷の大切さを実感し、この"がたり"を広く人に知ってもらい地方創成につなげたいという、新な気持ちが生まれた。木頭勤を通して、廣間組社員の新たな気づきを会み出せることが出来た。
また、自社の製品・サービスや地域の広報を行う交流の場（SNS）が生まれ、周囲や地域社会から会社の事業活動への理解が深まった。

■木頭住民
・ヒアリングを行ったことで、住民自身が郷土への想いを語ることによって、郷土愛への再認識や自覚が促され、誇りを持つことにつながった。
また、木頭語りを見て、地域住民同士の相互理解が深まり、互いを知り、気に掛けることで住民同士が支え合うという福祉的効果が見られた。

■プロジェクト関係者
・今回のプロジェクト、木頭住民と関わったことで、関係者が自身の故郷への関心につながった。

平成30年度　実践力養成型（寺子屋式）インターンシップ

5年後「とくしまマルシェ」を徳島を代表する地域ブランドに育てるために
「とくしまマルシェ」の現状を知り、課題に気づくためのプロジェクト

3年　太居 郁弥
2年　林 萌
2年　山本 桐也

受入担当/
ネオピエント
ドン/川﨑 克寛

株式会社　ネオピエント

企業概要
　イベント事業、地域ブランド創造事業、施設管理運営事業、自治体等受託事業の、主に４つの事業を展開しています。

【イベント事業】
体験型イベントの企画立案・制作・手配・運営までの一括対応
【地域ブランド創造事業】
　産直市「とくしまマルシェ」などを運営
【施設管理運営事業】
「あすたむらんど徳島」などの観光施設等の管理
【自治体等受託事業】
「とくしまLED・デジタルアートフェスティバル」の運営など

観光や暮らしをもっと元気にする事業を行なっています。

成果物（Seeds：シーズ・種）

顧客の思うマルシェの課題「広報の弱さ」
→SNSの運用ができていない。配布場所の限定。
徳島新聞に掲日、当日にとくしまマルシェ開催の情報が載っているため、広報には力を入れていなかったため。
【成果物】来場者ヒアリング
（マルシェ会場で聞き取り調査を実施・109件）

出店者の思うマルシェの課題「収益」
→イベントゾーンに人を呼び込む。
【成果物】出店者ヒアリング
（マルシェ会場で聞き取り調査・48件）

顧客以外の思うマルシェの課題「リピーターの拡大」
→魅力が発信できていない。「飽き」させないための工夫。
【成果物】googleアンケート(学生・ネオピエント社員)
（LINEやメールによる対象者への調査・355件）

成果物の精度・質を高める工夫
・それぞれのニーズや課題点を分析し、共通項を見つけることで今後伸ばしていく最も改善すべき点（上記の３点）を考察する

・イベントゾーンを盛り上げるために、より「マルシェ」を身近に感じてもらう。（中高生を巻き込み、その保護者や友達に来場してもらう）

とくしまマルシェの現状と課題に気づき、経営者を見出すためのプロジェクトとして臨む。これまでアプトバーナーが取り組まれてきた事業内容や顧客へのヒアリング等を通じ、新たな視点から現状把握、課題の発見のためのアプローチを行った。

学生からの視点として、今回のインターンで得た知見として2019年1月19日にヒアリングのモビジネスマナーの在り方(メール文面の書き方/名刺交換の仕方 など)
今後意識を高くするべきこと及び改善のていくことの考察
今後改善を要則に行うことの明確
今メンバー全員のモチベーション維持や学校を会社することの難しさ
今主体的に学に活かさるための仕組みプログラムマネジメントの難しさ
…などの見解を明確することができた。

結果として、自分たちが提案し、携いたものに対しのない状態やメンバーとのスケジュール調整等まだまだ甘いところがたくさん見つかる結果となったことで、それぞれに今後の学生生活において取り組むべき課題を明確にすることができた。
内容のインターン生たちの意向に期待したい。

川崎克寛

プロジェクトの背景
（企業としての将来ビジョン等）
現在約8000人であるとくしまマルシェの来場者数を5年後に16000人へ倍増させたい。

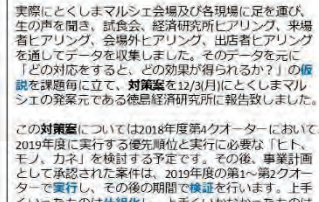
今回のプロジェクトの目的

　初年度の今年は「客」「出店者」「とくしまマルシェに来ていない人」の声を集め、そこから見えるとくしまマルシェの課題、その解決案を企業に提示する

【成果物(seeds：種)の活かし方】

実際にとくしまマルシェ会場及び各現場に足を運び、生の声を聞き、試食会、経済研究所ヒアリング、来場者ヒアリング、会場外ヒアリング、出店者ヒアリングを通してデータを収集しました。そのデータを元に「どの対応をすると、どの効果が得られるか？」の**仮説**を課題毎に立て、**対策案**を12/3(月)にとくしまマルシェの発案元である徳島経済研究所に報告致しました。

この**対策案**については2018年度第4クオーターにおいて、2019年度に実行する優先順位と実行に必要な「ヒト、モノ、カネ」を検討する予定です。その後、事業計画として承認された案件は、2019年度の第1～第2クオーターで**実行**し、その後の期間で**検証**を行います。上手くいったものは**仕組化**し、上手くいかなかったものは打ち切りという形になります。
また、情報発信(HPコンテンツ充実、インスタ、地図案内)に関する対応案では、すでに採用済で運用中の案件もあります。



【副次的効果】
12/3に経済研究所に現在の課題や対策案を報告し、「前年とほぼ同じ内容でとくしまマルシェを運用していればよい」という安定志向ではダメだという認識で一致しました。その結果、来場者を増やすための新たな試みや新規アイデアに挑戦しやすくなりました。

平成30年度　実践力養成型（寺子屋式）インターンシップ

電波をジャックする!!
ワカモノたちのワカモノたちによるワカモノたちのための番組制作プロジェクト

【インターン生】
川野 真子
髙松 有希
吉岡 美紗

【受け入れ担当者】
中津 一人
【ドン】
日下 一也 講師

四国放送 株式会社

企業概要・事業概要

四国放送は、1952年、四国で最初の民間放送局としてスタートしました。「郷土の電波」をキャッチフレーズとして、地域に根ざした番組作りを基本に、テレビ・ラジオ放送を行っています。
今回のインターンシップ受入先である四国放送のラジオ局ではテレビ以上に地域に密着した情報を毎日お伝えしています。

成果物（Seeds：シーズ・種

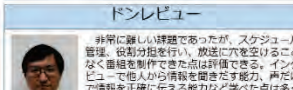
①制作した番組(番組名：徳大Style)
・事前アンケートを元に番組内容を決定し、10月に約15分の番組を5回放送

・放送後の高校生へのアンケートで自分たちも番組を作ってみたいという前向きな意見があった
→「徳大Style」は高校生の制作意欲を刺激した
→実際に高校生が制作する番組「ハイスクールStyle」の放送が決定

②アンケート結果から得た若者の聴取傾向
・事前アンケート
→普段ラジオを聴くか、何に興味があるか、どの時間帯ならラジオが聴けるかなどを調査

・事後アンケート
→制作した番組(徳大Style)の感想や改善点、効果的な広報ツールについて調査

▼アンケート結果の一部



ドンレビュー



徳島大学大学院 社会産業理工学研究部 理工学域 講師 日下 一也

非常に難しい課題であったが、スケジュール管理、役割分担を行い、放送に穴を空けることなく番組を制作できた点は評価できる。インタビューで他人から情報を聞き出す能力、声だけで情報を正確に伝える能力など学べた点は多く、回を重ねるごとに成長が確認できた。目的を達成するためには、制作する番組の「内容」と「広報」が重要となるが、宣伝活動に失敗したため、番組内容について評価するのが難しい現状である。Twitterの活用を提案したまでは良かったが、機能させる工夫が必要であった。

プロジェクトの背景

現在、若者のラジオ離れが言われているが、ラジオは災害時にはなくてはならない情報インフラである。そのラジオに若者にも普段から親しんでもらい、公共インフラとしてのラジオの存続につなげることが現在の課題である。

今回のプロジェクトの目的

若者に聴いてもらえるラジオ番組を制作し、放送する。そして、若者に聴いてもらえる番組の特徴と必要な要素を探る。

【成果物(seeds：種)の活かし方】

①制作した番組(徳大Style)

「徳大Style」を受けて放送が決まった県内の高校生が制作する番組「ハイスクールStyle」が、1月4日から始まっている。

→今後、初めてラジオ番組を制作する人にとって、「徳大Style」は雛形として使用することができる。

②アンケート結果から得た若者の聴取傾向

→若者に聴いてもらえる番組作りは常に放送局の課題となっている。特に番組広報のツール、興味のあるテーマなどはこれまで把握できていなかったものが多かった。今回得られた若者のアンケートは今後、番組制作をする際に参考とする。

【副次的効果】

■ 初めて番組を制作する学生でも週に数時間、取材や編集をサポートすることで自分たちで決めたテーマに沿った番組作りができることがわかった。
→今後初めて番組制作をする人に番組を作ってもらう際・どの程度の手間と時間がかかるのかより想定しやすくなった。

■ 1月から高校生が制作した番組の放送が決定したことで、四国放送と若者とのつながりができた。
→今後も若者の情報が得られるようになった。

平成30年度　実践力養成型(寺子屋式)インターンシップ

地域による大学資源を活用したクラウドファンディングの実践と提案

ISP生：中野恭輔　本田剛士
受入担当：橋爪太　ドン：北岡和義

一般社団法人 大学支援機構

企業概要・事業概要

当社はOTUCLE「おつくる」というクラウドファンディング（CF）のプラットフォーム事業を主にしております。一般的にCFは中小企業などが新製品を開発・販売、新たなサービスを提供する際にインターネットを利用して資金を集める方法です。
当社が行うCFは大学の研究者、大学生の取り組みを社会に認知して頂き、多くの方々からの共感を得て支援して頂くという仕組みです。

プロジェクトの背景

これまでの多くの案件は「大学発信のプロジェクトや研究に対して地域の方々から支援を募集する」という形で実施しています。しかし今後、大学が地域から支援されるだけでなく、「地域が大学の研究成果や知識、人材を活用して支援を募集するプロジェクト」を地域で活動する方に提案していきたいと考えています。

今回のプロジェクトの目的

「地域」による「大学の資源」を活用したクラウドファンディングプロジェクトの提案と実践

成果物（Seeds：シーズ・種）
・クラウドファンディングの実証とフィードバックを経た大学支援機構のサポート体制をまとめた**「虎の巻」**の作成

成果物作成の流れ
Ⅰ 仮説立て（虎の巻の作成）
・CF経験者へのヒアリング調査
・調査を基に「虎の巻」の作成
Ⅱ 虎の巻の検証と修正
・地域で活躍される挑戦者のCFに「虎の巻」を用いてサポート
・挑戦者の方からフィードバックを貰い、「虎の巻」を修正



虎の巻　サポート方法の分類


挑戦者の情報

成果物(seeds：種)の活かし方
Ⅰ CFへの挑戦を考えている方に、大学支援機構が行えるサポートを説明する際に使用する。
Ⅱ 挑戦者へのサポートを提案する際に使用する。
Ⅲ CF挑戦者に対して、CFの準備から終了後まで、計画的なサポートを大学支援機構が行うことができる。
⬇
Ⅳ CFの結果及びフィードバックから「虎の巻」を修正していき、CFの成功率をあげる。成功率の高いCFのサポートを地域の方に提供する。

副次的効果
・地域で活躍している方の中で、CFに挑戦される人を探している時に、阿波市で活動している方に、大学支援機構のことを紹介することができた。またインター期間中の挑戦に繋がらなかったが、今後の案件を獲得することができた。
・実際にサポートしていく中で、おつくるに参加している団体である、「徳島合同証券」の人とコミュニケーションをとることができ、共に挑戦者の方をサポートすることができた。

ドンレビュー



インター開始から終了までいろいろ不安や悩みも多かったと思いますが、クラウドファンディングについての調査や実際の支援を通して、インターンである大学支援機構様ごとって意義ある成果が残せたのではないかと感じています。今後どのような仕事に就くにも、資金の調達、ファンの獲得に取り組んだ経験はきっと有意義なものであったと思います。インターン生の二人の更なる飛躍を期待しています。

平成30年度　実践力養成型（寺子屋式）インターンシップ

「地域商社」が地域産業に対して果たす役割と活用の仕方について整理し、分かりやすく発信する

【インターン生】
梅田一輝
大曲未紗

【受入担当】
岡村圭
近藤尚子　片山和美
【ドン】
川崎克寛コーディネーター

株式会社 基

会社概要
国際物流を担う徳島港湾商校を母体とし、地域産品の海外展開を行う地域商社として設立された会社。
国内外で県産品の商談会を実施し、バイヤーとの交渉や貿易実務などを生産者に代わって引き受け、生産者から国内卸価格で仕入れ、海外販売を行っている。世界の需要が届まる中、基は大手商社の立ち回りの効かない規模生産者が生み出す商品群をもって世界のニーズを探り、現地の声を持ち帰って研究開発に活かしてもらうマーケティングの役割も担っている。

プロジェクトの背景（企業としての将来ビジョン等）
基は生産者の作った産品を発掘し、魅力を海外へ発信することで地域産業に大きな役割を果たすことを目的とする。
しかし基という会社の役割を知られていないというのが現状である。

今回のプロジェクトの目的・概要
基の事業を多くの人に知ってもらうために、配布用の資料を作成し、事業説明会でプレゼンテーションを行う。

【成果物（Seeds：シーズ・種）】
○成果物は、基について知っていただくための事業説明用トリセツ。12/12に農家に向けた事業説明会を行った。トリセツは以下の２つで構成されている。
・１枚モノの配布用パンフレット（A3両面）
持ち帰ってからも確認していただけように作成した。
・発表用のプレゼン資料


↑事業説明会の様子

○作成にあたっての工夫点
・対象者を地元農家に絞り、農家が課題としていることや　ニーズなどを調査。
・他企業のパンフレットや事業説明などを参考に、視聴者に魅力を感じさせる方法などを試行錯誤し、コンテンツや載せる順番などを工夫。
・発表では、聞く人に印象に残してもらえるよう分かりやすい言葉やアクションを取り入れた。
・既存の取引先を訪問し、参画メリットなどを中心にインタビュー。
お話を聞くだけでなく農家さんの思いなども知るため、実際に農業体験をさせていただいた。


配布用パンフレット
表面と裏面

【成果物(seeds：種)の活かし方】
今回できた成果物を参考に、さらにブラッシュアップを重ね、事業説明会等の機会があれば、社員も自身の会社をPRできるよう、活かしていきたい。

【副次的効果】
・社内教育の一環となった。
・生産者様のところで、インター生と一緒に作業体験をさせて頂き、普段お伺いできないこともお伺い出来たり、距離が近くなった。
・事業説明会で、他業種の方との出会いがあり、本事業に活かせる繋がりも出来た。

このプロジェクトは"地域商社"という、県内においてようやく認知度が高まってきた業態のさらなる周知とその対象者に向けた事業への参画を促し(PR)を行うことを目的とした取り組みでした。
インター生3名(後に1名となるが)がまず直面した壁は、"コミュニケーション"でした。チームでことに当たる上で必須となる意思疎通の難しさを知り、また互いに企画・立案を図るための意見交換をしていくなかで、本来であれば"事を為す"ために行うべき議論の場が、気がつけば互いの意見に対する相違点の指摘に留まり、無駄に時間を費やすことも多くありました。さらには、終盤、対象者(受益者)に向けたプレゼンテーションを準備していく段階で、メンバーのひとりが離脱し、残るひとりで企画を担うことにもなり、強った学生は当時の力量以上の成果が求められる場面にも直面しました。

本プロジェクトを通じて学生が得た学び・気づきは以下（2019年1月初旬に行った聞取より）
① **何を選択するか…以上に、いかなるか…取り組むか**
そのときの力量以上の成果が求められる場面において、逃げ出したくなりそうなときもあったが、
ここで終わりをしてしまうことは受入先の方、対象者の方々、また自分にとって何もいいことがない。
退路を考えず一歩前に踏み出そうと"決め"たとき、目の前の景色は変わり、支えてくれる人も周囲に現れた。
② **他者へのリスペクト、自身の考察へのサスペクトが、よりよい対話を生む**
なぜコミュニケーションがとれなかったのかを後日学生本人に聞いた折、その話のなかで出てきた言葉。
③ **時間というものの存在、他者の存在**
誰かと何かをする、ということは、必ずそこに時間と他者の存在がある。締切・連絡・相談は、他者、自分をも含む ミッション、すなわち"公のために行う"ものの。



受入先さまである、基・社員さまをはじめ社員の皆様には、本プロジェクトにおいて学生たちに最初から最後まで粘り強く指導していただきましたことを心より感謝申し上げます。

川崎 克寛

平成30年度　実践力養成型(寺子屋式)インターンシップ

「食」を通じて世界と地域を結ぶプロジェクト

【インターン生】
廣野雅己
砂川佳香
川崎結梨

【受入担当】
井上琢斗
ドン(学内メーター)
川崎克寛

株式会社AWA-RE

企業・事業概要

三好市・美馬市・つるぎ町・東みよし町の2市2町から成る「にし阿波」と呼ばれるエリアで、地域産業に新しい価値を与える触媒として、ツーリズム（観光）事業、教育事業、インダストリー事業の3事業を展開している。
ツーリズム事業ではゲストと地域住民に共感が生まれる旅行体験の提供、教育事業では持続可能性をテーマとした学生・社会人向けの研修コーディネート、インダストリー事業では情報通信や映像制作技術を活用した社会課題の解決および地域の産業創出に取り組んでいる。

プロジェクト背景

にし阿波では、地域に昔から伝わる農法が世界農業遺産に認定され、海外からの旅行客数も大幅に増加しており、世界から注目を浴びている。
一方、その地域の価値を表現した食を提供する事業者は少なく、それを旅行客に提供できる機会が不足している。

プロジェクトの目的・概要

"地域の山の幸を包み込む"を テーマとし、
"食"を通して 地域の価値を旅行客に提供できる仕組みを開発する。

【成果物（Seeds：シーズ・種）】
・調査した徳島県西部の農産物データをもとに、開発の連携先である有瀬という地域で、
商品 "有瀬こんだ焼き" の開発

その商品を用いて
①外国人を対象とした試食会を開催し、アンケート調査を行った。
→アンケート結果から商品の改良

②現地でどのような状態・環境で、どのようにして商品を食べてもらうかという、プロモーション方法を考え、
実際に有谷に外国人を招待してその方法を体験してもらい、どのような効果が出るのか検証した。
→参加者を対象としたアンケート結果からプロモーション方法の改善

⇒地域の価値を提供できる仕組み作りを目指す！！

※アンケート結果は別紙にて配布

【成果物(seeds：種)の活かし方】
・開発した商品の質向上
→これまでの試食会やテストプロモーションデータをもとに、製造元と連携しつつ食品としての質をあげる。
→具材率を増やすことで、商品の種類を増加する。
・今後の本格的な販売を踏まえた事業ネットワークを構築
→事業説明会の開催等による製造、販売ネットワークの拡大。
→来年度内の販売に向けて連携先の確定、テスト販売の実施

【副次的効果】
一つ形ができたことで、にし阿波地元住民の地域活性に関わるモチベーションが増加した。
具体的には、地元住民との会議などの際に「開発したものをどんどん発信・販売していき、この地域の良さを伝えていきたい。」という言葉が出るようになり、また開発した食に使う原料の作付けを増加したりという行動の変化が生まれた。
もともと新しい動きが少ないエリアなので、こうした若者がやってくる取り組みによって地域に良い影響が生まれた。加えて、成果物が地域に残るプロジェクトだったので、地域側も成果が実感しやすいのがよかったと考える。

【ドンレビュー】
昨今、外国人観光客の訪問が注目"にし阿波"エリアで行われたプロジェクト。一見して商品開発とも見えないもない取組みではあるが、目指したのは「地域と訪人をつなぐための接続詞を作ろう」の"作"であった。この"何か"を探るところからこのプロジェクトはスタートする。
現地へ訪問、ヒト・モノ・環境・感覚などの情報を収集し、地元という主語にあるたくさんのキーワードを深掘りさ、訪人という述語にある客層をフランス人観光客に絞り込み、さらに"つながった"状態とはどんな状態なのかをイメージして、仮説を立て検証を行うことを繰り返した。

インター生たちは、対象とする観光客が何を目的に訪れて（NEEDS/WANTS）来訪しているのかをイメージし、地元の人・文化・歴史・環境等を含むリソースとどのようにマッチングさせれば、満足するつながりが生まれるのかを考察し、実行した。そのなかで、チームでは対応しきれないことや、期間離脱に直面することもあり、一時は維持が困難することもあったが、それらを外部の経者を頼り、話し、巻き込むことで打開した。

これらの取り組みにより、インター生は多様な文脈に適応し、様々な課題解決のなかから自ら選ぶための最適な解決策を導き出し、可能な限りのアプローチを試み、た。成果を出すまでの過程には多くの軋轢や葛藤はあったものの、最後まで粘り強くやり抜いたことは間違いの経験となったと言える。

川崎 克寛

平成30年度　実践力養成型インターンシップ

増田建築アーカイブ構築PJ

3年生　田中凌星
1年生　横山亜香

PJメンバー
受入担当ドン

徳島県建築士会

建築士会は、専門知識を生かした様々な社会貢献活動により、建築士業務の進歩発展、ならびに建築士としての品位の保持と地位向上を図り、ひいては建築文化の振興に寄与することを目的とする団体です。各郡市単位に12つの組織があり、徳島県建築士会では、阿波のまちなみ研究会などの研究活動、伝統的木造建築物調査改修モデル事業等の信島県や市町村、その他社団法人からの委託業務、カラーユニバーサルデザイン勉強会や建築士会の出前授業等の社会貢献活動などの活動を行っています。公益的な観点展開や地域貢献活動については、徳島大学を始めとする教育機関、県、市町村と連携を強め、共に県民や一般市民の福祉の増進に寄与しています。

鳴門市や川島町出身の元宝塚大学教授のモダニズム建築によって設計・手がけた作品群が点在しています。増田市なども多くの町工場と、多少時間を要しますが、徒歩圏内にこれらと小公共施設の建築群として残されていることより、あまり知られていませんが、鳴門市には、建築愛好家団体は、以前より、小学校もありのですが、見学者の多少でもいくつかの団体となっており、現在は複数名として活動されている程度です。増田建築の愛称の建築士宝塚出身、元々建築士は、地域の偉人として、増田建築設計して市民をたちと共に、「増田建築を楽しむ建築的な共有するための基本的な概念」を明確な基準と共に知ってもらいたい思っています。そこで今回のプロジェクトでは、増田建築を始めとするインターンシップ生、地元住民や地域貢献団体のための「創造的な建築」の活動などの、様々な人々に向けた広報活動を行っていきたいと思っています。

当市は増田建築を巡れるサイクリングコースの提案が目的だったが、その前に増田建築をもっと一般に浸透させなくては効果が薄いと思われるため、増田建築を良く知ってもらうために
増田建築アーカイブ構築を最終目標に据えて、
今年度でステークホルダーを集め、さらにステークホルダー増加の戦略を打ち出す。

成果物(Seeds:シーズ・種)
プラットフォームの基盤が見えてきた

・より多くのステイクホルダー（鳴門市・建築者・建築者・フォロアー）が集う場の出来るプラットフォームを創出するため、
マラソン・鳴門バザー・地元有力企業・県内イベント・市役所（検討委員会議）など多方面に出向し、目的のチラシを配布して宣伝
SNS記事（FB インスタ　HP）作成。

キーマンとの接触（ホームページ作成に詳しい方、写真撮影・画像処理技術に長けた方、など。）

【成果物(seeds：種)の活かし方】
鳴門市民に頼らず増田建築の存在を知らない方がたくさんいました。増田建築に関する情報も点でばらばらの状況でありました。今年度形成したプラットフォームは情報を集約・共有し、その情報を広く発信していく基盤拠点とすることができた、まさにCOCが掲げる「地(知)の拠点」ともいえる働きを今後担っていける戦略拠点としてこのプラットフォームを活用していく。





形成した現在のプラットフォーム

ドンレビュー
中間報告までは、企業とインターンシップ生とドンとのミーティング、活動において、学生に増田建築のことを学んでもらい、アーカイブとしての資料収集ということで、学生は受け身（受動的）であったが、中間報告で学生は、自分を止めてしっかり見つめ、答えを求めることができた。その後、学生主導（能動的）で学生主体で取り組み始めた。かつ、あとプロジェクトを終わらせる計画能力、時間管理能力も足りないものと感じている。今後、さらに能動力、論理的思考能力、問題解決能力を伸ばしていくことを期待しています。


徳島大学総合科学部
客員特別研究員の文化ルーム
総理博士　河野 勝

【副次的効果】
＜学生＞
・学生に主体性が生まれ自分たちの社会的立場を認識することにつながった。そこから自分たちが他者に対して何が提供できるか考えるようになった。
・建築に関する知識が増えただけでなく、建築物が町や人の記憶にどれほど重要な影響を与えているのかをいろんな人と出会う中で感じられた。
・私たちにはない情報や知識 ツールを持っているひとに積極的に接触を図り、情報量と表現力の幅を広げることにつなげた。
＜建築士会＞
・建築士会は会員数の増加を掲げており、そのためには一般人にも広く周知活動をしていく必要がある。今回のインターンシップを通して市民、学生、メディアなどに周知活動ができたためよい機会であった。
・学生が間に入ることで、建物を残す・残さないという議論から入る（結論に至る）のではなく、まずは認知してもらうこと、その上で各個人が考えて必要に応じて意見を持てばよいという考え方が得られた。学生とともに学術的にアプローチすることで、賛成反対の対極的姿勢を取っ払うことができ、純粋に情報を共有することにつながった。
・チラシ配りなど広報・周知活動を通じて、公益社団法人としての公益目的が果たせている。

（参考資料③）PROG の測定結果

(1)PROG とは

近年、経済産業省が打ち出す「社会人基礎力」や中央教育審議会答申が定義する「学士力」、あるいは文部科学省が主導する「就業力育成事業」にみられるように、大学教育を通じたジェネリックスキル育成への期待が高まっている。PROG は、そのような時代の要請を鑑み、学校法人河合塾と株式会社リアセックが共同で開発した新しいタイプのプログラムである。 従来の自己評価に加え、客観的評価の指標を設けて、ジェネリックスキルを複合的に評価することが PROG の狙いであり、そしてその評価結果から「アクションプラン」を作成して、さらにはジェネリックスキル向上までを支援する総合的な育成フォローを目指している。また、産業界と教育界をつなぎ、人材育成に関するメソッドや言語を共通化して、一体的な取り組みの流れをつくろうという事が PROG 開発の背景となっている。（PROG　HP より引用）

(2)PROG 受験者の属性及び集計対象者について

PROG 受験者の属性及び集計対象者は以下の通りである。

インターンシップ前測定：２０１８年６月（５８名）

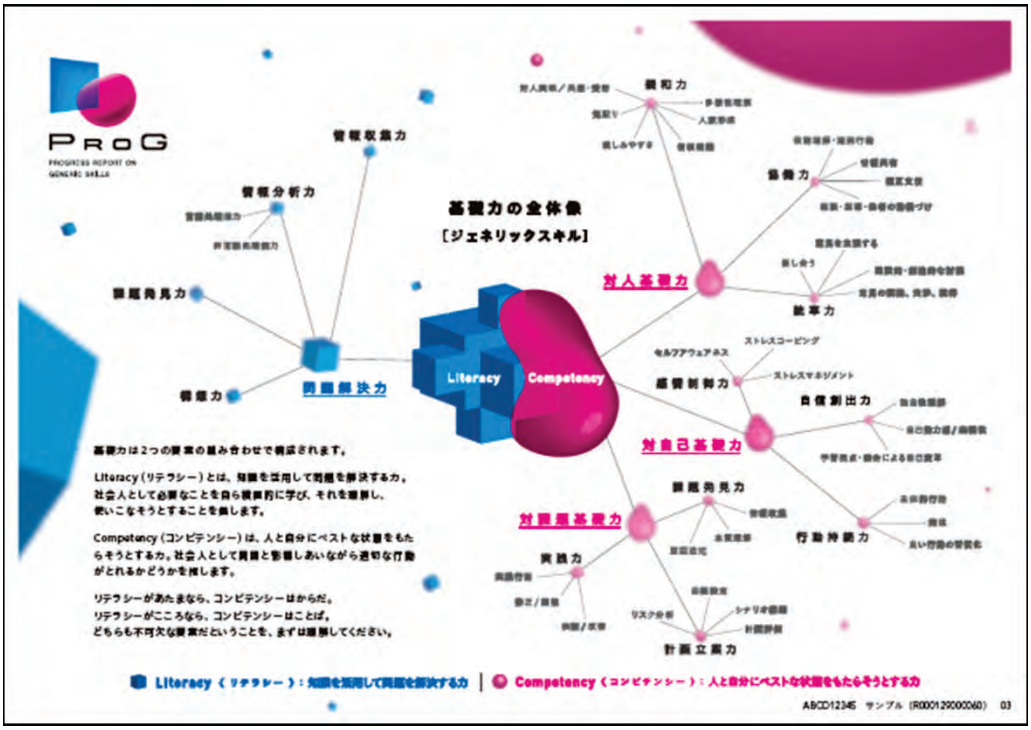
インターンシップ後測定：２０１９年１月（５４名）

※前後とも受験し回答した５２名を集計対象とした。

属性	集計対象者
① COC＋事業に参加者している1・2年生	20
② COC＋事業に参加者している3・4年生	24
③ H28年度・H29年度の事業修了生	8
未回答	2
合計	54

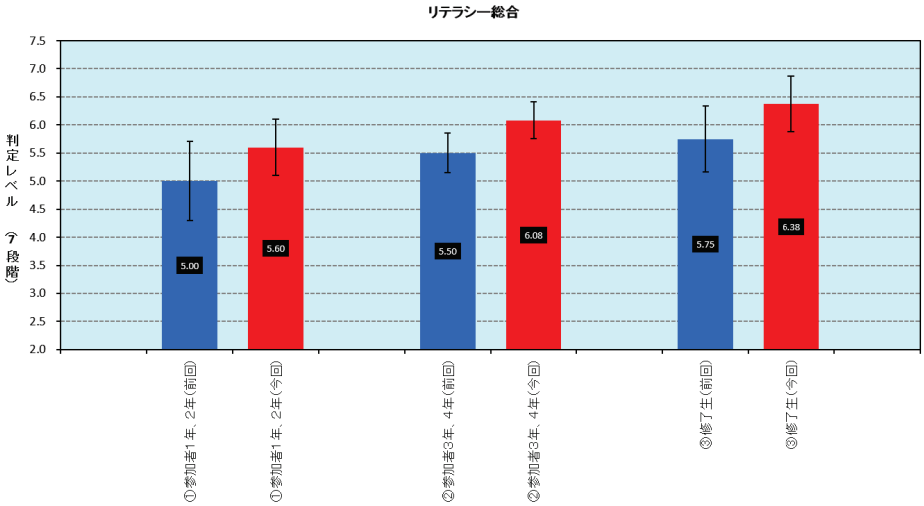
(3)リテラシー及びコンピテンシーについて

PROG では、ジェネリックスキルの中でも知識を活用し問題を解決する能力であるリテラシーを、「情報収集力」「情報分析力」「課題発見力」「構想力」という、問題解決のプロセスに不可欠な４つの要素で測定・評価する。また、ジェネリックスキルの中でも自分を取り巻く環境に働きかけ対処する力であるコンピテンシーを、「対課題」「対人」「対自己」の３領域に分け、客観的な評価が取得可能な手法を用い、測定・評価する。



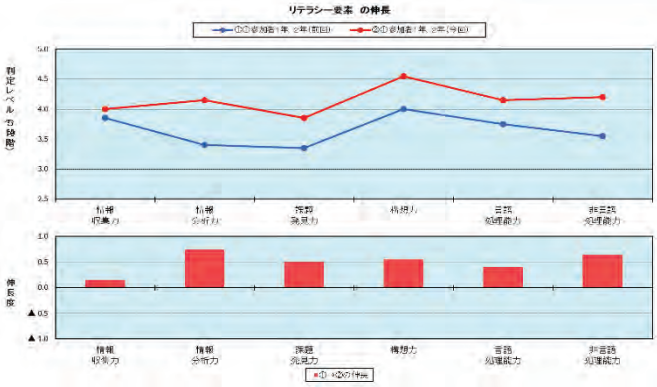
（2）リテラシーの測定結果

①リテラシー総合

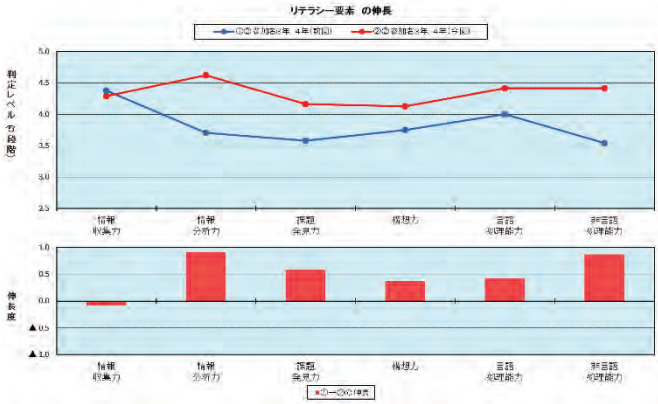


②リテラシー要素（成長分析）

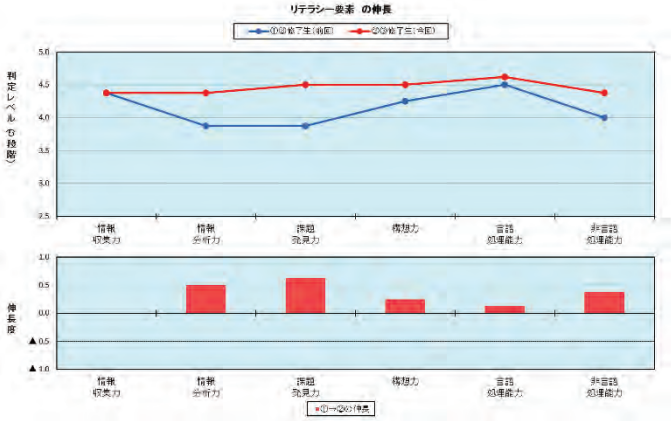
1・2年生



3・4年生

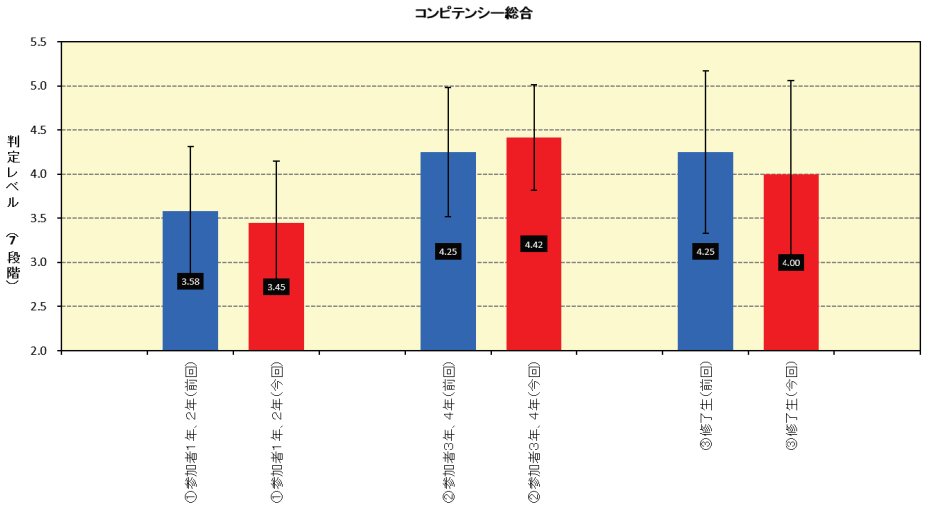


修了生



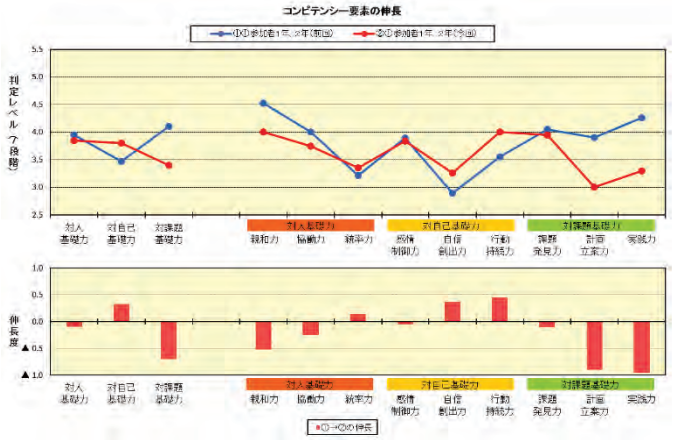
(3)コンピテンシーの測定結果

①コンピテンシー総合

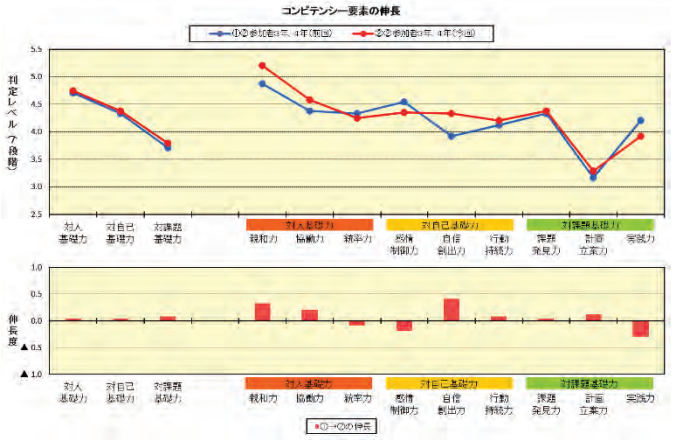


②コンピテンシー大中分類要素（成長分析）

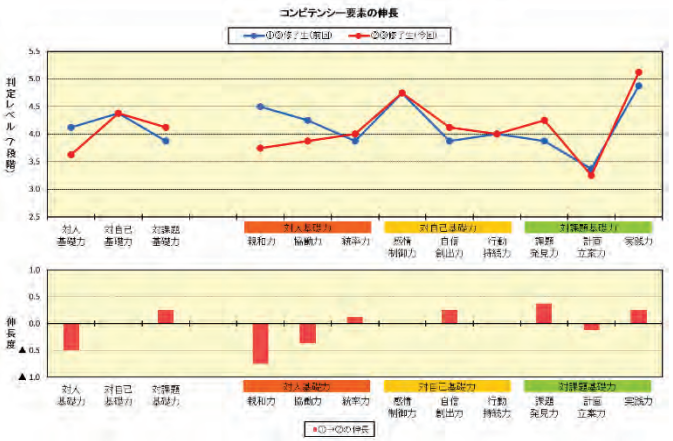
１・２年生



３・４年生



修了生



四国大学の取組

四国大学ではＣＯＣ＋事業（創業支援事業）の一環として、平成３０年度は次の取り組みを行った。

（１）　ビジネスサークル「とくしまサイコー塾」
（２）　ビジネスプランコンテスト「第３回とくしま学生ビジネスプラン道場」
（３）　社長のかばんもち
（４）　チャレンジショップ
（５）　その他事業など

1　ビジネスサークル「とくしまサイコー塾」

（１）実施概要

平成３０年４月１２日（木）に第１８回定例会を開催して以降、８月、９月、３月の学生の長期休み期間を除き、毎月第二木曜日に定例会を開催した。

本事業は、学生に「創業」や「起業」を将来の選択肢の一つとして認識してもらい、その上で興味・関心を持ってもらうことを目的としている。

今年度は、開催場所となる大学の特徴や注力している分野にテーマを定め、各テーマに沿った分野で活躍している県内の起業家や業界リーダーなどを講師に招き、「自身の生き方や仕事に対する考え方」、「起業するまでの経緯」「起業後の苦労や考え方の変化」等の内容で講演いただいた後、参加学生同士によるグループディスカッションを行う形式で実施した。

（２）実施内容

定例会	日　時	テ　ー　マ	講　師	開催場所	参加人数
第１８回	4月12日	藍 （地域固有資源）	永原レキ（in bitween blue s） 近藤ルミ（ボン・アーム）	四国大学	２４名
第１９回	5月10日	ビジネスプラン	慶応義塾大学 SFC 廣川克也、上田将史、浅見義治	徳島大学	２３名
第２０回	6月14日	食品開発	曽谷さおり（６次産業化プランナー） 岡田圭祐（株式会社昌栄　副社長/イルローザ）	徳島文理大学	２５名
第２１回	7月12日	スポーツビジネス	南啓介（徳島インディゴソックス代表取締役） 山田佳弘（やまだ整骨院/トレーナー協会・会長）	四国大学	４６名
第２２回	10月11日	IT ベンチャー	播田誠（株式会社テクノモバイル　代表取締役） 米田卓也（株式会社ジュニオ　代表取締役社長）	徳島大学	２８名
第２３回	11月8日	公務員	新居美佐子（マチアソビ・とくしまマラソン仕掛け人） 加藤貴弘（ＶＳ東京・地方創生仕掛け人）	徳島文理大学	２７名
第２４回	12月13日	文学・書道	重藤貴志（インタビュアー/ライター/ディレクター） てらきち（書道詩人）	四国大学	８名
第２５回	1月10日	飲食店経営	鍛谷徹（株式会社グルメサービス） 服部和彦（株式会社はっとり代表取締役）	徳島大学	２４名
第２６回	2月14日	医療・福祉	吉積諒（peche 吉積助産院　代表） 榎本峰子（㈱TABIJI　代表取締役	徳島文理大学	１９名

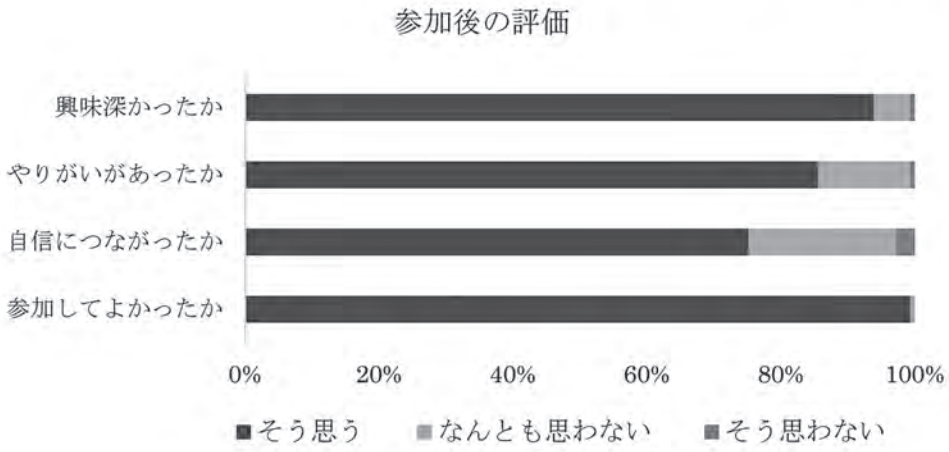
<サイコー塾実施風景>

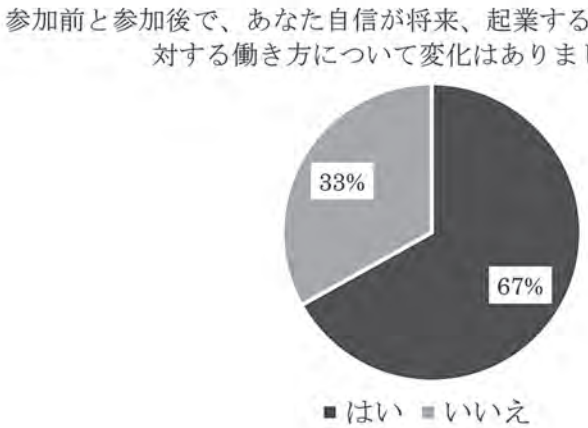





（3）事業実施による効果

本事業実施による効果として、今年度実施分のアンケート結果を以下に記す。





「はい」と答えた方だけお答えください。参加前はどのようなイメージを持っており、参加後はどのようなイメージを持ちましたか。（抜粋）

参加前	参加後
成功した人の話を生で聞ける	自分のやりたいことで会社を作りたいと思えた。
正直、なーなーできいていた	挑戦し続けたい
医療だけに興味があった	開発も興味を持った（他のことも知りたいと思った）
自分のやりたいことを一つにする	様々な事に興味をもち、やってみる
周りのイメージや仕事の給料などで就職しようと思っていた	自分のやりたい事や目標に素直に向かっていこうと思った
地元で平凡な人生	いろんなことにチャレンジしてみたい
IT とは自分の学んでいることに関係ない分野だけど勉強として聞きに行ってみよう	どの分野を学んでいるかとかはそこまで関係なく、自分の気持ち次第で将来も大きく変わると知った
起業することは難しい	好きなことをする一つの手段として取り入れたい
起業について全然知らない。成功する人は少ない	日頃の生活から多くの人と関わり価値観を広げる事が大切。いろんなことに挑戦していく
起業することは難しい	自分のやりたい事を実現するために起業するという考え方もあるんだなと思いました
メリットとかあるのか、どんな考えなのか	様々なことに挑戦したり、大変だが自分の好きなことができる
起業は熟考の上やるもの	思いつきでやってみてもいい
起業は難しい	チャレンジしてみることが大切
起業は苦しいしかない	起業をする上でやりがいが大きいことを知った
大変そう。昔からやろうと考えていた人がする。	途中でやろうと思ってもできる。
起業なんて興味なかった	少し起業について興味がでた
起業について迷っていた	より起業を行いたいと思った
将来やるべきことがよく分かってなかった	自分がやってみたいことをやるべきだと感じた
起業なんて未知の世界	起業という選択肢もある
会社の中で管理職になることはあっても、自分で起業なんてありえないと思ってた	自分のしたい事が今現在、実際あるから起業も悪くないなと思った

2　ビジネスプランコンテスト「とくしま学生ビジネスプラン道場」

（１）実施概要

学生自身が構想した事業アイデアから計画書を作成し、人を惹きつけ、共感を生み出すプレゼンテーションまでを学ぶ道場型（ステップアップ形式）のビジネスプランコンテストである。

地域の課題や自分の将来に対する考えをアイデアにし、調査、シュミレーション等で実現性を検証しながら、様々な情報を整理し、計画として組み立てる事業構想力や計画力を育成することを目的としている。

（２）実施内容

今年度は、平成３０年８月１日にエントリーを開始（ビジネスプラン数１０５プラン、参加人数２１７名）し、一次審査、二次審査を通過した６組による最終審査を平成３１年１月２７日（日）に行った。

<ビジネスプランコンテスト「第３回とくしま学生ビジネスプラン道場」スケジュール>

平成３０年	８月　１日（水）	エントリー開始
平成３０年	１１月２９日（木）	一次審査
平成３０年	１２月　６日（金）	ブラッシュアップセミナー
平成３０年	１２月２０日（木）	二次審査
平成３１年	１月２７日（日）	最終審査

<一次審査>



<二次審査>

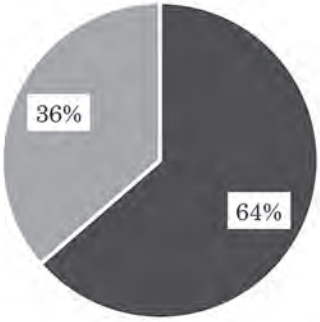






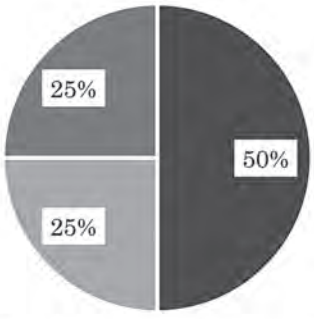
本事業実施による効果として、最終審査通過者を対象としたアンケートの結果を以下に記す。

今回、とくしま学生ビジネスプラン道場に参加してみての満足度を評価してください



■満足 ■やや満足 ■どちらでもない ■やや不満 ■不満

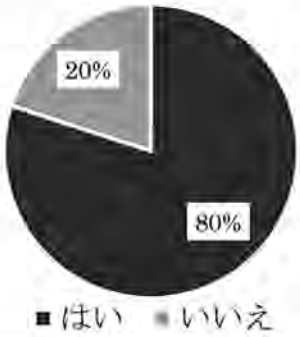
参加する前と後で自分で事業をしてみることについて、印象や考え方の変化はありましたか



■変化があった ■変化はない ■どちらでもない

参加前	参加後
無回答	わくわくプランを実現したいと思います
無回答	事業を伝える点に気をつけないといけない所がわかりました。（ブラッシュアップセミナー）
起業をすることは、ハードルが高く、難しいものだと思っていた。学生のときに起業について考えることはないと思っていた。	ビジネスプランをたてて、具体的に計画をしていくうちに、実現できるのではないかという気持ちになった
去年は授業の延長戦上だったこともあり、参加する前はあくまで架空の事業計画という気持ちが強かった。	実際に、商品開発をしたこともあって、資金計画や販売場所、方法についてより現実的に考え、やってみたいなという気持ちになった。
去年大学で習っていたことを活かしたいと思ってはいたが、資金計画など金銭面を考えると難しいと思っていた。	大学で習ったことを活かしつつ実際に行動し、取り組むことの難しさを知った。
起業、というかアイデアをどうやって事業に結びつけるのか分からない。	順番をふめば危なくなく事業をおこせるんだ！
むずかしそう	楽しかった

実際に今回考えたプランを実施してみるチャンス
があれば挑戦したいですか？



「いいえ」と答えた方のみお答えください。どのようなことが解消されたら実施に踏み切ってみたいと考えますか。
今回、質疑応答で指摘された部分を解消できたら考えてみたいです
今回指摘された部分（収支計画・ターゲット）を考え直したいです
そもそもの話としてこのプランで起業する気はない

ビジネスプラン道場の参加によってどのような学び（成長）が得られましたか。
発表の仕方がいろいろ勉強になった
まず、やってみて色々人を応援しています。頑張っていきます。
共感力、収益性の立て方
自分の考えを発表することがなかったので人前にでて伝える経験ができて良かったなと思いました。
ビジネスについて漠然と考えていましたが、資金計画や収益、営業利益と具体的に考えることの難しさを感じました。

自分の思いを形に、ビジネスプランにおこすということの難しさや、周りの助けが必要不可欠だと学びました
"起業をする際に考えなければいけないことを知ることができた。
チーム内で協力してプランをたてていく楽しさを知った。"
新たな事業を始めるのに必要な知識を得られたし、プレゼンを通して、自分の考えを実現する力もついたと思う。
1 からつくりあげる難しさや、その考えたことを伝える（販売・プレゼンテーション）ことの大変さ、楽しさ。
ビジネスを行うにはターゲットをしっかり設定しなければいけないことが学べた
締切りがせまったときの問題解決能力が上がった
数字に強くなった

3 「社長のかばんもち」

（1）実施概要

地元の小規模事業者を中心に、地域で活躍する社長と3～10日間、行動をともにすることで、社長の仕事の考え方やスピード感、座学では得難い暗黙知的な”経営術”を学び、自分なりに“社長の仕事“についての具体的なイメージを持ってもらうことを目的としている。

また、社長のかばんもち実施終了後は、学生を受け入れた企業経営者を招き、報告会を実施した。

（2）実施内容

①平成30年度夏季

平成 30 年 3 月～平成 30 年 5 月の期間で 5 名の学生の社長のかばんもちを実施。

	受入れ企業	受入れ企業代表者	参加学生
1	有限会社三八	代表取締役　岡田　元一氏	徳島大学
2	株式会社パッケージ松浦	代表取締役　松浦　陽一氏	四国大学
3	NPO 法人びざん大学	代表取締役　長谷川　晋理氏	四国大学
4	ミッド・インターナショナル株式会	代表取締役　森田　孝夫氏	徳島文理大学
5	STUDIO　AVANTI	代表　　渡瀬　真弓氏	徳島文理大学

②平成30年度秋季

平成 30 年 6 月～11 月までの期間で 7 名の学生の社長のかばんもちを実施。

	受入れ企業	受入れ企業代表者	参加学生
1	株式会社 PLUSa	代表取締役　有田　和重氏	徳島大学
2	ハレとケデザイン舎	代表取締役　植本　修子氏	徳島大学
3	株式会社ネオビエント	代表取締役　藍原　理津子氏	四国大学
4	〃	〃	四国大学
5	Less is design 株式会社	代表取締役　平尾　卓氏	四国大学
6	あんと design	代表取締役　島川　文代氏	四国大学
7	株式会社クラッシー	代表取締役　植田　貴世子	徳島文理大学

<事業実施の様子>





<社長のかばんもち報告会>

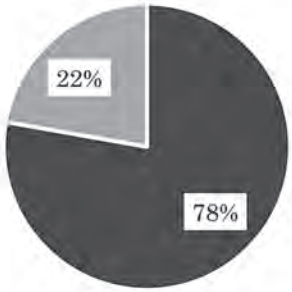




（3）事業実施による効果

本事業実施による効果として、参加学生を対象としたアンケートの結果を以下に記す。

「社長のかばんもち」に参加しての満足度についてお答えください

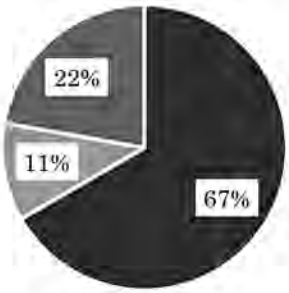


■満足 ■やや満足 ■どちらでもない ■やや不満 ■不満

社長のかばんもちに参加する前と参加した後の社長に対するイメージや社長の仕事に対するイメージはどのようなものでしたか。	
参加前	参加後
社長は堅い人で、とっつきにくいようなイメージがありました。　仕事は、部下に指示を出し、経営等の方針の最終決定をするというイメージがありました。	社長は気さくで、話しやすい方が多いという印象に変わりました。仕事は、経営や広報マーケティング等の多 くの仕事があり、会社のために責任をもって行っているイメージになりました。

お堅い、厳しい、男性が多い、親しみが持てない、責任が重い、贅沢な暮らし、自ら前に出ていく、こだわりが強く、プライドが高い、上に立つものとしての自覚が強い	・生き生きと活躍されている/学生を育てる考えを持つ人もいる/社長でありながら、一人の人間として謙虚な姿勢を持っている/「やりたいからやっている」「面白くないと続かない」という考えをもっている
明るく、何ごとも積極的な人。大変なことばかりで、つらい仕事が多いと思っていた。	明るく、冷静に状況を考えて行動できる人だと感じた。人との関わりが大切な仕事だと思った。
仕事！	人を大切にしている
スーツ、60代くらい、こわい、きびしい、出張が多い	仕事場を楽しくする役割であり、会社の顔としての役割でもある。/とてもおもしろく話しやすい/人と人とのつながりを大事にしている
責任が多いので大変だと思いました	副業ができたらいいと思いました
余り忙しいイメージではなかった 恐いイメージがあった	熱意にあふれていた 会社の中で一番働いているのは社長であった
きつい、なかなか会えない、気難しい、我が道を行く	人によりそう、つながりを大事にしている、楽しんで仕事をしている、ポリシーをもっている

参加前と参加後で自分自身の将来に対する働き方や生き方についての考えに変化はありましたか。それはどんな変化ですか。



変化の内容
就職活動において、地域貢献に携われたり多くの人と関われるような職種を探し、興味を持った企業の人に自分の考えを話したりしている。
働き始めたら、より自分の仕事にプロ意識を持ち、人との出会いや関わりを大事にしようと思いました。
「ウミガメのように」なる道も視野に入れながら、無理せず自分らしく生きていきたいです。「大変だけど、好きだからやめられない」というような仕事に出会えるように、またはつくり出せるようになりたいです。
自分のやりたい仕事ができるように、あきらめずに取組みつづけようと思った。
今の自分も変えたいです。なぜなら、今の自分は強くないから。なにも自信になることがないので、自信をつけたいと思った。自信があれば将来の夢も大きくなると思った。
将来について学びたい分野を決めたので、逆に将来に対する想いが強くなった
独立してみようと思った。自分に自信をもって行動する

4　「チャレンジショップ」

（１）実施概要

自分の事業アイデアを計画に落とし込み、市場調査や損益シュミレーションを行いながら、仕入れ、販売促進物の制作、販売まで学生自身が実際にリスクを負って商売を行い、予想と結果を、事後の収支から検証してみることで、仮設の精度を高めていくことの大切さや、創業までの実践的なプロセスを学び、商売の厳しさと楽しさを体験してもらうことを目的としている。

（２）実施内容

今年度、４６名の学生が東新町商店街内店舗にて１カ月間チャレンジショップを運営した。

＜準備期間の様子＞





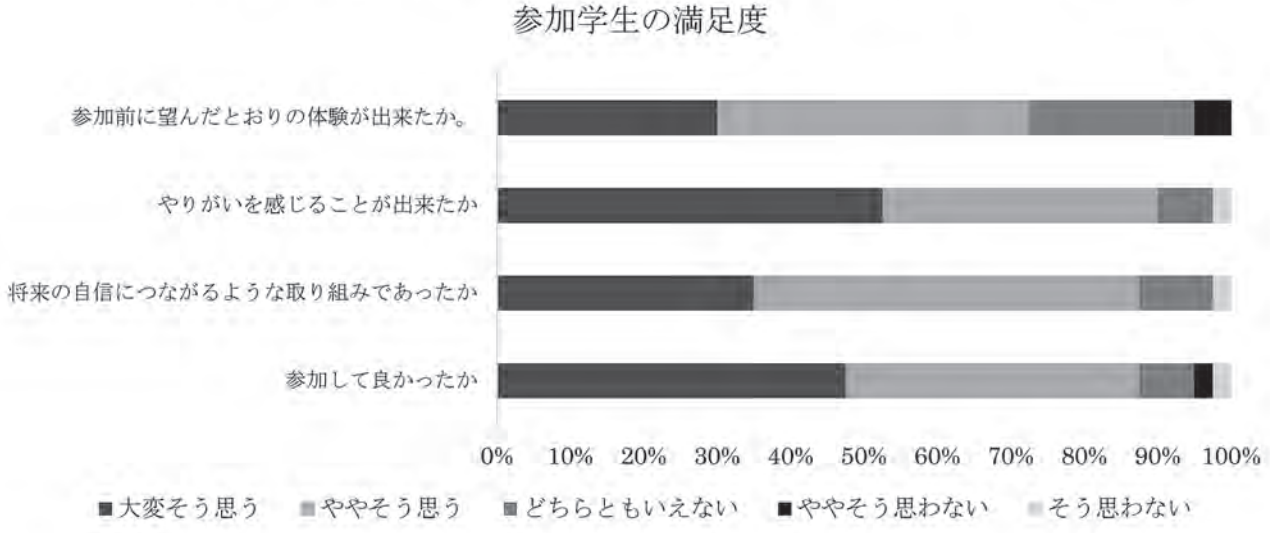




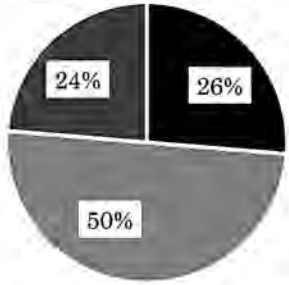


（３）事業実施による効果

本事業実施による効果として、参加学生を対象としたアンケートの結果を以下に記す。



参加前後で、将来、自分の仕事や働き方について、
また「起業・創業」といった自分で事業をしてみることについての印象や
考え方に変化はありましたか。



参加前	参加後
	変化はないが、自分で事業をすることは難しいと改めて思いました。
行き当たりばったりで波しかないものだ。というイメージ	準備の仕方や広報の仕方によって、どうなるのかが決まる。
カフェだと聞いて、何でもお洒落に普通のお店のように出せると思っていました。どこのポジションでもふんわりしとたイメージしかなかったけれど、問題なくうまくいっている想像がありました。	どのポジションでもとても大変で、なかなか上手くいきませんでした。部分だけでなく、全体を把握してみていないといけないことも学びました。臨機応変に行動するということがとても大切で、少しはできるようになったのではないかなと思います。
カフェを運営してみたいととても憧れていました。	想像以上に大変で、運営する場所や販売する物も非常に重要であることがわかりました。
	仕入れにこんなにお金がかかると思わなかった。もっと計画を立てる時間が欲しかった。
起業するのには資金もかかる上、準備なども大変で、簡単にできることではないと考えていた。また、起業したとしても、お客様を集めることは容易でないと考えていた。	起業するのにはある程度の資金や準備は必要である。しかし、お店のコンセプトや、そのコンセプトが店舗周辺の雰囲気に会っているのかなどをしっかりしていれば誰にでも可能であることが分かった。また、宣伝の力の集客力に大きく関わることだと感じた。
自ら積極的に動いたり、接客することが出来るのか少し不安だった。	周りを見て、今、自分に出来ることを考えながら動いていた。
親が自営業をしていることもあり、「大変そう」というイメージが強く、「起業・創業」などは絶対にしたくないと思っていました。	やはりお店を自分の力で何もかもすることは大変でしたが、その分、それ以上にやりがいがあり、楽しいなと思いました。自分でお店を出してみるのもいいかもと思いました。
今まではどこかの企業に就職することや、公務員になることなどの選択肢でどこへ入って働こうかと考えていた。カフェとかしたいなと思ったこともあったが、現実的ではないと考えていた。	自分でも頑張れば、自らのお店を出せるのではと思った。どこかに入って働く他に、自らが起業という選択肢も見えてきた。大変さもわかってよかった。
実際にお店を出すときに、どのような準備をするかなど具体的にわからない。	予想していたのと違ったりしてお店をしていく中で徐々にわかっていくことが多いと感じた。
将来、起業ということを考えてはいたが、どうすればいいのかわからない。	具体的に、どのような準備が必要なのか、営業することの難しさがわかったと思う。
なんとなくいい思い出になるといいなと	仲間との考え方やチャレンジショップに対する入れ込みが違いすぎる。うまくお店をまわせていなかった。

チャレンジショップの参加によってどのような学びや成長が得られましたか。
地域の方々とのふれあいや即興での作品製作によって自分の表現の幅が広がった。
ただ自分が満足するものではなく、お客様の要望も考えながら制作することはなかなか無かったので、とてもいい機会になった。価格設定も利益を考えないといけないので悩んだ。書道の新しい可能性をもっと探ろうと思った。
一般の人は「書道」をどんな風に見ているのか。またどういった作品がよく買われるのか、好きなのかを学ぶことができた。
人前で書く力が身についた。
お客さんの要望に沿ったものを練習なしで一回で書く難しさや、お客さんが好む作品の傾向などを知ることができた。
客を呼び込むむずかしさを知った。お客さんの希望を聞いて作品にしていく能力がついた。
その場でオーダーしてもらう事で、どのようなものが必要とされているのかがわかった。
沢山の人と関われることが出来てよかった。
人とのかかわり方や、販売する楽しさがあらためて感じられた。
地域の人と関わることができた。商業力を身につけることが出来た。
限られた時間の中で、かぜまーるの今までの活動の成果を発揮できたと思う。これまで支えてくれた周囲の方々に少しでも恩返しできた機会になった。また、今回のチャレンジショップにおいても、周囲のご支援、ご尽力のお陰で催されていることも再確認できた。
お客さんを目の前にして、要望の文字、雰囲気、イメージによって作品を制作する力が少し身についたと思う。即興のパフォーマンスは初めてだったが、お客さんが温かく無事成功できた。かぜまーるの絆もより一層深まったと思う。
これまで関わってきた多くの方々が来て下さり、たくさんの人に支えられている事を改めて感じることができた。依頼されるものもうちわや色紙だけでなく名命や看板など大きなものを任されるようになった事が、かぜまーるとして成長を感じる。
お客様のご要望に即座に対応する能力がより身についたと思う。
集客面で、どのように広報するべきか、また口コミで来たいと思ってもらう為には、どういう強みをつくるべきかをよく考えることが出来ました。
なにげないお店でも、自分たちが行ったチャレンジショップ以上の苦労があると思うと見る目が変わる。短期間ではあるが自分達のお店がもてたことによって、責任感や苦労を味わうことができた。
接客業の大切さを改めて実感しました。また、何人かで集まって目標に向かって何かをやり遂げることの楽しさを学びました。
自分の任された仕事だけをこなすのではなく、周りをよく見て、いろんなところへ動いていく、ということが大事だと学びました。これはお店を経営することだけに役立つのではなく、将来の目標にもつながることだと感じました。
私のグループは 1 人 1 人の負担がとても個人差があったように思います。その中でも自分ができることを探して、他の人のお手伝いをすることが出来ました。周りをみて自分から動くということができるようになりました。また、上でも書きましたが、臨機応変に行動する力がとてもついたと思います。常に全体の動きやお客さんの様子、時間をみて動くことができるようになったと思います。初めはできなかったことも最後ではできるようになったかなと思うことが沢山ありました。

私は、全ての日程で厨房で調理する立場でした。だからこそ、全ての仕事を把握していたので次から次へと皆に指示することができました。周りを見て、指示するという成長がありました。
初めて飲食店の体験をさせていただき、飲食業の大変さが身をもって学べることが出来ました。今までおもてなしをされる側としては、美味しいものが早く出てくることは当たり前だと思っていました。このチャレンジショップの参加を通して、企画から運営を進めていくうちに当たり前の事が当たり前でできるようになってきました。
出店の大変さや、人通りの少ない商店街をどう集客するかについて考えることができた。また改善をしていくことで課題を解決していくことができた。
自分たちで出資しているため、呼びかけ、運営、すべてに責任感を持つことができた。また、自分がチームの一員であるという自覚とともに、何をすべきか、先の事を考えて行動できた。コストを削減するためには、農家さんとのつながりを持つことも重要だと感じた。そして、その地域に合ったお店であることが重要だと学んだ。
働くことの大変さや、どのくらいの値で売るのがちょうどいいのかなどを考える大切さを知った。
自分でお金を稼ぐことの難しさ
チームワークの大切さ
お金を稼ぐことの大変さ
お金を稼ぐことが簡単ではなく、企画や準備、後片付けまでが仕事だということ。また、それを経験する中で、皆と協力する楽しさがわかりました。難しく考えすぎず、ラフに考えることも、何か物事をする上で重要なことだと学びました。
自分達で全てをする大変さ（自分達でしなくちゃという責任と役割分担がしっかりできた。） 準備できたと思っても何かしらのハプニングがあること（臨機応変に対応できる力） お客さんの優しさと厳しさ（しっかりアドバイスしてくれる人や嬉しい声をかけてくださって力になった） お客さんがどうすれば入ってくれるか皆で考えた。
グループ内での情報共有や話し合いをしっかりすることが大事。在庫調査や注文数などもしておくと買った物の無駄をなくせるとわかった。自分の財布からお金を出すことでプレッシャーを感じて頑張れた。
経営の難しさ。需要と供給。たのしぶの仲が深まった。
自分達だけでお店をやるという、このチャレンジショップの企画を通して調理について学ぶことができた。油の温度の見方や、焼き方などが勉強になった。チーム全員で協力して、お店を企画、運営をしてお店を持つことの大変さや苦労を知ることができた。
自分が思っていた以上に、お店を開くまでの準備やお金がけっこういることを知った。また、お店でだすモノの価格などを決めるのも大変だったけど、大体のお店を開くまでの流れを知ることができたからよかった。
成長できたかどうかはわかりませんが、世の中はまったく甘いものでは無いということがわかりました。その逆で人の優しさや親切心を見ることができ、世の中の温かさを知りました。
まず、経営を一緒に頑張る人達とのチームワークの大切さを思い知りました。1 人ひとりの考え方、意見がなかなかまとまらなかった時、お互いが譲り合えばいいにも関わらず、ケンカになり、話が進まないということがしょっちゅうありました。5 チームの中で私たちが一番学年が下という事もあり、出来たばっかりの友達同士だからチームワークが無いのは仕方がないと納得した時もありましたが、働くならチームワークを良くするために工夫をして当たり前だと気づかされました。

5　その他事業

（1）学生×食品開発プロジェクト

本事業は県内の NPO 法人（NPO 法人チャレンジサポーターズ）と連携して開催している事業であり、県内の食品関連企業と学生が新商品や新たな販売方法の開発を行うものである。

開発に至るまでの過程として、企業との課題の共有、アイデア出し、調査、プランニング、試作を繰り返し実施する中で、新商品の企画ノウハウを学び、将来、新しいものを生み出し市場に提案していくことの大変さや、その過程で必要となる原価計算、マーケティングなど様々な仕事との関わりを知ることで、食品関連分野のあらゆる可能性を模索してもらうことを目的としている。

今年度は、４組の学生チームが参加し、３カ月間の共同開発期間後に成果発表会を実施した。

各チームそれぞれ、調査にもとづいた客観的なデータを示しながら、新しい発想で課題を解決する提案を行った。

このうち２チームの企画は企業に実際に採用され、２件の商品化を達成している。

＜事業実施の様子＞








参加学生からは、「商品を開発する過程を細かく知ることができた。」、「提案するだけでなく、試作を行い実際に商品化することができて他にない経験ができた」などの感想があった。などの意見が挙げられている。

（2）　創業セミナーの実施

県内の高等教育機関の学生に対し、創業支援クリエーターが「キャリアプランニング」「ビジネスプラン作成」等の出張講義を実施した。

	実施日	大学・高専	延べ参加学生数
1	４月１７日	四国大学　１年　小島准教授ゼミ	１５
2	５月１日	四国大学　初年次ゼミ	２０
3	５月１４日	阿南工業高等専門学校　共同教育　４年	４２
4	５月２１日	阿南工業高等専門学校　共同教育　４年	４２
5	７月５日	徳島大学	７０
6	１１月３０日 １２月５日 １２月７日	四国大学　全学共通教育　１年 〃 〃	２７０ ２８０ １２０
合計			８５９

＜講義の様子＞





（3）学生の自主プロジェクト

四国大学 COC プラス事業を体験した学生が新たに始めた自主的な活動を創業支援クリエーターが、各種補助、相談にのるなどして実施している。

① SKIP（SHIKOKU KIKKAKE PROJECT）

本学の国際文化学科 2 年の学生の相談対応から生まれたプロジェクトであり、「四国大学生が動きだす“キッカケ”をつくる」ことを目的に、「何かやりたくても動きだす勇気がない。キッカケがない。」と考えている学生に対し、学外活動など積極的に運営、参加している学生を講師に迎え、主体的に動き出す動機づけを図るイベントである。

平成 30 年 2 月に初回を実施し、今年度は第 2 回～4 回を実施した。

内容としては、各回テーマを定め、学生のプレゼンとワールドカフェ形式のワークショップを行い、学生同士の交流を促し、緩い繋がりをもったコミュニティをつくりながら、最後に自分が近日中に起こすアクションを参加者が発表するというものであった。

＜事業の様子＞





② 事業承継プロジェクト

本学の経営情報学科の学生が、平成 29 年度に実施した「とくしま学生ビジネスプラン道場」にて発表したプランを実行に移したいとの相談から生まれたプロジェクトであり、将来的な事業承継に伴い、衰退期に入りつつある市場を活性化させることを目的に、新市場を開拓する商品を開発することを目的として、他学科の学生を集めながら実施しているプロジェクトである。

＜事業の様子＞




③ 未来起業家交流会

平成 29 年度 COC プラス事業「とくしま学生ビジネスプラン道場」に参加した学生の相談から実施したイベントであり、県内学生の起業に対する興味関心が薄い現状に対し、お盆の帰省期間に徳島出身で起業に興味のある学生とつながる機会を提供しようと催したイベントである。

全国的なイベントであり、徳島の運営を本学学生が主となり開催した。




④ 書道作品の海外展開

本学の書道文化学科の学生相談から生まれたプロジェクトであり、書道を取り入れた商品は単調なデザインのものが多く、より大きな可能性を知ってもらうとともに、大好きな書道で自身の将来の生きる道筋をたてたいとのことから、欧米への商品販売を目指したプロジェクトである。




（4）学生による制作物支援

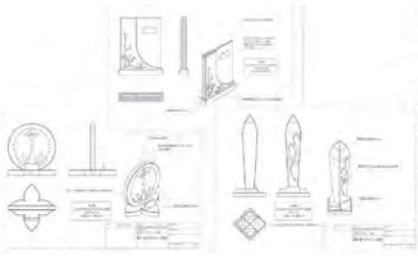
四国大学のＣＯＣ＋事業では、イベント等で使用するトロフィーのデザイン制作、チラシ及びポスターのデザイン制作、表彰状への揮毫、撮影等を、本学の学生が手がけた。

＜制作物＞





　また、トロフィー製作においては、本学生活科学部生活科学科デザインコース「立体表現基礎」の授業でトロフィーデザインしたものを、阿南工業高等専門学校ロボット研究部が行い、参加校が共同して製作した。







徳島文理大学の取組

（1）企画名
集客交流産業論

（2）実施目的/期待効果
集客交流産業論は、地域の最前線で活躍している方々を講師に招き、成功のヒントを学ぶ講座として実施する。講座は、①社会的創発基盤づくり ②社会的創発最前線 ③地域課題をテコに価値創造、の３つの柱で進める。大学生はもちろんですが、自治体や NPO、企業関係者にも聴講できるように公開授業と行う。
地域の最前線でご活躍中の方々から地域活性化の「カギ」について理解することを目的とする。幅広い実践的なノウハウを身につけるとともに、将来地方創生を担う人材となることが期待できる。

（3）実績
全ての回で、徳島県知事を含む地域で活躍するリーダーに講演していただいた。地域活性化の「成功の論理」とは何か、自らできる地方創生とは何かを学び、将来行動に移すきっかけづくりになった。

（4）日時
平成 30 年後期

（5）会場
徳島文理大学　アカンサスホール（2 号館 2 階）

（6）参加者数
総合政策学科 103 名、メディアデザイン学科 1 名

（7）総評
各回のレポートと講義の受講態度により評価した。飯泉徳島県知事をはじめ、各回とも徳島県を代表するリーダーに講演していただいた。また、正課授業ではあるが一般にも公開授業として行ったことにより、一般社会人にも聴講していただけた。そのことにより質疑応答では、議論を深めることができた。



集客交流産業論の日程（チラシ）

徳島文理大学の取組

（1）企画名
「地域学」の教育プログラムの開発・実施

（2）実施目的/期待効果
全 1 年生の必修科目である地域学において、地域に出てフォールドワークを行うことにより地域の魅力や課題を理解することを目的とする。地域の魅力を理解することで郷土愛を醸成し、就業地の候補となることが期待できる。さらに、地域課題を理解することで解決方法を考え実行できる人材となることが期待できる。

（3）実績
1 年生を対象とした『地域学』の教育プログラムで、Step 1 「遍路ウォーク」を実施、徳島県の文化・歴史、地理的な魅力や課題の理解を深めることができた。また、各学部代表 1 組が全 1 年生の前で発表会を行った。
Step2『ボランティアパスポート』を活用して、児童学科の学生が認定こども園でボランティア活動を行い、幼稚園教諭と保育士の仕事を理解し、幼児教育・保育についての仕事の理解を深めることができた。
Step3 地域学アドバンストコースとして、将来、建築系の技術者として次世代を担う学生に建築業の理解を深めると共に、地域文化の拠点となる文化ホール等複合施設の役割を理解することができた。また、歯科衛生士を目指す学生が歯科工場を見学し、歯ブラシ等の製造過程を理解するとともに開発コンセプトを学ぶことができた。

（4）日時
遍路ウォーク　4 月 27 日
ボランティアパスポート　11 月 16 日
地域学アドバンストコース　11 月 12 日、11 月 28 日

（5）会場
遍路ウォーク　小松島市（恩山寺－立江寺）
ボランティアパスポート　吉野川市立認定こども園川島こども園（吉野川市川島町桑村）
地域学アドバンストコース　サンスター徳島工場（板野郡松茂町豊久）
藍住町総合文化ホール　建築現場（板野郡藍住町奥野）

（6）参加者数
遍路ウォーク　理学療法学科 59 名
ボランティアパスポート　児童学科 5 名
地域学アドバンストコース　口腔保健学科 24 名、建築デザイン学科 28 名

（7）総評
地域学の遍路ウォークは、昨年度から発表会を行うようになり、学部学科の特色から地域の魅力や課題を発見できるようになりフィールドワークが次のステップの学びに役立つようになってきた。また、ボランティアパスポートによりボランティアの裾野が広がり、ゴミ拾いやイベントボランティアなどの一般的なものから、福祉施設やこども勉強会など学科の特色をいかしたボランティアが行われるようになった。地域学アドバンストコースでは、地域の魅力や地域で働くひとの実情を理解し、就業意欲を喚起する取り組みとなっている。



全 1 年生を対象として遍路ウォーク発表会（2018 年 5 月 31 日）

徳島文理大学の取組

（1）企画名
卒後教育の充実および先輩 OB・OG による職場紹介（卒業生との交流会）

（2）実施目的/期待効果
看護学科学生が就職先を選択する際の検討項目の一つとして卒後教育の充実が挙げられる。卒業後にリカレント教育が受けられることは地元就職を促すためのメリットとなる。そのため一昨年度から卒後教育としてシミュレーション教育の指導者講習会を行っている。
またこの機会に先輩 OB・OG から生の声で就職情報を伝えてもらう目的で、職場紹介（交流会）を行う。県外へ就職することの問題点、県内へ就職することの利点等を直接卒業生から説明してもらう。

（3）実績
一昨年度より看護学科卒業生（一部）へリカレント教育を行っている。特にシミュレーション教育を行い、卒業生と教員のそれぞれの経験を元にディスカッションを行った。さらに取り組みを発展させてシミュレーション教育の指導者養成を行う。こうした卒後教育ができることは地元就職を考える要因となる。
また、この機会に卒業生との交流を行っている。2016 年度は徳島県内から 2 施設、県外から 2 施設、計 5 名の卒業生が参加した。在校生の参加は 3 年生を中心に希望を募り、自由参加とした。昨年度は主として徳島県内主要病院へ卒業生の派遣を依頼した。また、在学生（3 年生全員）に参加を促すかたちで実施、学科の行事として定着を目指した。今年度は、徳島大学病院、徳島赤十字病院、徳島県立中央病院、徳島市民病院、吉野川医療センター、田岡病院、きたじま田岡病院と HITO 病院（愛媛県）に依頼し、8 施設から 11 名の卒業生が母校からの要請に答えてくれた。

（4）日時
2019 年 3 月 20 日 13 時～16 時

（5）会場
徳島文理大学保健福祉学部 3 号館 1 階 3103 教室

（6）参加者数
3 年生 90 名（2 名欠席）、看護学科教員 8 名

（7）総評
当企画は在学生から非常に好評を得ている。また教員からも評価する声が高く、今年度は学科内に窓口となる担当委員会が設置された。来年度からは、看護学科独自の事業として予算請求も行っている。今後、看護学科以外の学科でも実施することを検討していく。
一方、同取組が卒業生の県内就職率向上につながるかは、さらに経過を見ていく必要がある。



先輩を中心にスモールグループでの質疑応答の様子

阿南工業高等専門学校の取組

阿南工業高等専門学校では COC+事業の一環として、事業期間中、企業との連携事業を計画しており、平成 30 年度は次の取り組みを行った。

1．内容
4 年生を対象とするインターンシップに協力可能な企業の開拓および実施内容打合せを行い、企業ニーズと学生のマッチングを行う。また、5 年生進路相談を実施し、県内企業に目が向くように指導する。

（1） 期待効果
インターンシップの実施により、働くイメージを作り、就職活動に役立てることができる。また、県内企業の魅力を伝えることにより、就職率の向上が期待できる。

（2）結果
インターンシップに対象学生全員を派遣できた。（184 名）また、県内企業は 58 名(延べ人数)であった。(32%)

2. 内容
1 年生～3 年生を対象にキャリア教育を実施し、将来の夢を与え、技術者像や職種などを理解させるとともに、自己分析を行うことにより企業選択の方法を身につける。

（1）期待効果
自分を知ることによって、自分が活躍できる県内企業を選択することができる。

（2）結果
1 年生～3 年生を対象にキャリア教育を各学年 4 回実施した。

3． 内容
共同授業を通して、地元で働くやりがいや暮らしの楽しさ、メリットなどについて、地域の識者から学び、考え、話し合うことで、就職先としての徳島県の魅力について理解を深める。

（1）期待効果
将来の夢を実現できる県内企業の魅力を知り、就職率の向上が期待できる。

（2）結果
協働授業の参加者は 8 名であった。アンケートより、将来の夢を実現できる県内企業の魅力を知り、就職率の向上が期待できる。



スーツ講座



マナー講座



メイク講座

4． 内容

3 年生・4 年生を対象とする長期インターンシップに協力可能な企業の開拓および実施内容を検討する。また、先進的な取り組みを行っている企業を訪問して調査する。

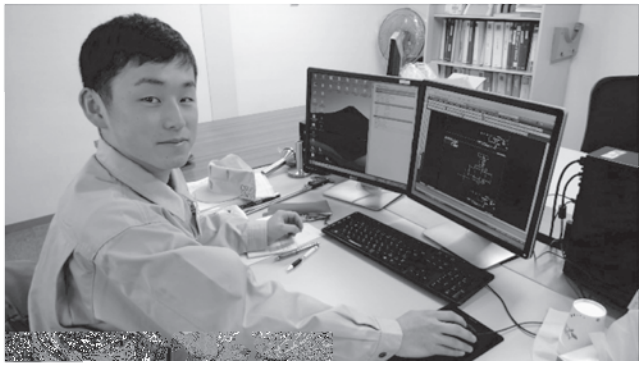
（1）期待効果

長期インターンシップの実施により、学生と企業と結びつきが強くなる。また、先進的な事例を研究することにより、新たなインターンシップの教育効果について検討し、県内企業への就職促進につながることが期待できる。

（2）結果

長期インターンシップに 38 名の学生を派遣できた。県内企業へは 27 名派遣できた。(71%)
また、県内企業への就職促進につながることが期待できる。





就業状況

5． 内容

全学年を対象とした企業セミナーを実施した。1，2 年生から企業研究の場を設けることにより幅広く進路を選択することができる。

（1）期待効果

4 年生は就職活動、3 年生はインターンシップ、1，2 年生は企業研究の場として実施した。県内企業への就職促進につながることが期待できる。

（2）結果

2 日間で 305 社の参加があった。県内企業は 72 社（24%）の参加があった。県内企業の魅力を知る機会になった。



企業セミナー

徳島工業短期大学の取組

1. 技術講習会（実践的整備実習）

（1）企画名　技術講習会（実践的整備実習）

（2）実施目的/期待効果

企業へのアンケートを参考に、基本的な整備を通して企業の求める学生に育ってもらうこと。
また各自のスキルアップを願い実施している。

（3）実績

就職内定者に対して、就業への自信を持たせることができた。

（4）日時

12/14

（5）会場

徳島工業短期大学

（6）内容

基本的な整備技術について実技演習

（7）参加者数

18 名

（8）アンケート結果

アンケートは実施していない。

（9）総評

今回留学生を講習会に参加させることで、日本人の学生にも緊張感ができ、基本整備ではあるが、就職先において整備に対する自信につながると確信している。

2.　技術講演会

（1）企画名　技術講演会

（2）実施目的/期待効果

徳島で働く、起業することについて、あらためてその意義を考える機会を持つことで、自分に必要不可欠なことを考える／就職活動への意思決定、意欲向上を期待。

（3）実績

県内自動車関係企業やメーカーの取組を知ることで、就職への意欲を持たせることができた。

（4）日時

6/13,6/20,7/6,9/8,11/5,12/6,12/7

（5）会場

徳島工業短期大学

（6）内容

スズキ自販徳島、徳島マツダ、徳島ダイハツモータース、徳島三菱自動車販売他各社採用関係者及びメーカー担当者による技術説明。

（7）参加者数

延べ 469 名

（8）アンケート結果

レポート形式でのアンケート実施。各企業の特徴やメーカーの取組等を知ることができ、就職への意欲を高めることができたことを思わせるレポートが多かった。

（9）総評

多くの県内企業の協力を得て、学生の県内就職への意識を高めることで、早期に意思決定ができたと考えている。



3. 進学説明会

（1）企画名　進学説明会

（2）実施目的/期待効果

体験や講話を通して自動車技術への関心を高めさせる。/地元自動車業界への就職を見据えた進学を考えさせることができる。

（3）実績

自動車技術・県内就職への関心を高めさせ、入学者の増加を見た。

（4）日時

4/21,5/12,6/16,7/7,7/21,8/5,8/26,9/15,10/13,11/10,1/27,3/16(予定)

（5）会場

徳島工業短期大学

（6）内容

自動車技術体験、就職等説明

（7）参加者数

延べ１５２名（1/27 まで）

（8）アンケート結果

以下 3 点についてのアンケート結果から地元就職を含め自動車への関心を高めることができたと考える。

○大学の自然を含めた雰囲気・施設・設備(回答率９０．９%)

良い　８９．０%　どちらとも　０．０%　良くない　０．０%

○実習体験(回答率８０．０%)

良い　８０．０%　どちらとも　０．０%　良くない　０．０%

○本学への理解度（回答率１００%）

良くわかった　９４．５%　どちらとも　３．６%　良く分からなかった　０．０%





（9）総評

参加者数は昨年を上回ることが予想され、県内入学者も増加すると思われるので、県内就職率の向上につながると思われる。

4. 小・中学生向けイベント

（1） 小・中学生向けイベント

（2）実施目的/期待効果

体験を通して自動車技術への関心を喚起させる。/自動車への関心を持たせることで生活の中で地元自動車業界を意識させることができる。

（3）実績

町内小学校２校、県内中学校８校及び県内小学生対象のイベントを実施し、自動車技術への関心を持たせることができた。

（4）日時

6/1,6/27,7/5,7/6,7/10,7/11,7/28,8/3,8/7,8/8,9/11,10/10,10/11,10/12,10/18,10/19,11/14,11/15,11/19,11/20

（5）会場

徳島工業短期大学、 各小学校

（6）内容

自動車技術体験

（7）参加者数

延べ２０３名

（8）アンケート結果

小中学校中心のため、感想文によりアンケートに代えた。自動車についての驚きや担当者への感謝の言葉など、自動車技術への関心を持ったことが分かるものが多かった。

（9）総評

実施回数が増えており、このまま継続することによって、県内入学者の増加、引いては県内就職者の増加につながって行くものと思われる。

以上のことから、県内就職率の向上について、学生を取り巻く就職環境の影響は小さくはないが、基本的にはこれまでの視点から活動を継続することで目標達成が可能になると考える。





協働事業

平成 30 年度参加校共同授業「徳島の魅力、徳島で働く」の実施について

＜メイン会場＞

平成 30 年 8 月 20 日～23 日、COC+事業の一環として、参加校で連携して開催する共同授業「徳島の魅力、徳島で働く」を実施し、「徳島県の将来ビジョン」と「徳島県で働く・暮らす」の 2 つの観点を学生に伝えることを目的に、地域の様々な分野で活躍する企業や NPO、行政などのリーダーを講師に迎えて、地域社会の将来ビジョンを、さらに地元で活躍する若手 OB,OG から自らのワークライフバランスや仕事のやりがいを語っていただいた。なお、本授業は、複数の参加校の学生が正課の授業として導入して 2 年目となる。また、メイン会場での講義を映像でサテライト会場である海部高等学校、徳島県西部総合県民局の 2 拠点に配信し、大学生スタッフを派遣することで、高校生が受講し、またグループワークができる体制を整えた。

1）授業日時

平成 30 年 8 月 20 日～23 日

（8 月 23 日午後については、台風 20 号上陸に伴う警報発令により中止した。）

2）参加人数

	徳島大学	四国大学	文理大学	阿南高専	高校生・一般	合計
8/20am	61	30	21	8	24	144
8/20pm	38	30	17	8	18	111
8/21am	45	27	16	8	29	125
8/21pm	42	25	16	8	25	116
8/22am	38	28	17	8	3	94
8/22pm	42	28	17	8	7	102
8/23am	34	29	17	8	0	88
8/23pm	-	-	-	-	-	-
合計	300	197	121	56	106	780

3）実施内容

8 月 20 日（月）［サテライト配信有り］

時間	分類	登壇者
9:30 ～ 11:00	導入「授業の構成と講演テーマの紹介」	山中英生（徳島大学教授）
11:15 ～ 12:30	特別講演「徳島県の将来ビジョン」	飯泉嘉門（徳島県知事）
13:30 ～ 14:50	講演①「徳島県の強みと成長産業」	荒木光二郎（(公財）徳島経済研究所専務理事）
15:00 ～ 16:30	チームビルディング及びグループワーク	山中英生（徳島大学教授）

8 月 21 日（火）［午前まで配信有り］

時間	分類	登壇者
9:30 ～ 10:30	講演②「地域づくりと観光産業」	岡部斗夢（アクア・チッタ理事/(株)ユニフォーク代表取締役）
10:40 ～ 10:50	質疑応答	岡部斗夢（アクア・チッタ理事/(株)ユニフォーク代表取締役） 川崎克寛（徳島大学 COC プラス推進コーディネーター）
11:00 ～ 12:00	パネルディスカッション① 「徳島の地域づくり、観光分野で働く」	（パネリスト） 山上歩美（西野建設(株)/阿南高専 OG） 柘植竜治（徳島ヴォルティス(株)ホームタウン推進部リーダー） 井上琢斗（(株)AWA-RE/徳島大 OB） （ファシリテーター） 川崎克寛（徳島大学 COC プラス推進コーディネーター）
12:00 ～	グループワーク	川崎克寛（徳島大学 COC プラス推進コーディネーター）

12:30		
13:30 ～ 14:30	講演③「地域医療と福祉の仕事」	中村晃子（健祥会グループ本部長）
14:40 ～ 14:50	質疑応答	中村晃子（健祥会グループ本部長） 桃井克将（徳島文理大学講師）
15:00 ～ 16:00	パネルディスカッション② 「徳島の地域医療・福祉分野で働く」	（パネリスト） 川村桃香（神山町社会福祉協議会/文理大 OG） 橋本友希（徳島県警・少年補導員/文理大 OG） 間愛結美（医療法人第一病院精神保健福祉士/文理大 OG） 岡本友里香（社会福祉法人徳島県身体障害者連合会障害者支援施設眉山園　次長相談支援専門員/文理大 OG） 池住千里（健祥会グループデイセンター日吉丸/理学療法士） 岡田梨奈（とくしま健祥会保育園/保育士） （ファシリテーター） 桃井克将（徳島文理大学講師）
16:00 ～ 16:30	グループワーク	間愛結美（医療法人第一病院精神保健福祉士/文理大 OG） 桃井克将（徳島文理大学講師）

8 月 22 日（水）

時間	分類	登壇者
9:30　～ 10:30	講演④「次世代技術関連産業の展望」	藤崎電機(株)代表取締役　藤崎耕治
10:40 ～ 10:50	質疑応答	藤崎電機(株)代表取締役　藤崎耕治 川崎克寛（徳島大学 COC プラス推進コーディネーター）
11:00 ～ 12:00	パネルディスカッション③ 「徳島の次世代技術分野で働く」	（パネリスト） 野田由香（(NPO）チルドリン徳島理事長） 森田孝夫（ミッド・インターナショナル(株)代表取締役社長/四国大 OB） 河井一馬（自動車整備業（自営）/工短 OB） 吉田琢巳（四国化工機(株)/阿南高専 OB） （ファシリテーター） 山中英生（徳島大学教授）
12:00 ～ 12:30	グループワーク	山中英生（徳島大学教授）
13:30 ～ 14:30	講演⑤「6 次産業化の取組と農林水産業の展望」	乃一圭司（海部次世代園芸産地創成協議会）
14:40 ～ 15:00	質疑応答	乃一圭司（海部次世代園芸産地創成協議会） 加渡いづみ（四国大学教授）
15:00 ～ 16:00	パネルディスカッション④ 「6 次産業化分野の取組と農林水産業の展望」	（パネリスト） 近藤ルミ（(株)ボン・アーム/藍美容研究家） 瀧川匡人（(有)樫山農園フィールド課/四国大 OB） 岸村憲作（(株)アワグラス代表取締役社長） （ファシリテーター） 加渡いづみ（四国大学教授）
16:00 ～ 16:30	グループワーク	加渡いづみ（四国大学教授）

8 月 24 日（木）

時間	分類	登壇者
9:30　～ 12:30	グループワーク	山中英生（徳島大学教授）
13:30～	プレゼン	山中英生（徳島大学教授）

14:30		
14:30～ 15:30	講評	

４）授業構成

２コマ連続の講義を基本とし、COC+事業で設定した徳島の未来を創造する産業分野をテーマに、前半に地域リーダーの講演、後半に参加校 OB,OG が登壇するパネルディスカッションを実施した。講演の後には、パネルディスカッションを担当した教員がグループワークを課した。（テーマ別講義（2 コマ分 180 分）の時間配分）

① 地域リーダーによる講義（60 分）
② 質疑応答（15 分）
③ 休憩（15 分）
④ 参加校 OB,OG が登壇するパネルディスカッション（60 分）
⑤ グループワーク（30 分）

５）グループワークの内容と成績評価の方法

グループワークでは、講演及びパネルディスカッションの内容を元に、パネルディスカションでファシリテーターを務めた教員が課した。グルーピングについては、大学が混合するように事務局側で 4～6 名程度に構成した。成績はグループ基礎点（最終日の発表）、相互評価、自己評価によって評価した。詳細についてはシラバス参照。

（参考）平成 30 年度コンソーシアム開講科目シラバス（徳島大学版）

【曜日・日時】　夏休み集中講義(平成 30 年 8 月 20 日～23 日)
【授業題目名】　「徳島の魅力、徳島で働く」
【授業の目的】　徳島県の産業面から見た将来ビジョンと地元で働くやりがいや暮らしの楽しさ、メリットなどについて、地域の識者から学び、考え、話し合うことで、将来、就職先としての徳島県の魅力について理解を深める。
【授業の概要】　徳島県内の第一線で活躍するリーダーや県内高等教育機関のＯＢ・ＯＧを講師に迎えて、経験の中から生まれた確信や考え方を語ってもらうと共に、大学生間交流を図りながらのディスカッションやワークショップを通じ、グループで主体的に考え、最終日には見解と提案を行う。
【キーワード】　徳島県　将来ビジョン　やりがい　暮らし　グループワーク　アクティブリスニング
【到達目標】　①徳島の地域文化を理解し、徳島における暮らしの魅力を説明することができる
②徳島の成長力がある産業を理解し、大学での自分の学びとつなげて考えることができる
【授業の計画】
8/20(月)　[午前（9:30～12:30）]導入（会場：徳島大学創成スタジオ
第 1 回：授業の構成と講演テーマの紹介
第 2 回：「徳島県の将来ビジョン」講演者：飯泉嘉門徳島県知事
[午後（13:30～16:30）]（会場：徳島大学創成スタジオ）
第 3 回：徳島の未来を語る①：「徳島県の強みと成長産業」
第 4 回：徳島で働く①：「徳島県の雇用と徳島で活躍できる人材」
8/21(火)　[午前（9:30～12:30）]（サテライト講師（遠隔地参加）
第 5 回：徳島の未来を語る②：「地域づくり・観光・ICT 産業の仕事」
第 6 回：徳島で働く②：「地域づくりと観光産業」
[午後（13:30～16:30）]（サテライト講師（遠隔地参加）
第 7 回：徳島の未来を語る③：「地域医療と福祉の仕事」
第 8 回：徳島で働く③：「地域医療と福祉の仕事」
8/22(水)　[午前（9:30～12:30）]（サテライト講師（遠隔地参加）
第 9 回：徳島の未来を語る④：「次世代技術関連産業の展望」
第 10 回：徳島で働く④：「次世代技術関連産業の展望」
[午後（13:30～16:30）]（サテライト講師（遠隔地参加）
第 11 回：徳島の未来を語る⑤：「６次産業化の取り組みと農林水産業の展望」
第 12 回：徳島で働く⑤：「６次産業化分野の取り組みと農林水産業の展望」
8/23(木)　[午前（9:30～12:30）]
第 13 回：総括、グループワーク
第 14 回：総括、グループワーク
[午後（13:30～15:00）]総括（サテライト審査員）
第 15 回：総括、グループワーク
【教科書・参考書】
『徳島が好きになる本(徳島経済研究所著書)』

【成績評価方法・基準】各回講義の終わりに実施するグループワークと最終日の報告・発表で評価する。
【再試験】　な　し
【参考】　グループワークの進め方について
①全ての参加学生は 1 カ所（仮設定：創成スタジオ）に集まり、スクール形式で講演を聴く。
②グループワークの際には、机の前後を寄せ、１つの島とする。
③最終日に向けたプレゼンテーマは選択式とする。
例 1；徳島の魅力を伝える
例 2；将来、4 つの分野のうち、どの分野で何をしたいかについて発表する
④最終日の発表形式は、A３用紙にキーワードを記載し行う「ポスターセッション形式」とする。

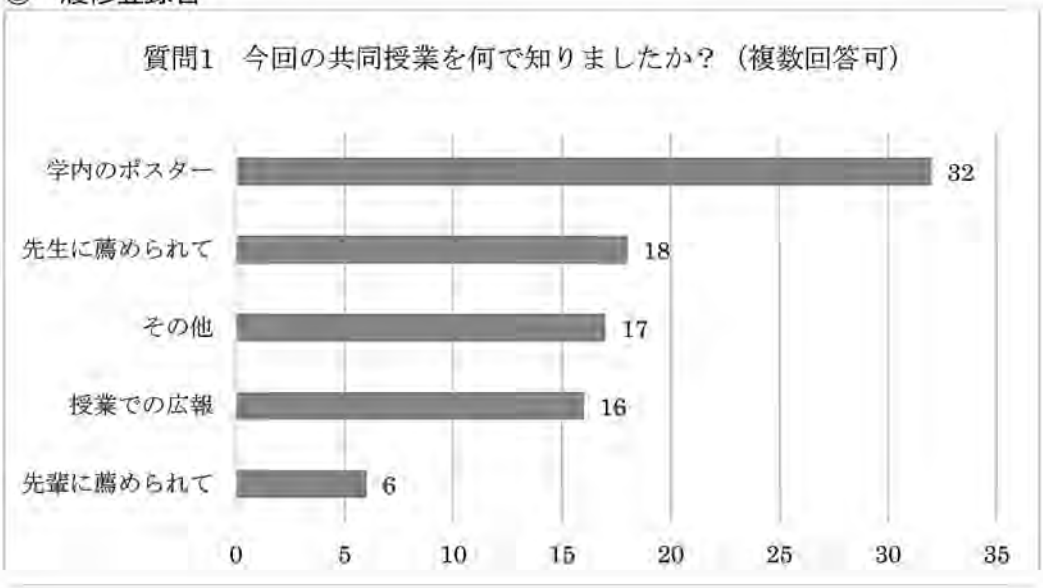
6）講義の配信方法

映像配信ではトラブルが生じた場合に備え、テレビ会議システム及び Web 上での動画共有サービスの二重の経路で講義を配信体制により、対応した。

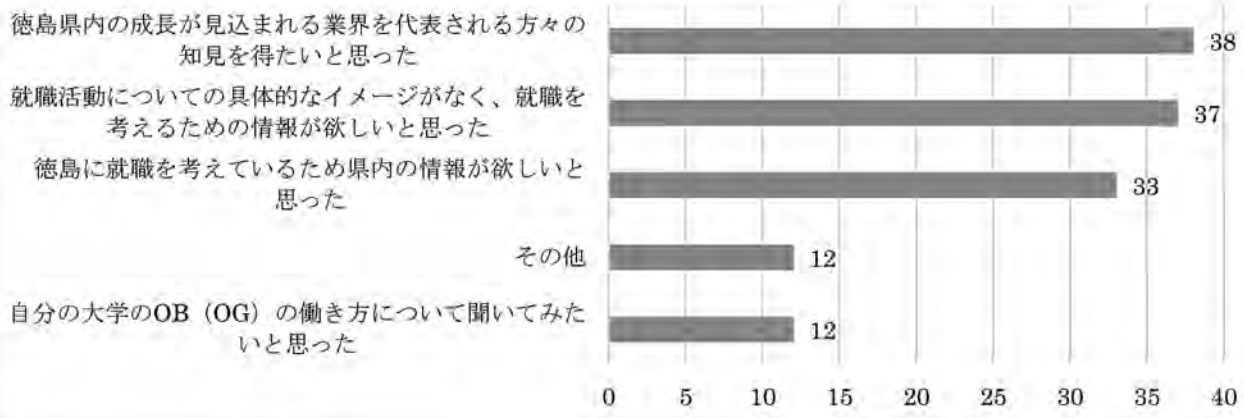
	2017 年度　課題	2018 年度　対応	2018 年度　結果
通信システム	①安価で安定したネットワーク環境のシステム構築 ②映像・音声の配信システムのトラブル（映像が止まる・乱れる・音声が遅延）へのバックアップ。 ③サテライト会場で、講義中の動画ファイルの再生を見ることができない。 ④全ての映像について、他会場の受講生向けに、後日、ネット上で受講できるようにする。	①ネットワークシステム Meeting Plaza を使い、安価で、安定した映像配信を行う。 ②バックアップ バックアップについて Youtube live 配信を使い、切り替えを行う。 ③動画ファイル Meeting Plaza で動画の配信を行うことが困難（動画の遅延・映像が荒い）であったため、サテライト会場での動画ファイルの再生タイミングを事前打ち合わせ行い各会場で動画を流す。 ④その他 Youtube live 配信を行い、ネット上での確認を行える状況を作る。	①ネットワークシステム 映像配信は安定して遅延なく行うことができた。 ②バックアップ 切り替えを行うことができ、音声・画質ともに良好だった。 ③動画ファイル サテライト会場側で事前にタイミングを計り動画を流すことができた。 また、動画の切り替わりが早い場面では、Youtube live 配信 を見ることで動画確認ができた。 ④その他 Youtube live 配信を行いネット上に記録を残し確認ができる状態にした。 ⑤サテライト通信 ・PPT・PDF 資料のリアルタイム共有を行うことができた。 ・マイクの集音領域が狭く、音声が拾えずに、サテライト会場に聞こえづらい場面（パネルディスカッション）があった。 ・サテライト会場における臨場感不足（徳島大学での画角・カメラワーク）
会場システム			・マイクを同時に使うことでハウリング起こすことがあった（マイク機器の組み合わせ）

7）アンケート結果

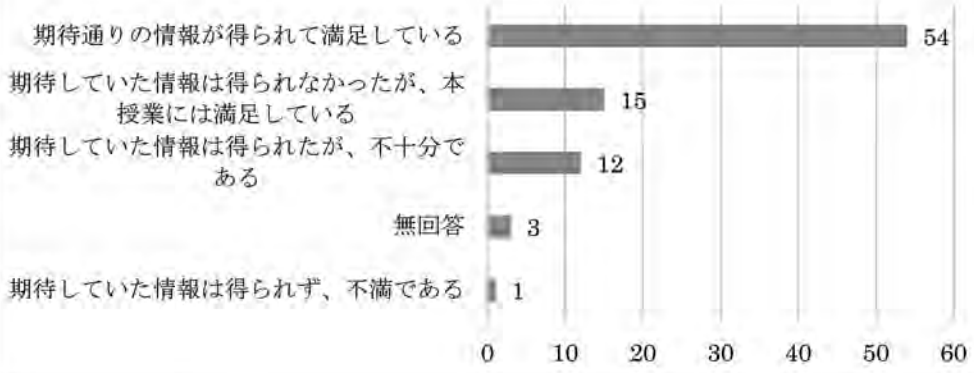
①　履修登録者



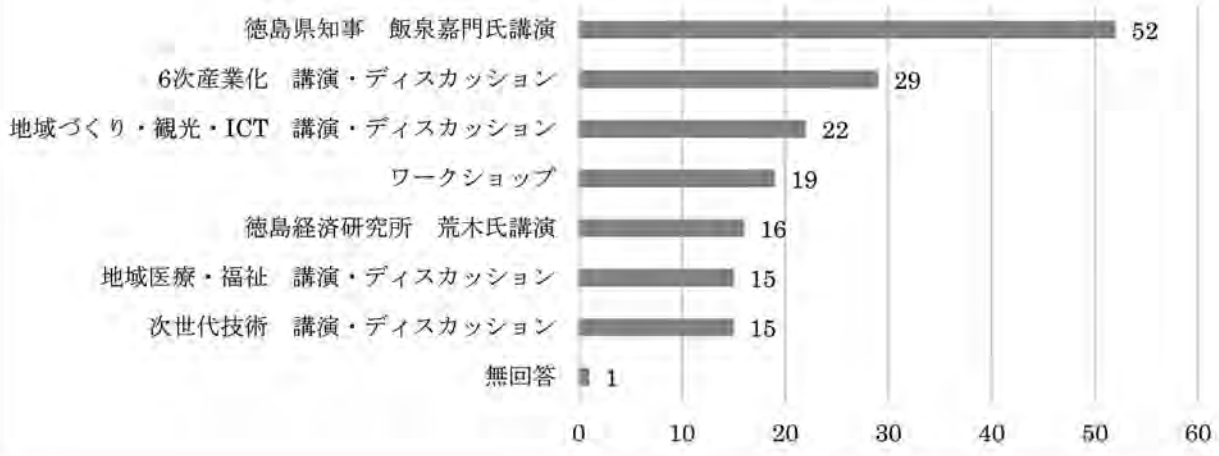
質問2　今回の共同授業にどのようなことを期待して参加されましたか？
（複数回答可）



質問3　期待されていた情報は得られましたか？



質問4　特に満足度の高かった授業は何ですか？（複数回答可）



質問５　この共同授業について特によかったところを記述してください。（抜粋）

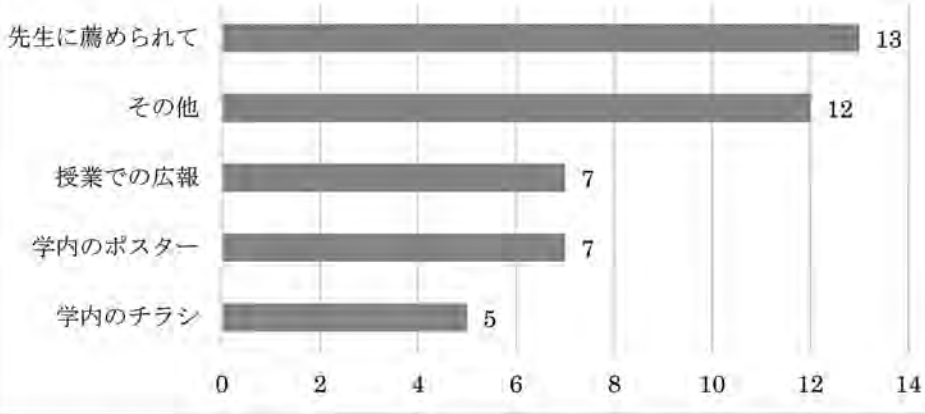
1	自分が学んでいる学問とは別の学問を学んでいる人の考えている事を知って価値観が広がった。自分の学んでいることを生かしてどんな新しいことをできるかを考えたのが自分の為になったと思う。	徳島大・薬学部・２年
2	それぞれの所属する学部によって見方が違い、自分なら思いつかないだろうという発想もあったので良いグループワークができた。	文理大・総合政策学部・２年
3	学生の方とのグループワークでは、学んでいる内容は違っていても繋がっている部分もあり、様々な共通点を今後自分が働く上で活かせる場面が出てくるのではないかと思う。職種も年齢も学校も違ういろいろな方との出会いや意見を聞くことができたという点で良かったと思う。	四国大短期大学部・人間健康科・１年
4	自分は医療の分野だけの情報（見方）だったが、他校の多分野の学生や普段会うことのない社会人の話を聞くことで考え方や価値観が変わり、様々な情報を得ることができた。	四国大・看護学部・３年
5	自分以外の様々な考え方、アイデアに触れることで、自分一人で完結していた考えをさらに広く地域や社会のことまで拡大して考える方法を得たと感じます。	阿南高専・４年
6	徳島という土地に過ごす人々の様々な話を聞くことができ、とても有意義な時間を過ごすことができた。今まで私は徳島という地は資源の少ない場所であると考えていましたが、そんなことはなく徳島にある物を活用しそれを生かした仕事や活動を行えるとても魅力的な場所であるのだと知ることができた。	四国大・看護学部・３年
7	今まで知らなかった徳島の起業などをたくさん知ることができた。将来、徳島の活性化をしたくて魅力を学びに来たが、予想以上に活躍している人がたくさんいて、しかも若い方がたくさんで、すごく尊敬しました。飯泉知事をはじめ、たくさんの方が地域づくりに取り組んでいることが知ることができて本当によかった。	四国大・経営情報学部・１年
8	自分とは異なることを学んでいるからこその意見や感想を聞くことができた。まだ就職について具体的に考えたことはなかったが、講義に参加する前よりも徳島で働きたいと思うようになった。	徳島大・総合科学部・１年

質問６　この授業について改善してほしいところがあれば記述してください。（抜粋）

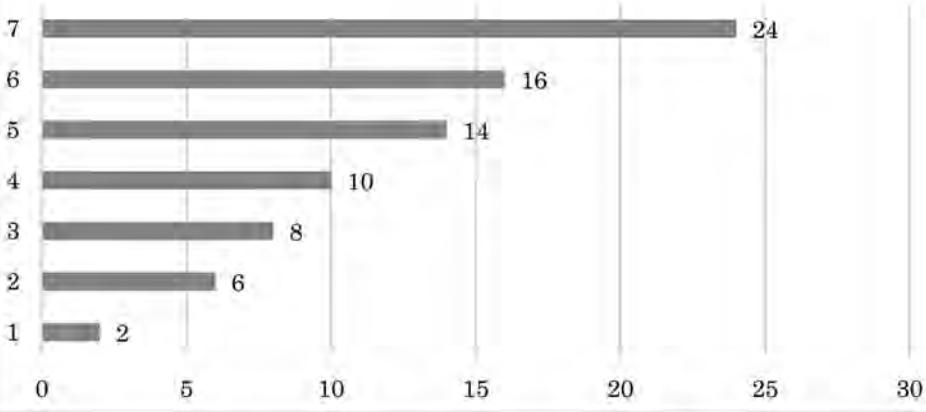
授業構成について	短い時間で一週間ぐらいの期間で開催してほしい。
	ディスカッションをもっと増やしてほしい。
グループワークについて	日ごとにチームメンバーを変更・入れ替えすることも考えて欲しい。たくさんの人の意見や知識を聞くチャンスができます。
	座学だけではなく、身体を動かすこともしたい。
講演、パネルディスカッションの内容について	６次産業化の講演に水産型を増やしてほしい。
今後の学びを広げるための方法について	講談者の中で連絡を取りたい人の連絡先をその人が講談を終えた後にスクリーンに表示して欲しいです。
	HP や QR コードなど、興味を持った人がさらにほりさげやすいよう情報の窓が欲しい。
サテライト配信について	サテライトで共同授業を受けている高校生から質問を待つのではなく、こちらからも高校生の意見をもっと聞くべきだと思う。ツイッターやインスタ、ティックトックなど自分のことや周りのことを発信できるツールを使い、どのようにして全国に世界に徳島の魅力を伝えることができるのか、また高校というほとんどが徳島出身の生徒が思う徳島の魅力についてもっと聞くべきだと思った。
会場設備について	音響設備を整えてほしい。

② 一般参加者

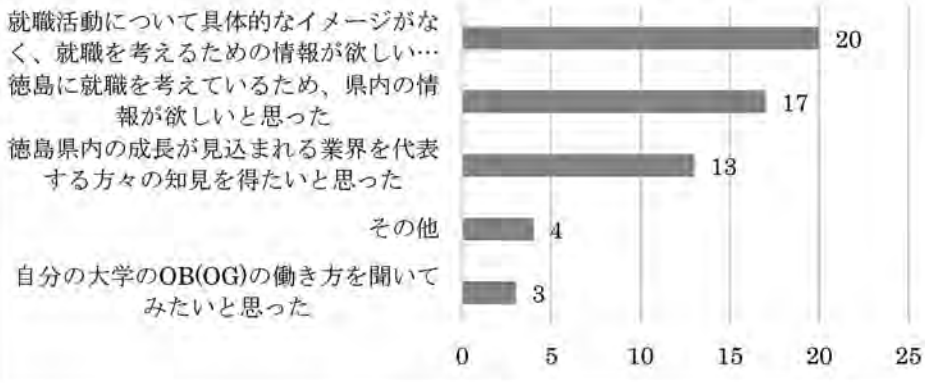
質問１　今回の共同授業を何で知りましたか？（複数回答可）



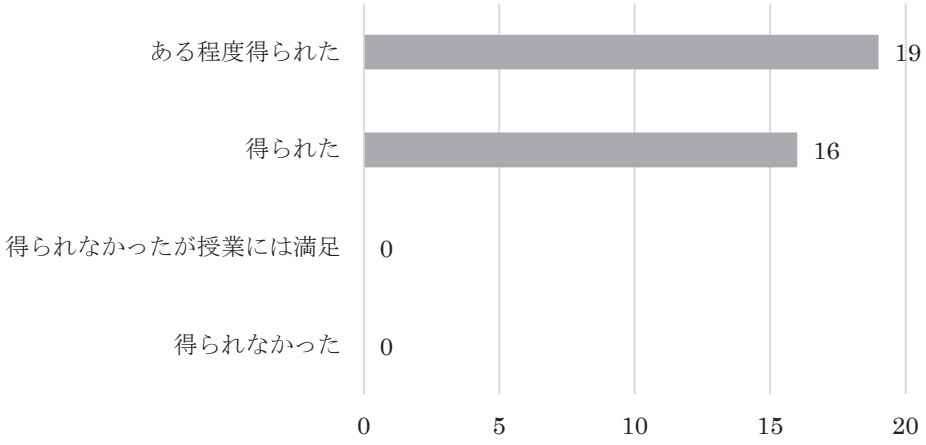
質問２　今回の共同授業では何を受講されましたか？【複数回答可）



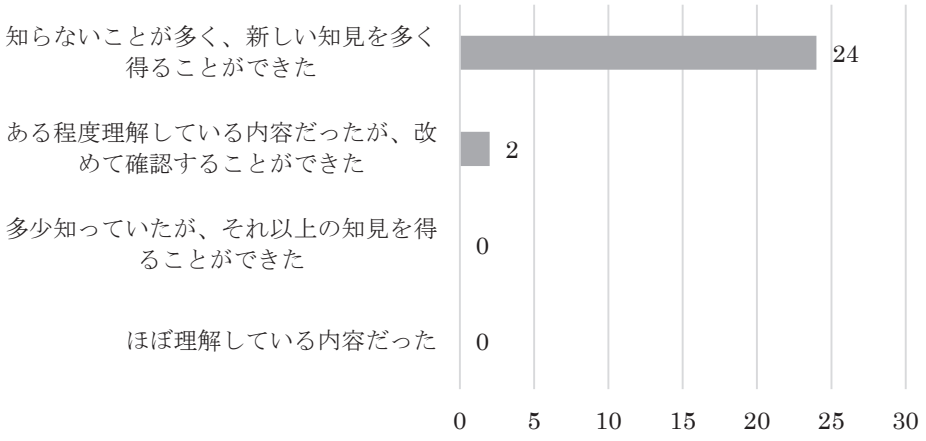
質問３　今回の共同授業にどのようなことを期待して参加されましたか？
（複数回答可）



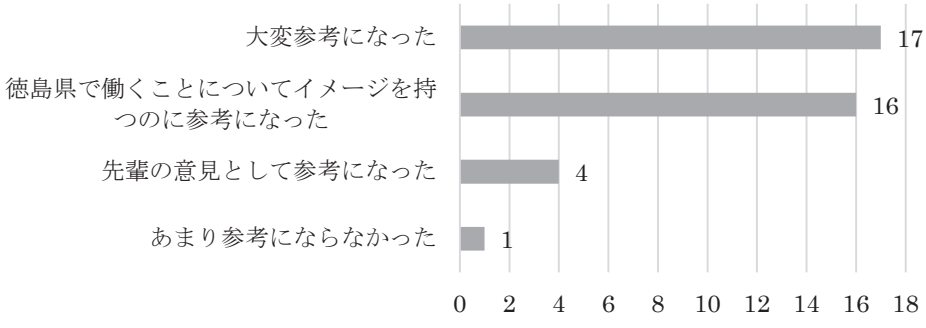
質問４　期待されていた情報は得られましたか？

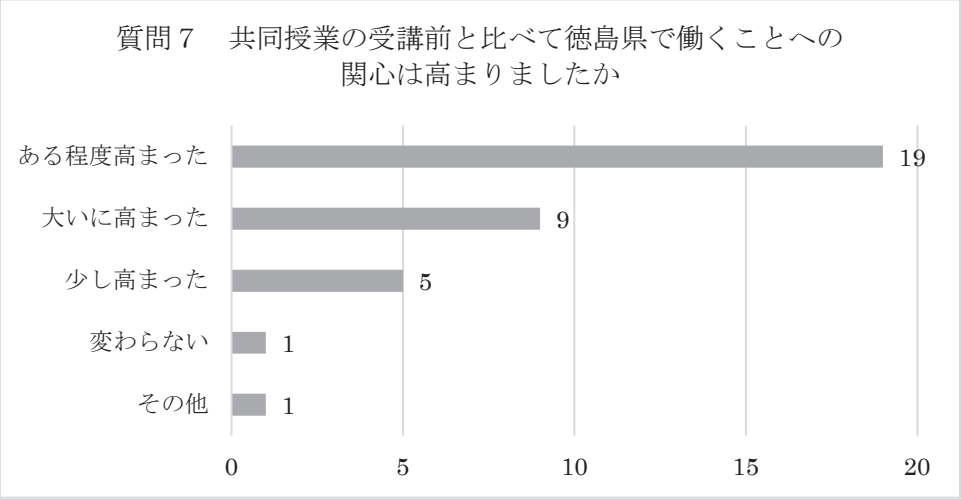


質問５　共同授業を受講して徳島県の産業的な強みや特徴についてどのように感じましたか



質問６　徳島県で働くOB・OGの話は将来を考える上で参考になりましたか





質問８この共同授業について特によかったところを記述してください。（抜粋）

1	徳島で働こうと思っているので、今回の講演で自分の将来への道幅が広くなったように思いました。	新野高校・２年
2	OB、OG による生の声を聞けた事により、現場で何が起こっているのかの生々しい体験を知る事ができた。	徳島大学・３年
3	質問する時間が多くあって理解が深まった。	徳島大学・３年
4	飯泉知事のご講演を聴くことができて良かったです。徳島で行われている事業が知っているものもあれば、知らないものもあり、徳島の魅力を再確認することができました。今回参加することができて良かったです。	城東高校・３年
5	実際に地域づくりの現場で活動している人の話を聞き、地域づくりの生の声を聞くことができ、とても参考になった。	徳島北高校・３年
6	普段話を聞けないような人から貴重な話をきくことができた。	富岡東高校・３年
7	何より具体的なもの（実際進んでいるプロジェクト・県の政策等）を聴くことができイメージができたこと。	徳島大学・３年

8）会場の様子



特別講演を行う飯泉徳島県知事



質疑応答の様子



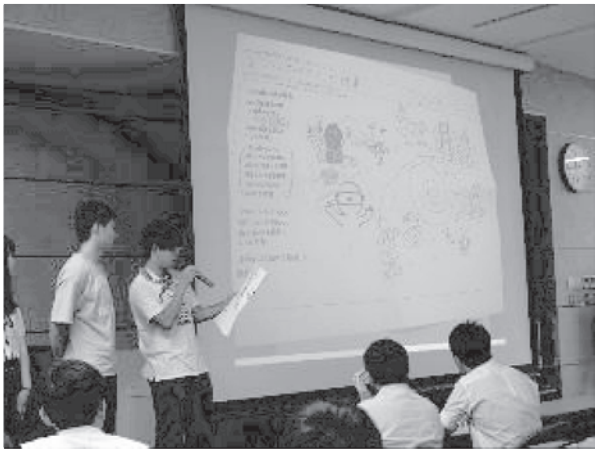
パネルディスカッションの様子



グループワークの様子



グループワークの様子



プレゼンの様子

<サテライト会場>
　8月20日及び8月21日午前について、徳島県立海部高等学校及び徳島県西部総合県民局の2拠点においてサテライト配信を実施した。徳島県立高等学校は12人、徳島県西部総合県民局では9人が受講した。

1）授業日時
　平成30年8月20日～21日

2）参加人数
①海部高校
参加者内訳：海部高校生　12名
海部高校職員　3名
計　15名

②西部県民局会場
参加者内訳：脇町高校生　7名
池田高校生　1名
池田高校職員　1名
計　9名

3）実施内容
8月20日（月）

時間	海部高校プログラム	内　容	メイン会場プログラム
0930	聴　講	本授業の主催者挨拶(徳島大学吉田理事)	主催者挨拶
0935	ワークショップ①	海部高校"こうだったらイイな" ①　ポストイットに書出し添付する ②　グループ毎に理由説明、評価を行う	本授業の主旨説明
1030	聴　講	本授業(知事講演)の見所・聴き所の説明	
1100	聴　講	飯泉知事講演 ※）講演を聴講しながら キーワードや気になった言葉などを ポストイットに個々で記入し、 所定場所に添付後グループ毎に表示	飯泉知事講演
		添付されたポストイットを全員で閲覧し、カテゴリー分けを行う	—
1330	聴　講	※）講演を聴講しながら キーワードや気になった言葉などを ポストイットに個々で記入し、 所定場所に添付後グループ毎に表示	荒木氏講演
		適宜質問をし、添付されたポストイットを全員で閲覧し、カテゴリー分けを行う	
1500	ワークショップ② 時間目安 ①　5分程度	①　貼り出された情報を全員で俯瞰し、グループ内で意見交換を行う。 ②　徳島県の魅力（地域の魅力の発見方法)に	グループワーク

	② 30 分程度 ③ 25 分程度	ついてグループ毎に意見をまとめる。 ③ まとめた意見を発表し、相互評価を行う。	
1600	講 評	阿部教頭より講評(コメント)	

8 月 21 日（火）

時間	サテライト会場 プログラム	内 容	メイン会場 プログラム
0915	オリエンテーション	本授業の見所・聴き所説明	—
0930	聴 講	※）講演を聴講しながら キーワードや気になった言葉などを ポストイットに個々で記入し、 所定場所に添付後グループ毎に表示	岡部氏講演
1030		適宜質問をし、添付されたポストイットを全員で閲覧し、カテゴリー分けを行う。	
1050	聴 講	パネルディスカッション ※）聴講しながら登壇者の行なっている事業が 地域の何に貢献しているのかを考察する。	パネルディスカッション
1150	ワークショップ③ 時間目安 ① 10 分程度 ② 20 分程度 ③ 30 分程度	海部高校、西部総合県民局をテレビ会議システムで繋ぐ。 ① それぞれの(県南・県西)地域において 自分たちにとって必要なニーズや課題に ついて意見出しを行う。 ② それらのニーズや課題が解決することで 何が、どう変わるのかをまとめる。 ③ 各サテライト間で意見交換を行う。	グループワーク
1250	講 評	海部高校；阿部教頭	

4）授業構成

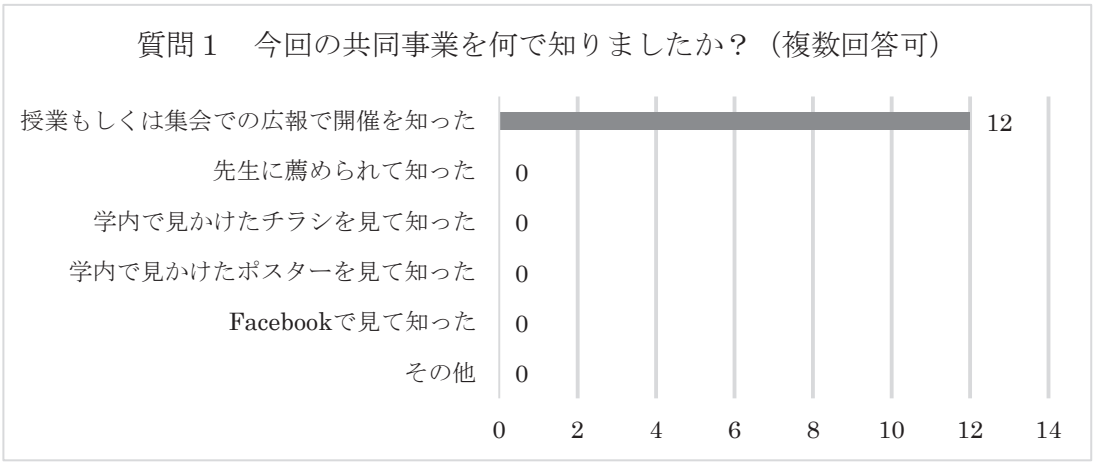
1コマの講演を基本とし、その前後にワークショップを行い、参加者が知った情報をグループワークによって全体で共有した。また、海部高校と西部総合県民局の生徒をテレビ会議システムで繋ぎ、互いに意見交換を行なった。

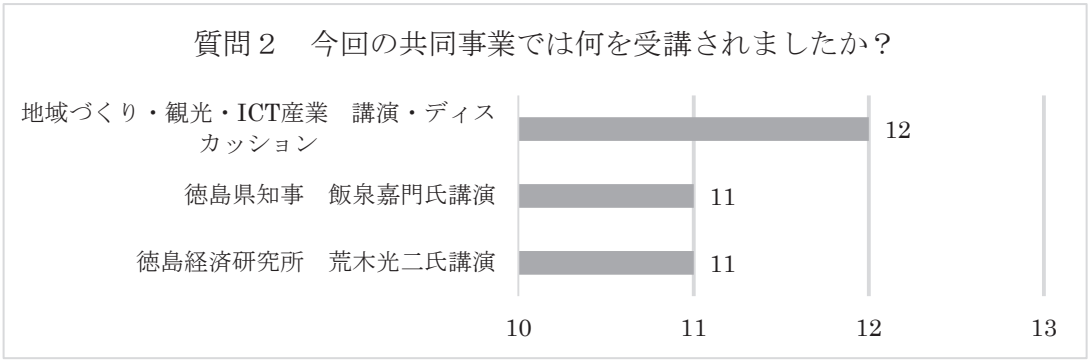
5）ワークショップの内容

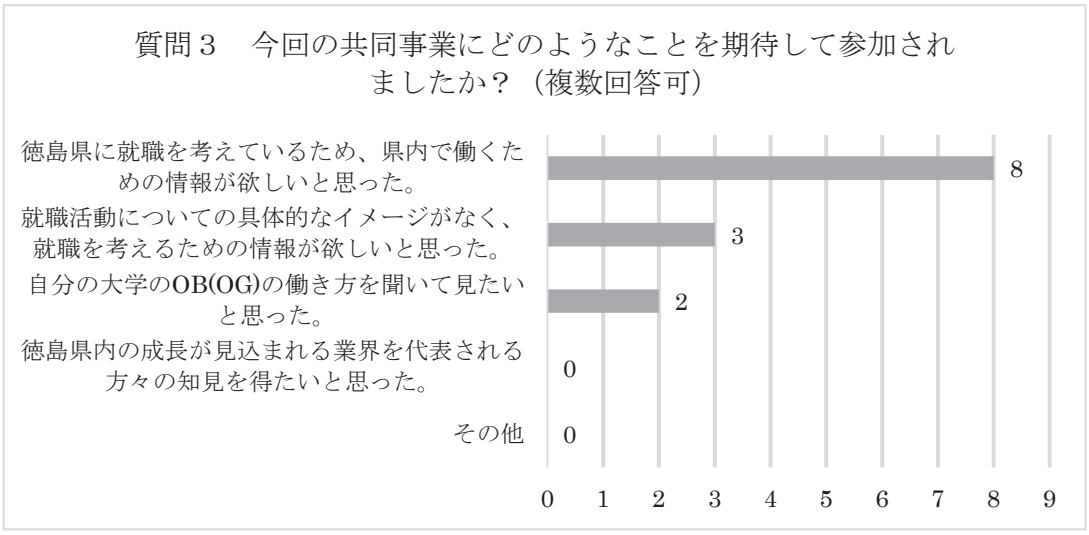
グループワークでは、3~4 名程度のグループに分かれて、講演及びパネルディスカッションの内容を元に、気づいたこと・気になったキーワードなどを、ポストイットに書き出し、模造紙に貼り付け行った。また、講演及びパネルディスカッションの内容を元に、用意したワークシートに記入しながら考え、発表内容を受けてさらにレポートを作成する。

６）アンケート結果

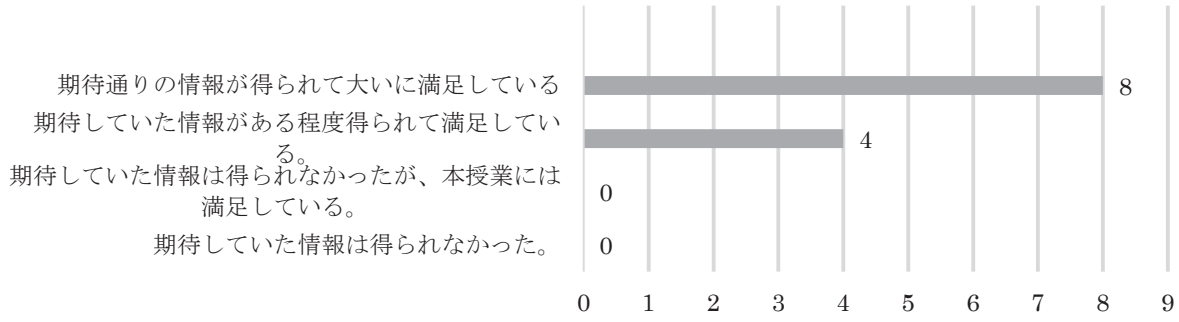
①海部高校



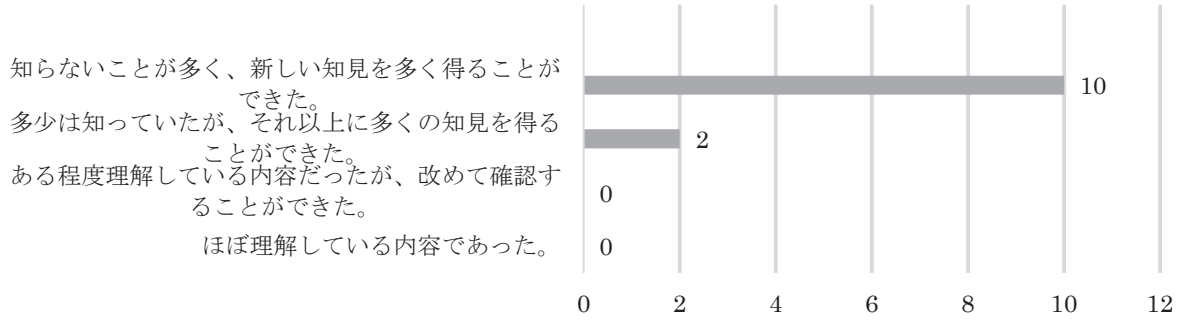




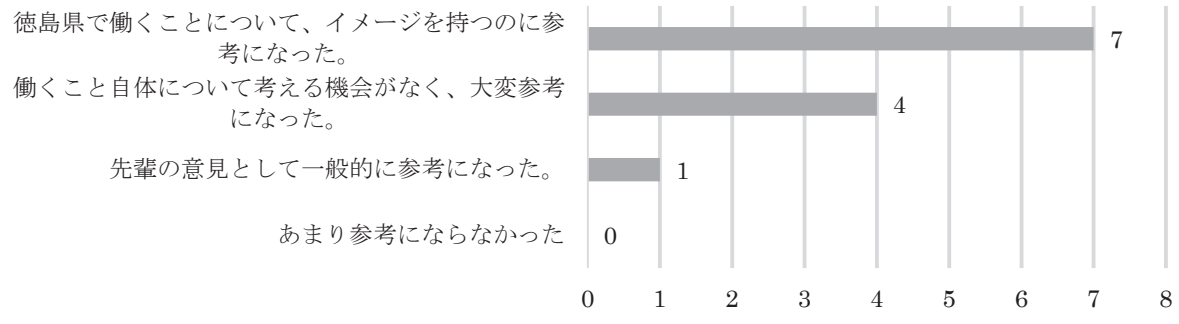
質問４　質問２で回答された目的について期待されてた情報は得られましたか。（一つを回答）



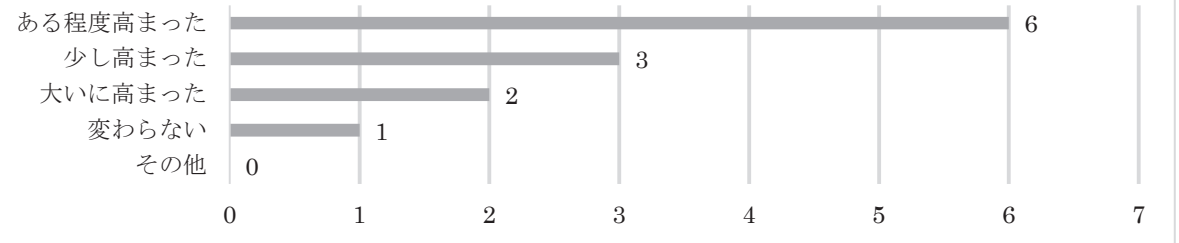
質問５　この共同事業を受講して、徳島県の産業的な強みや特徴についてどのように感じましたか？（一つ回答）



質問６　この共同事業を受講して、働くOB・OGの話は将来を考える上で参考になりましたか？（一つを回答）



質問７　この共同事業の受講前と比較して徳島県で働くことへの関心は高まりましたか？（一つを回答）



質問８　この共同授業について特によかったところを記述してください。（抜粋）

1	様々な視点から地域を豊かにする活動をしていることがわかり、とても良かったです。	海部高校・１年
2	今回の共同事業で私が想像していた以上の徳島県の良さを知ることができ、大変勉強になった。他の人に知って欲しいこともたくさんありました。	海部高校・２年
3	荒木氏の講演では、データをもとに徳島県のいい部分、悪い部分を指摘しており、説得力があった。	海部高校・２年
4	別々の場所の人々と共に授業し、意見交換ができたこと。	海部高校・２年
5	他校の人たちと意見交換ができたのでとても良かったです。	海部高校・２年
6	徳島について知っているつもりでいたけど、知らないところがいっぱいあって興味深いなと思えたところ。	海部高校・２年
11	社会に出てからの学習が勝負だと知ることができた。	文理大・総合政策部・１年

質問９　この授業について改善してほしいところがあれば記述してください。（抜粋）

受配信環境について	マイクの調子が悪かったところ。
	少し電波が悪くて聞こえづらい部分があったので、もっと音質や画質が上がればいいと思う。

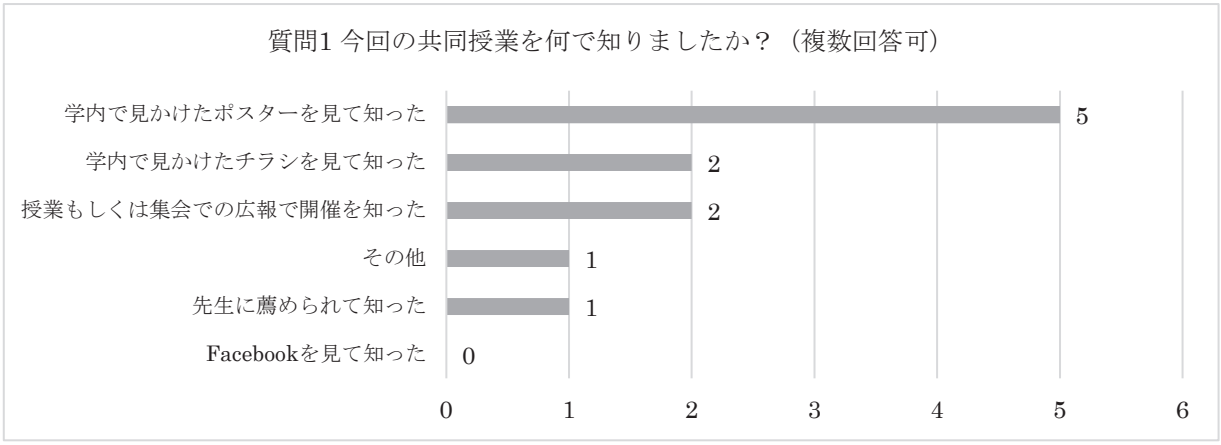
７）振り返りと今後の運営について

来年度以降の実施について、コンセプトは変えずに講義内容、講義の質、インフラ、連携等についてどのように改善をはかっていくべきかについて意見をとりまとめた。

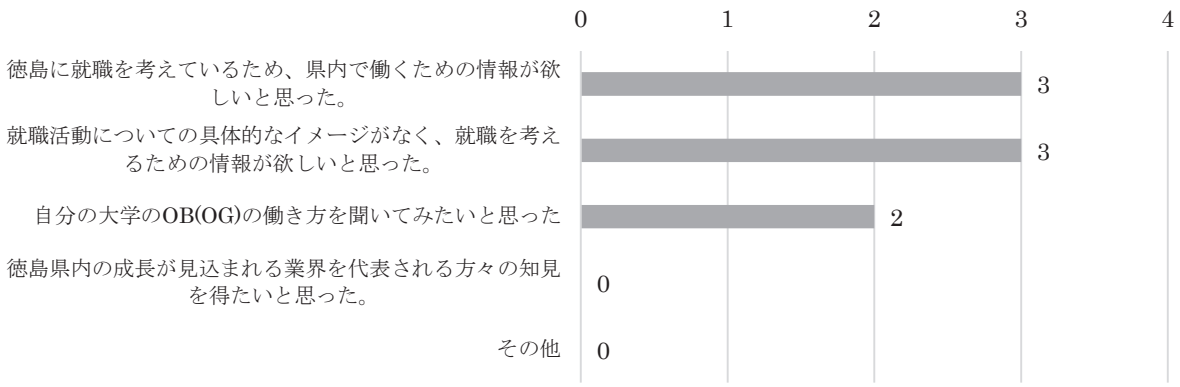
	反省点	改善案	今後に向けての提案
講義内容	・W/S の際にワークシートに書き込む内容が口頭の説明だけでは理解しづらい。 ・W/S の際、アドバイスで話した内容をそっくりそのまま真似して書くなどで、意見に偏りが見られた。 ・授業の終盤になるにつれて、時間通りにワークが進まなくなった。 ・意見交換の際の互いのワーク	・ワークシートに記入例を書き込んだものを配布する。 ・講演内容とパネルディスカッションの内容をリンクさせる。 ・アドバイスはあくまでもアドバイスとして重要な観点を伝え、あとは考えてもらう。 ・生徒側の様子を確認し、適宜ストレッチなど疲れを緩和する行動を促す。 ・あらかじめ出来上がったワーク	・生徒側は良くも悪くもこちらのとったアクションに対して素直に応じてくれる。しかし、ワークの際に自分の意見を出す際に動きが止まってしまう。そこで、最初に生徒が話しやすい空間を作る時間を多めに確保することを推奨する。

	シートの共有で時間を取られた。	シートをデータ化し、互いの会場で見れるようにする。	
インフラ	・パネルディスカッションの音声が聞き取りずらかった。 ・講義中の動画をサテライト先で流したが、本会場側とのタイムラグが大きい。 ・事前準備の際よりも映像、音声共に通信が不安定だった。 ・会場ごとのマイクによって聞き取りづらさに差があった。	・バックアップへの切り替え。 ・事前に動画ファイルの再生のタイミングを打ち合わせる。 ・事前準備と、当日での変更点を共有し、修正する。 ・話す際にマイクを近づけて話すように伝える。	・インフラの使用に慣れておく。 ・本番と同程度のテスト（全拠点・配信時間）を遅くても１か月半前に実施し、設備制約上の課題等を洗い出し、メインでの配信方法のトラブル発生時を想定した、サブの配信方法（への切り替えルール決め（何分停止した場合など）作業のリハーサル、その際に想定される拠点での動きやルールを設定しておく。 ・１～2 秒のタイムラグがあるので発表を行う際はゆっくり話すよう生徒に伝えるのが良い。
その他	・昼食時間中はサテライトを一時中断した方が良かった。	・昼食時間中はサテライトを一時中断する。	・生徒の多くがお弁当を持参で来ていたので昼休みは昼食スペースとして落ち着いて食べて休憩できる空間を提供するのが良いだろう。

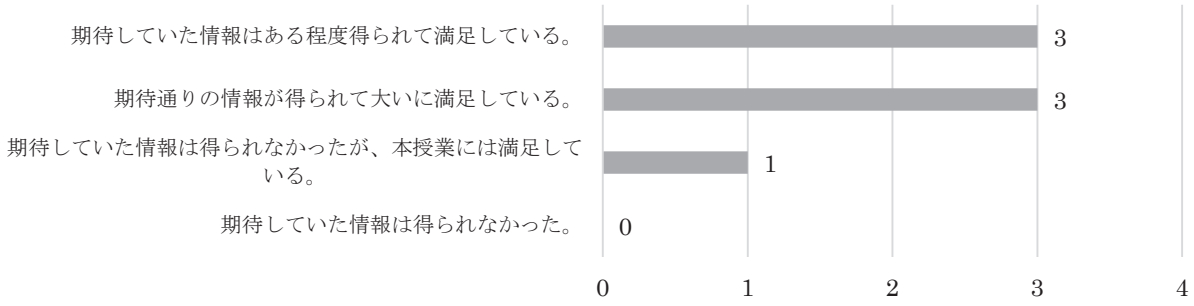
②徳島県西部総合県民局



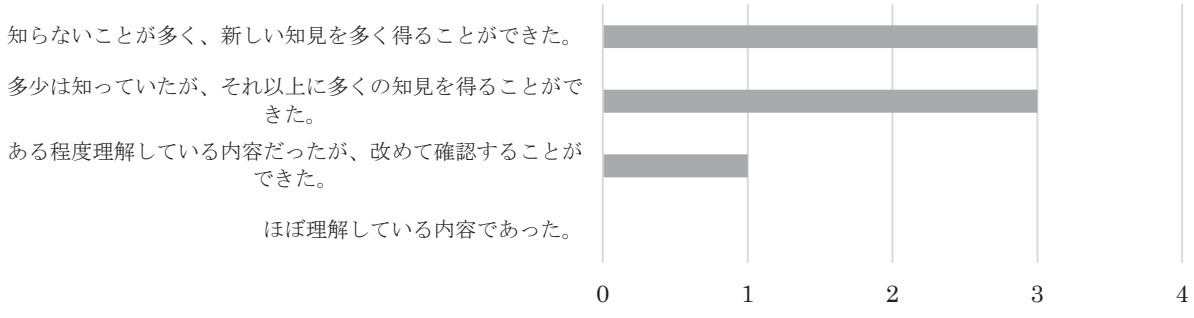
質問3 今回の共同授業にどのようなことを期待して参加されましたか？（複数回答可）



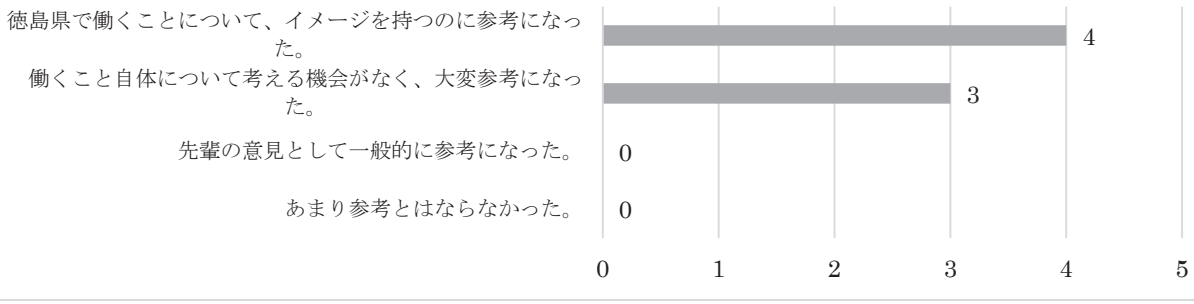
質問4 質問3で回答された目的について、期待されていた情報は得られましたか？（一つを回答）



質問5 この共同授業を受講して、徳島県の産業的な強みや特徴についてどのように感じましたか？（一つを回答）



質問6 この共同授業を受講して、徳島県で働くOB・OGの話は将来を考える上で参考になりましたか？（一つを回答）





質問７　この共同授業について特によかったところを記述してください。（抜粋）

1	徳島ヴォルティスに就職したいと考えているので、徳島ヴォルティスの仕事が聞けて良かった。	脇町高校・１年
2	良い取り組みだと思う。起業、地域活性について貴重な学びの機会でした。	池田高校
3	多くの人の意見が聞けて面白かった。他校との協同もあり交流にもつながった。徳島についてもっと知ることができた。	池田高校・３年
4	海部高校との言い合い。	脇町高校・１年
5	グループワークが良かった。	脇町高校・１年
6	遠く離れた高校とコミュニケーションが取れた。	脇町高校・１年
7	スライドの資料があったところ。海部高校とのセッション。	脇町高校・１年

質問８　この授業について改善してほしいところがあれば記述してください。（抜粋）

受配信環境について	中継のタイムラグ。
授業の構成について	コンテンツの終わりの時間が後ろ倒しになり、休憩時間が短くなった。 昼食抜きで 13:30 までぶっ通しは体力的にきつい。
講演、パネルディスカッションの内容について	パネルディスカッションのスライドが早いので、手元にレジュメが欲しい。

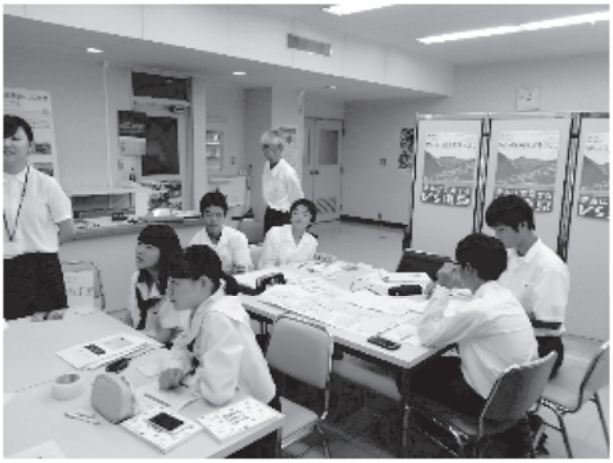
8）会場の様子

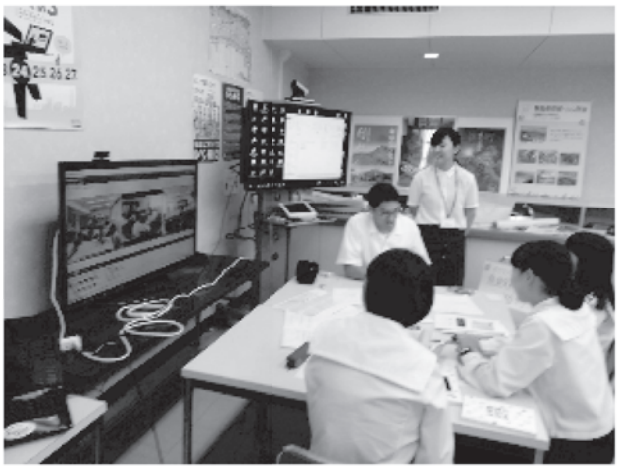












平成 30 年度「徳島の魅力、徳島で働く～徳島で輝く産業を知る～」の開催について

県内大学、高専の学生と保護者及び県内大学への進学を希望する高校生を対象に、県内企業の魅力やビジョン、また、徳島県で働くこと、暮らすことの意義について周知を図り、県内での定着率の増加につなげることを趣旨・目的とし、ガイダンスを実施した。徳島の成長・課題分野と関連企業についての紹介、県内企業の今後の経営戦略に基づく『人材活用』『人材登用』における取り組みなどの情報提供を対象者に対して行い、今後成長が期待できる企業や業界の人材ニーズについて学生・保護者の理解を広げた。

（1）企画名
「徳島の魅力、徳島で働く～徳島で輝く産業を知る～」

（2）日時
平成 30 年 12 月 15 日（土）13:00～16:30

（3）会場
徳島大学常三島キャンパス理工学部内　共通講義棟 6 階創成学習スタジオほか

（4）内容
13:00　　：開会挨拶（吉田和文徳島大学理事）
13:05-13:10：趣旨説明（山中英生推進監）
13:10-13:45：基調講演『データから見る徳島の未来』竹中淳二氏（(公社)徳島経済研究所理事・事務局長）
13:45-14:05：学生レポート
登壇者
森本　美沙希（理工学部 3 年・H30 年度大塚テクノ（株）インターン生）
中山　真一（大塚テクノ（株）人事総務部係長）
ファシリテーター;
森下　陽裕（工学部 4 年生・H29 年度大塚テクノ（株）インターン生）
14:05-15:30：ガイダンス『４分野関連企業の経営戦略やビジョン、人事戦略等の紹介』
①次世代技術関連分野；藤崎耕治氏（藤崎電機（株）代表取締役）
②地域医療・福祉関連分野；保岡伸聡氏（(社福）あさがお福祉会 CEO）
③6 次産業化関連分野；橋本直史氏（徳島大学生物資源産業学部講師）
④地域づくり/観光/ICT 関連分野；彌野静香氏（(株)あわえ事業開発部地域コンテンツマネージャー）
15:30-16：30：個別企業相談会　（21 社）
①次世代技術関連分野；
大塚テクノ(株)、藤崎電機(株)、(株)NDK、阿波製紙（株）、ﾘﾙﾍﾞｲ･ｽﾍﾟｼｬﾙｹﾑ･ｼﾞｬﾊﾟﾝ（株）、徳島カム（株）、坂東機工（株）、西精工（株）、阿波ｽﾋﾟﾝﾄﾞﾙ（株）、馬居化成（株）
②地域医療/福祉関連分野；
(株)テレコメディア、（社福）あさがお福祉会
③6 次産業化関連分野；
（株）丸本、(有)樫山農園、市岡製菓(株)、全国農業協同組合連合会徳島県本部
④地域づくり/観光/ICT 関連分野；
(株)ネオビエント、海底少年、（株）電脳交通、（株）昌栄、（株）あわえ



基調講演の様子



学生レポートの様子



ガイダンスの様子



個別企業相談会の様子

（５）来訪者数

97 人（学生 39 人、保護者 10 人、関係者 13 人、出展者 35 人）
【参考】平成 29 年度来訪者数 238 人（学生 117 人、保護者 29 人、関係者 53 人、出展者 39 人）

①学校別参加者数

	徳島大	四国大	徳島文理大	阿南高専	徳島工短	高校	計
学生	33	0	1	0	0	5	39
保護者	8	0	0	1	0	1	10
計	41	0	1	1	0	6	49

②学部別参加者数（徳島大学のみ）

	総合科学	医	歯	薬	理工（工）	生物資源	大学院	計
学生	10	1	0	7	9	4	2	33
保護者	2	0	0	0	5	1	0	8
計	12	1	0	7	14	5	2	41

③学年別参加者数

	高２	高専３	専門２	学部１	学部２	学部３	学部４	院１	計
学生	4	0	1	16	7	7	2	2	39
保護者	1	1	1	4	3	0	0	0	10
計	5	1	2	20	10	7	2	2	49

（6）アンケート回答の抜粋（有効回答数：学生 26 人、保護者 5 人）

①徳島県内の企業への就職についてどの程度関心がありますか。（一つ）

		学生	保護者
①	本ガイダンスの参加以前より、徳島県内へ就職を考えていた。	5 人	3 人
②	本ガイダンスの参加以前より、就職先として選択肢に考えていた。	6 人	1 人
③	本ガイダンスに参加して、就職先として選択肢に考えるようになった。	8 人	1 人
④	就職先としてはあまり考えていない。	7 人	0 人

②どのような目的で本ガイダンスに参加されましたか。（複数可）

		学生	保護者
①	県内企業の情報が欲しかった。	16 人	3 人
②	県内企業の強みや可能性を知りたかった。	11 人	2 人
③	県内企業に就職するための具体的なアドバイスが欲しかった。	1 人	3 人
④	就職先に迷っており、選択肢を増やしたかった。	9 人	1 人
⑤	その他	2 人	0 人

③質問②で回答された目的について期待されていた情報は得られましたか。（一つ）

		学生	保護者
①	期待通りの情報が得られて満足している。	20 人	3 人
②	期待していた情報は得られたが、不十分である。	3 人	2 人
③	期待していた情報は得られなかったが､本ガイダンスには満足している。	2 人	0 人
④	期待していた情報は得られず、不満である。	1 人	0 人

④このようなプログラムを実施するに際して、どの時期が適切ですか。（一つ）

		学生	保護者
①	適切である。	17 人	5 人
②	もっと早く実施して欲しい（7 月、8 月、9 月頃）	3 人	0 人
③	もう少し早く実施して欲しい（10 月、11 月頃）	6 人	0 人
④	もう少し遅く実施して欲しい（1 月、2 月頃）	0 人	0 人

⑤自由記述

【基調講演】

良かった点

・全国と比べて徳島県の人口と所得は低いものの、一人あたりでは以外と順位が高く、生活に関するデータでも充実していると分かり、住みやすい県だと分かったこと。（徳島大学薬学部創生薬科学科 1 年）

改善してほしい点

・資料の地図やグラフの中の文字を少し見やすくしていただきたい。（徳島大学薬学部薬学科 1 年）

【学生レポート】

良かった点

・インターンシップに参加することで得られるものの多さだったり、考え方の変化があることを聞いて、インターンの大切さを知りました。（徳島大学生物資源産業生物資源産業学科 2 年）
・年齢の近い学生の方の体験談だったので、とても参考になった。（徳島大学総合科学部）

改善してほしい点

・手元に資料が欲しいです。最初のスライドが追えませんでした。良い点だけでなく、自身が大変だったことも聞きたいです。（徳島大学総合科学部社会総合科学科 1 年）

【ガイダンス】

良かった点

・普段生活しているだけでは知ることができない業種の仕事内容を知ることができた。種々の企業の企業理念を知って興味が湧いた。（徳島大学工学部知能情報工学科 3 年）

改善してほしい点
・インターンを通して、仕事へのやりがいを見つけ、又、自己成長ができることを自分の子供にも是非体験してもらいたいと思います。（保護者）

【個別企業相談会】
良かった点
・20 分は本当にあっという間でした。気になった企業の方とお話できるチャンスがあったため、より徳島の企業で働くというイメージがわきました。来年もこのプログラムを続けて欲しいです。（徳島大学総合科学部社会総合科学科 3 年）
改善してほしい点
・企業との個別相談会は長くしていただき、時間で区切らないようにした方がいいと感じた。（徳島大学総合科学部社会総合科学科 1 年）

【プログラム全体について】
良かった点
・個別相談会は特に自分にとっては貴重な機会になったと思う。（徳島大学生物資源産業生物資源産業学科）
・今まで知らなかった徳島県内の企業や働くことの魅力について学ぶことができてよかった。（徳島大学薬学部薬学科 1 年）
改善してほしい点
・企業の配置マップが手元にあればうれしい。（徳島大学総合科学部）

平成 30 年度 FD 地域人材育成フェスタの開催について

COC+事業の一環として、インターンシップなど、事業において進める連携団体との協働の課題とノウハウを共有するための FD 地域人材育成フェスタを、2 月 22 日に徳島グランヴィリオホテルにて開催した。その詳細について報告する。

（1）実施の目的

今年度の COC+事業での取組を振り返り、そこにおける成果や課題を「とくしま元気印イノベーション人材育成協議会」に参加する高等教育機関、行政、民間企業、経済団体、NPO 等、地域全体で確認・共有するとともに、今後の事業の進め方や県内就職率向上に向けた取組について協議する。また、事業終了後のコンソーシアム立ち上げに向けて、その目的や事業内容、組織形態に関する議論を深め、発足に向けて共通認識を広げる。

（2）参加人数

事業参加校教職員	：	50 名
県内企業、団体等	：	20 名
徳島県関係者	：	27 名
行政機関職員	：	1 名
外部評価委員	：	1 名
高等学校教職員	：	3 名
学生	：	11 名
県外企業、団体等	：	5 名
計	：	118 名

（3）プログラム概要

【第一部】平成 30 年度の COC+事業成果報告

今年度の COC+事業での成果報告として、四国大学が実施している「創業支援事業」、徳島大学が実施している「実践力養成型（寺子屋式）インターンシップ」、参加校協働事業について、取り組み内容や課題等の報告を行った。

報告①：創業支援事業の取り組み（四国大学）
報告②：実践力養成型（寺子屋式）インターンシップの取り組み（徳島大学）
報告③：参加校協働事業の取り組み（徳島大学）

【第二部】地方創生産官学コンソーシアムとくしま構想（仮称）に関するパネルディスカッション及びワークショップ

事業終了後のコンソーシアム立ち上げに向けて、その目的や事業内容、組織形態に関する議論を深めるためにパネルディスカッションを行った。

導入部分では、玉推進監から「地方創生産学官コンソーシアムとくしま(仮称)」構想について説明があった。続いてパネラーよりそれぞれの取り組みについて発表があり、その後、それぞれの発表に関して質疑応答を行った。

導入　：「地方創生産学官コンソーシアムとくしま(仮称)」構想について
（徳島大学　玉推進監）
発表①　：九州インターンシップ推進協議会設立の経緯とこれまでの取組について
（九州インターンシップ推進協議会　事務局長　チェ・キョンミ氏）
発表②　：情勢の変化に伴うインターンシップ事業の変化について
（NPO 法人 ETIC.　ローカルイノベーション事業部長　伊藤淳司氏）

発表③　：実践力養成型（寺子屋式）インターンシップの取組について
（徳島大学　川崎コーディネーター）
発表④　：事業・経営における戦略上のインターンシップに取り組む上での受入側の課題とメリットについて
（有限会社　樫山農園　代表取締役社長　樫山直樹氏）

ワークショップでは、地域人材の育成及び確保をはかるための産官学連携の強化にむけて、次の２つのテーマで話し合った。

テーマ１：インターンシップの意味・意義について
①受入側の課題とメリット
②コーディネーターの役割
③マッチング等
テーマ２：コンソーシアムについて

【第三部】情報交換会

参加教員、行政機関の職員、参加企業・団体の間で情報交換を行った。

（４）事例報告の概要

【第一部】平成３０年度の COC+事業成果報告

報告①「創業支援事業の取り組み」（四国大学） 報告者：吉田寛夫（四国大学創業支援クリエーター） ・　四国大学が COC+事業で実施している創業支援事業について、事業実施内容及び成果の報告を行った。 ・　成果報告では、学生１名が「チャレンジショップ　in 東新町」についての発表を行った。
報告②「実践力養成型（寺子屋式）インターンシップ」（徳島大学） 報告者：川崎克寛（徳島大学 COC+推進コーディネーター） ・　徳島大学が推進しているプロジェクト型のインターンシップ（寺子屋式インターンシップ）について、取組の趣旨を説明し、平成 30 年度の実施内容及び成果の報告を行った。 ・　パネルディスカッション形式で、インターンシップに取り組んだ受入れ企業 1 名、同企業において今年度インターンシップを行った学生 1 名、昨年度インターンシップを行い、今年度はサポートを行った学生 1 名が、インターンシップの成果、取り組みを終えての想いについて発表を行った。
報告③「参加校協働事業の取り組み」について 報告者：山中英生（徳島大学 COC+推進監） ・　参加校共同授業「徳島の魅力、徳島で働く」及び学生+保護者+高校生ガイダンス「徳島の魅力、徳島で働く～徳島で輝く産業を知る～」について、実施内容詳細、参加者アンケート集計結果等の報告を行った。

【第二部】ワークショップ

導入　：「地方創生産学官コンソーシアムとくしま（仮称）構想」について
報告者：玉　真之介（徳島大学 COC+推進監）

・　地域と大学が果たすべき、新しい連携や協力について発表を行った。
・　「とくしま元気印イノベーション人材育成協議会」を母体として、平成 31 年度を目処に設立を予定しているコンソーシアムの意義と今後の展望について、発表を行った。
・　直後に行われるワークショップのテーマ発表を、最後に行った。

発表①：九州インターンシップ推進協議会設立の経緯とこれまでの取組について
報告者：チェ・キョンミ（九州インターンシップ推進協議会　事務局長）

発表②：情勢の変化に伴うインターンシップ事業の変化について
報告者：伊藤　淳司（NPO 法人 ETIC.　ローカルイノベーション事業部長）

発表③：実践力養成型（寺子屋式）インターンシップの取組について
報告者：川崎　克寛（徳島大学 COC+推進コーディネーター）

発表④：事業・経営における戦略上のインターンシップに取り組む上での受入側の課題とメリットについて
報告者：樫山　直樹（有限会社　樫山農園　代表取締役社長）

ワークショップ：産官学混合チーム（テーブルメンバー）により、「インターンシップの意味・意義」及び「コンソーシアム構想」（(8) 参照）についての意見交換を行った。

ワークショップで出た意見について、抜粋したものを以下に記載する。

- 今までのノウハウ、スキームを共有させてもらえるのか、見せてもらえるのか。単位制度で各大学が連携できるのか？
- 参加金を出して参加する企業や大学が徳島にあるか。
- 大学生が 1 年間の長期間でどう学業と両立するのか。
- 九州と比較しているなら、サイズがちがう。どのように徳島でやっていくのか？
- 企業と学生の双方にあったインターンシップのマッチングがなされることが望ましい。
- COC+事業終了後の継続のための仕組み（人材確保及び資金含む）。

（5）アンケート回答の取りまとめ

【第一部：COC+事業報告についての感想】

報告①　「創業支援事業の取り組み」について

- 事業内容をほとんど知らなかったため、取り組みを知れてよかった。（徳島県職員）
- 若い人たちに起業を意識してもらうのはとてもいいコトだと思った。自分も学生のときにこんな体験ができたらと感じた。（徳島県職員）
- 卒業後の進路を考える上で起業について思いをはせるようになったという学生さんの感想が興味深かったです。（阿南高等専門学校教員）
- 商店街の活性化はどの市町村にもあてはまる課題であり、今後の参考としたい。（行政機関職員）
- 東新町のチャレンジショップについてはぜひ継続・定着を目指してほしい。そのためにも単に体験として楽しかったで終わらせず、学生のモチベーションを維持しつつ、事業としてやっていく方法についても議論として聞きたい。（徳島大学教員）
- チャレンジショップのような学生に地域がかかえる課題を取り組ませる事業があり、面白いと感じた。教えられるだけではなく、やってみる場があることは学生にとって大きな価値があると思う。（徳島大学学生）
- 学生自身で事業を企画・運営を行う取組みは非常によい経験になると思う。起業される方が増えれば地域活性化にもつながる。また、本取組みによって主体性を持った考え方等が養成されると思うので、企業に入った場合でも活躍できる人材となると思う。（参加企業）
- 地域の活性化のため、使命感やチャレンジ精神につき動かされた若い力を感じた。（参加企業）

報告②「実践力養成型（寺子屋式）インターンシップ」について

- 実際にインターンシップに参加した学生さんの声が聞けて、どういう効果があるのかわかった。（徳島県職員）

・　長期間のインターンシップで学生の成長につながると思う。受け入れ担当としてもとても良い経験になった。就職につながればいいと思います。（徳島県職員）
・　学年をまぜてのチームを作って一緒に起業の問題解決に取り組む本事業にはとても興味を持ってお話しを聞かせていただきました。（阿南高等専門学校教員）
・　教育理論に実際に導入可能な形にもっていけているのがよい。企業側にも社員の「成長」があったというのがポイントだと感じた。（徳島大学教員）
・　ストレス耐性のない学生がストレスのかたまりであるプロジェクトに取り組む機会を持つことは、教育効果として良い（＝学生のメリット）受入企業のメリットは、企業の方で積極的に関わり、自ら得ようとしなければ効果は見込めない。教育ボランティアの考えでは成功しないことがわかった。ドンのメリット＝人材育成（社会人養成）のためのスキル（積極的に関わって初めて得られる）を得た。指導のスキルも。（徳島大学教員）
・　成長するチャンスとなったし、社会人に入って知ることを学生の時に触れ体験することができて良かった。発表お疲れ様でした。（徳島大学学生）
・　良い取り組みかつ受入企業（樫山農園様、市岡製菓様等）の選定も良いと思う。コーディネーターの方が能力の高さ、努力が重要だと思うので、そういったコーディネーターの増員も今後の規模拡大には必要だと思う。（参加企業）
・　新学習指導要領導入により発生するニーズに対応した視点はすばらしいと感じた。学校での学びが実践につながっている点も良い。専門性を持っている強みを感じた。今後の広がりに期待したい。寺子屋式という企業、大学、学生の連携、サポート体制、カリキュラムはインターンシップの効果を大いに上げてくれると思う。（高等学校教員）

報告③「参加校協働事業の取り組み」について
・　早い段階でのガイダンスは興味をもってもらうという点で有効だと思う。（徳島県職員）
・　４日間、他分野の人を知る事が大切。（徳島工業短期大学職員）
・　県内企業に関する学生の認知度がどの程度変わったのか、データに興味があります。（徳島大学教員）
・　多分野の企業、学生の参加により、徳島の強み、ビジョンを考えられている。（参加企業）
・　徳島の課題と魅力を若い視点から洗い出すのは大人と違った発想発展があり、有意義だと感じる。そのうえで現場の声を聞くことで、より現実的、実践的になると思う。（高等学校教員）

【第三部：コンソーシアムとくしま・ワークショップについての感想】
・　いろいろな意見がきけてよかったが、ワークショップは時間が短かったと思う。（徳島県職員）
・　インターン生のモチベーションに加えて受入企業のモチベーションをいかに継続させていくかが重要と思われる。プロジェクト活動と同じで人を巻き込むことが大切。（徳島大学教員）
・　文化系・理科系・分野にとってインターンのより良いやり方はそれぞれに違うように思います。
・　皆さんのご発言の中からインターンシップだけにとどまらない大学教育についての示唆をいただきました。（徳島工業短期大学教員）
・　インターンシップの負の循環、形骸化を感じているので、企業・地域にメリットのあるインターンシップという発想はとても参考になった。送り出す学校側の責任が大きいと思うので、事前研修をしっかりと行っていただきたい。（高等学校教員）

（７）会場の様子



開会挨拶をする野地学長



【第一部】創業支援事業の取組報告の様子



【第一部】インターンシップの取組報告の様子



【第二部】パネルディスカッションの様子

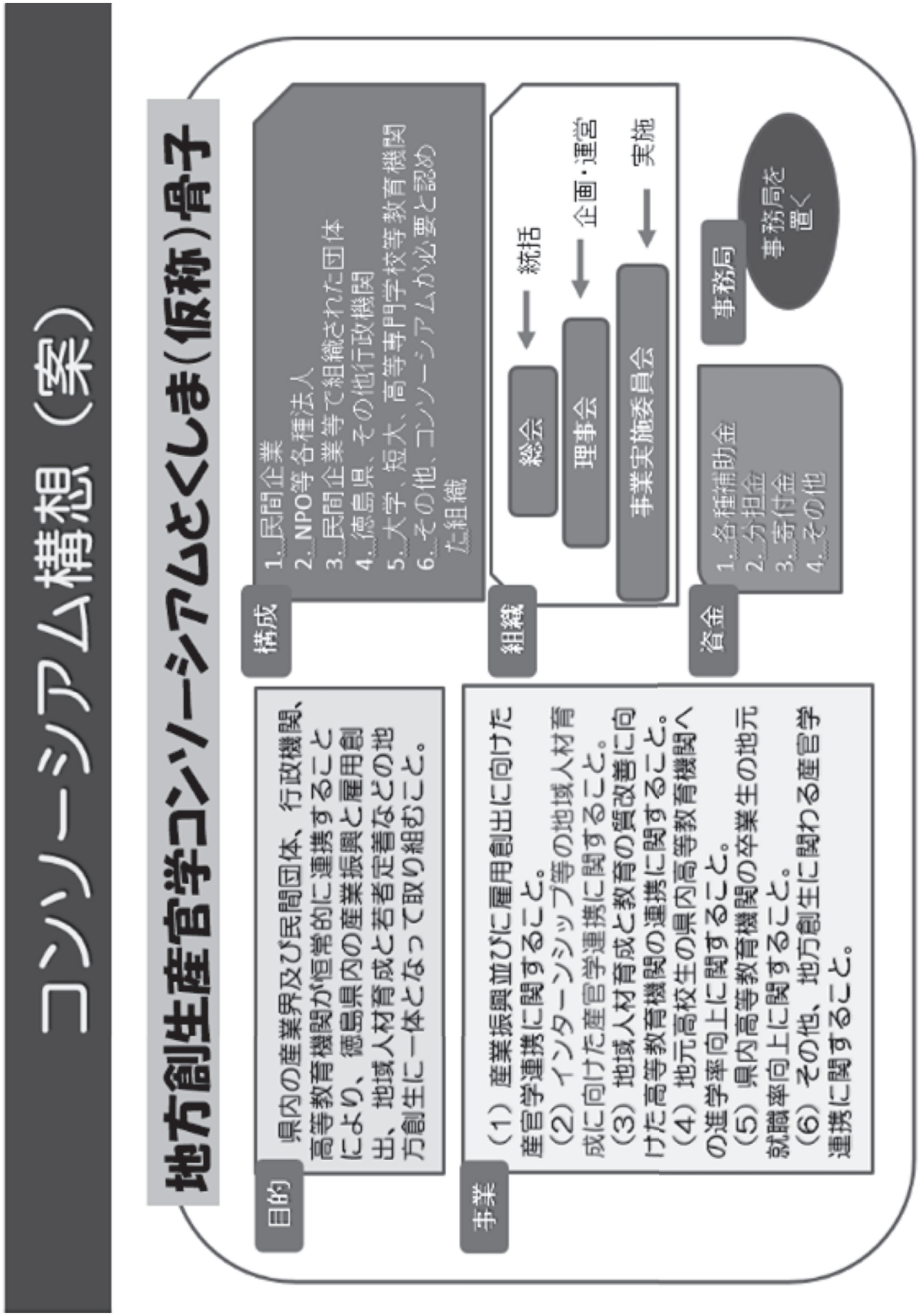


【第二部】ワークショップの様子



閉会挨拶をする吉田理事

（８）「地方創生産官学コンソーシアムとくしま（仮称）構想」



参考資料

Tokushima University COC Center of community

とくしま元気印イノベーション人材育成プログラム ニュースレター

Vol.4
2018.7

CONTENTS

●平成 29 年度事業全体の取組と総括
●中間評価の結果について
●コンソーシアム設立に向けて
●第 6 回とくしま元気印イノベーション人材育成協議会の実施報告
●平成 30 年度実践力養成型（寺子屋式）インターンシップの取組
●平成 30 年度創業支援事業の取組
●平成 29 年度徳島の魅力、徳島で働く～徳島で働くためのガイダンス～実施報告
●平成 29 年度 FD 地域人材育成フェスタ実施報告
●今後予定の事業



【徳島大学】インターンシップフェア（4/26 開催）の様子

平成 29 年度事業全体の取組と総括

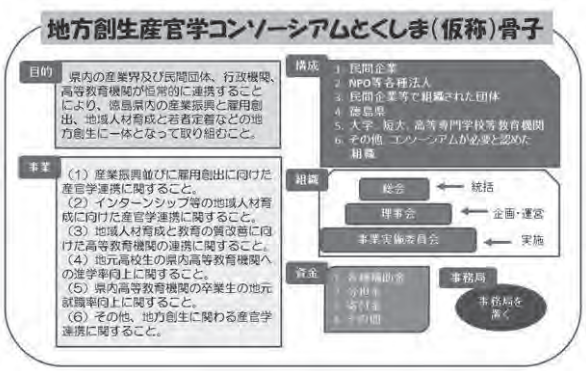
5 年間の COC プラス事業の 3 年目となる平成 29 年度は、事業の本格実施の年となりました。本事業の中核である寺子屋式インターンシップの開発は、昨年度の試行を踏まえて正規の教養科目として開設して実施しました（詳しくは次ページ）。また、6 つの高等教育機関が連携して開講する共同授業「徳島の魅力、徳島で働く」も、8 月に夏期集中講義として正式に開講することができました。さらに四国大学の創業支援事業も 3 年目に入り、充実してきています（詳しくは 3 ページ）。「徳島の魅力、徳島で働く～徳島で働くためのガイダンス～」12 月、「FD 地域人材育成フェスタ」3 月も、昨年度の実績を踏まえて改善・拡大して実施されました。また、平成 29 年度は中間評価の年でしたが、良い評価を受けることができました。

中間評価の結果について　　徳島大学理事（地域・産官学連携担当）・副学長　吉田和文

日本学術振興会「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業委員会」により実施された中間評価では、最高ランクの「S」評価をいただきました。これは「計画を超えた取組」であり、事業目的を「十分に達成することが期待できる」というものです。COC+事業は全国の 42 大学が主管校となって進められていますが、その中で「S」評価は 5 校（12%）のみです。その他は、「A」が 22 校、「B」が 15 校でした。特に評価されたのは、地域で雇用創出が期待できる 4 つの分野に即した教育カリキュラムの編成と、インターンシップ開発の取組でした。ただし、今後に向けた留意事項として、現在の産官学で構成する事業協働機関を活かしコストシェアも考慮した上で、予算・体制を含めた具体的な後継事業計画の作成・検討を進めることが求められました。このことから、残りの 2 年間をかけて COC+事業を進める恒常的機関としてのコンソーシアムの具体化が課題となります。

コンソーシアムの設立に向けて　　徳島大学 COC プラス推進監　玉真之介

今後、検討していくコンソーシアムは、徳島県の産官学を結集した社団法人を目指します。そのためにも、なるべく敷居を低くして、参加しやすい形態を考えたいと思います。目的とするのは、徳島県内の雇用創出と地域人材の育成ですが、特にインターンシップのコーディネートを事業の柱に据えたいと考えています。このインターンシップは、学生の地域人材としての能力開発はもちろん、COC+事業が開発してきた受け入れ機関の経営イノベーションにつながるインターンシップとして進めていきたいと考えています。なるべく、多数の機関に会員として加わってもらった上で、高等教育機関と行政、民間企業団体とで理事会を構成して組織を運営していくことを考えたいと思います。今後、様々な方から助言をいただきながら、今年度中に具体的な案を作成したいと考えています。



第６回とくしま元気印人材育成協議会の実施報告

５月 14 日、「第６回とくしま元気印イノベーション人材育成協議会」が、徳島市の徳島グランヴィリオホテルを会場に開催され、徳島県内の高等教育機関や徳島県、県内企業、関連団体、NPO など 50 の事業協働機関の代表者や関係者、約 70 名が参加しました。

本協議会では、事業概要とこれまでの進捗状況、中間評価でのＳ評価獲得についての報告に続き、平成 29 年度に実施した取組として、本事業の参加機関による協働事業「参加校共同授業」、「企業ガイダンス」、「FD 地域人材育成フェスタ」について、各高等教育機関における取組として、徳島大学の「ボランティアパスポート」、「実践力養成型（寺子屋式）インターンシップ」、四国大学の創業支援事業「とくしまサイコー塾」、「とくしま学生ビジネスプラン道場」、「社長のかばんもち」についての報告が行われました。また、協議事項として平成 30 年度の事業計画案及び「地方創生産官学コンソーシアムとくしま（仮称）」の構想についての説明がありました。

今年度は新たに 11 機関が事業協働機関として本事業に参画され、各機関よりコンソーシアムの設立や事業の継続に向けて様々な意見をいただくことができ、本協議会の今後について認識を新たにした会議となりました。



【協議会の様子】

平成 30 年度実践力養成型（寺子屋式）インターンシップの取組

徳島大学では、教育カリキュラム改革の１つとして、寺子屋式インターンシップのさらなる改善を進めています。寺子屋式インターンシップとは、受入企業・団体側にはメンターを、大学側にはドン（学内メンター）を配置し、相互が密に連絡を取合い、事前学習から事後の振り返りまで「課題・レポート・ディスカッション」を繰り返す「寺子屋式指導法」を取り入れた少人数制の課題解決型インターンシップです。

この、企業・団体が抱える課題に対し企業・団体と学生が協働してミッションの解決を目指す「実践力養成型(寺子屋式)インターンシップ」は平成 28 年度の試行実施から今年度で３年目を迎えました。



【インターンシップフェアの様子】

４月 26 日(木)に本インターンシップの受入企業・団体から参加希望者に対してプロジェクトの紹介を行う「インターンシップフェア」を開催し、16 機関((株)テレコメディア/(一社)大学支援機構/喜多野安心市/徳島県庁農林水産部水産振興課/(株)AWA-RE/(有)樫山農園/(株)ネオビエント/廣間組(有)/(公社)徳島県建築士会/(有)竹内園芸/(株)QLiP/エヌ・アンド・イー(株)/大塚テクノ(株)/(株)基/(株)NDK/四国放送(株)) が参加しました。今回は、平成 28 年度、29 年度の実践力養成型（寺子屋式）インターンシップ修了生 23 名がサポートに入り、相談・案内室を設けて、過去のプロジェクトの紹介を行ったり、来場者の案内、さらに、インターンシップ経験者として来場者の相談にも応じました。また、同フェアに参加できなかった学生を対象に、フォローアップ、追加説明会を３回実施すると共に、エントリーシート書き方講座を実施したところ、合計 150 名の学生の参加を得、うち 45 名が本インターンシップに臨むこととなりました。



【追加説明会を行う IPPOO メンバーの様子】

平成 30 年度は、受入企業・団体 16 機関、インターン生 45 名、ドン（学内メンター）13 名に加え、平成 28 年度修了生３名、平成 29 年度修了生６名の有志により立ち上げられた、インターンシッププロジェクトをマネジメントしサポートするチーム、IPPOO（Internship Project Perform Outwork Operation）で取り組んで参ります。



【受入企業・団体向け事前研修の様子】



【学生向け事前研修の様子】



【プロジェクト単位のミーティングの様子】

平成 30 年度創業支援事業の取組

四国大学では、地域の高等教育機関や地域企業と連携して、「徳島で仕事を創りだす人材」を育てることを目的とした 4 つの事業を創業支援事業として実施しています。

【ビジネスサークル「とくしまサイコー塾」】

毎月（夏期・春期休暇を除く）第 2 木曜日の夜に四国大学、徳島大学、徳島文理大学で会場を持ち回り、起業家や業界のリーダーによる仕事観や起業した経緯に関するお話し、参加学生によるグループワーク等を行うセミナーを開催しています。講師の方達の経験や考え方、課題に挑戦する姿に触れることで多様な生き方や働き方があることを知ってもらい、固定的に捉えがちな就職観やその後の就業観に新たな選択肢の存在を認知し、自分の将来をより深く考え直すキッカケを提供します。

【社長のかばんもち】

起業や経営に興味を持ったが、座学ではなかなか知識やノウハウが得られない“社長の仕事”とはどういうものかを知っていただく為に、県内の社長に 3 日から 10 日間つきっきりの状況をつくりだし、自身が経営者を目指す際の、一つの比較、判断の“軸”を提供することを目的としています。

【とくしま学生ビジネスプラン道場】

県内の学生を対象としたビジネスプランコンテストとして、創業支援クリエーターのブラッシュアップを受けながら、段階的、体系的にビジネスプランを創る方法が学べます。自ら生み出したアイデアを基に事業計画から市場調査、収支計画、マーケティングに至るまで、新事業創出に必要なノウハウを獲得しながら、新たなものを市場に提案していく為の技法を学びます。同世代の学生とビジネスプランを競い合うことで、県内の学生のビジネスに対する意識を高めることを目的としています。今年度は 8 月 1 日（水）に一次エントリーを開始、平成 31 年 1 月 27 日（日）に最終審査会を行う予定です。



【H29 年度最終審査会の様子】

【チャレンジショップ】

商売における全てを学生自身が実践するプログラムであり、実施にかかる設備、什器や材料の仕入れから水道光熱費などあらゆるコストも学生自身が負担します。今年度は 6 月の一ヶ月間、東新町商店街という厳しい立地環境の中、5 チーム 46 名の学生が出店しました。学生自身が一ヶ月間、商売の全てを実践するといったプログラムが、県内初となる事業であることや、学生の準備段階の広報や実施期間中の努力もあり、多くの人達から注目される事業となり、期間中、東新町商店街に多くの人を呼び込み、大学の新たな地域づくりの可能性を示すとともに賑わいづくりに貢献しました。



【東新町商店街での様子】

平成 29 年度徳島の魅力、徳島で働く～徳島で働くためのガイダンス～実施報告

昨年 12 月 16 日、学生とその保護者を対象とする「徳島の魅力、徳島で働く～徳島で働くためのガイダンス～」を徳島大学で開催しました。本ガイダンスは「とくしま元気印イノベーション人材育成プログラム」において、同プログラムに参画する県内の高等教育機関、徳島県、企業及び関連団体による協働事業として実施しているもので、平成 28 年度に続き 2 回目の開催となります。

ガイダンスでは、竹中淳二 徳島経済研究所の理事・事務局長による「データから見る徳島の未来」と題した基調講演、同プログラムの寺子屋式インターンシップを受講した学生 3 名によるトークセッションが行われました。また、メインプログラムとして次世代技術、地域医療・福祉、6 次産業化、地域づくり・観光・ICT の 4 分野関連企業の経営者の方々から、それぞれの分野や当該企業の経営戦略や人材ニーズ等の紹介が行われました。その後、参加者毎に 4 分野の県内企業等 19 団体が出展したブースでの個別企業相談会を行い、学生及び保護者に対し、それぞれの分野や企業の視点から県内産業界の動向や将来ビジョン、県内で働く・暮らすことのメリットを伝えました。

ガイダンスには、県内の大学・高専の学生に加えて高校生とその保護者約 150 名、大学や企業等の関係者約 90 名の計約 240 名が参加し、学生等が県内への就職を考えるうえで非常に有意義な場となりました。



【トークセッションの様子】

平成 29 年度 FD 地域人材育成フェスタ実施報告

3 月 3 日、連携高等教育機関や行政職員、徳島県内企業等を対象とした「平成 29 年度 FD 地域人材育成フェスタ」を開催しました。今年度は、平成 29 年度の COC+事業における成果や課題を報告するとともに、今後の事業の進め方や県内就職率向上に向けた取り組みについて協議する目的で行われました。

メインプログラムでは基調講演があり、株式会社電脳交通 代表取締役の近藤洋祐氏から「創業期を支えた学生とそこに求めた人物像・もたらした効果等について」と題してご講演頂いたほか、四国大学の創業支援事業や、徳島大学の「実践力養成型（寺子屋式）インターンシップについて、各担当者と実際に関わった学生や企業担当者等から、それぞれ成果報告がありました。また、プログラムの最後には「地方創生産学官コンソーシアムとくしま（仮称）構想」の説明の後、県内企業と行政機関、大学教職員の間でワークショップが行われ、産官学が地域人材の育成及び確保をするための連携について熱い議論を交わしました。

参加された方々に各分野の立場からご意見を頂き、産官学連携のきっかけとなる非常に有意義な時間となりました。



【近藤氏による基調講演の様子】

今後の予定事業

【協働】共同授業（集中講義）「徳島の魅力、徳島で働く」（平成 30 年 8 月 20 日～23 日／徳島大学）

昨年度から引き続き、地元で働くことのやりがいや暮らしの楽しさについて、徳島県内で働く地域の識者や若手から学ぶ集中講義を開講いたします。対象は大学生だけでなく県内の高校生も含まれ、今年度は徳島県西部と南部の高校に通う高校生を対象に遠隔地でのサテライト配信も実施します。また、講義の内容も昨年度からパワーアップし、学生間での議論がしっかりと行えるようグループワークの時間も重視した講義となっています。

【協働】徳島の魅力、徳島で働く～徳島で働くためのガイダンス～（仮）（平成 30 年 12 月中旬／徳島大学）

徳島県内の大学、高専の学生、保護者を対象に、県内企業の将来ビジョンや、徳島で働き暮らすことの魅力について、様々な視点から学生及び保護者への周知を図ります。本ガイダンスでは、企業名や会社の規模だけでなく、業務内容やワークスタイル等で就職先を選ぶ新たな視点を伝達することを目指しています。

【四国大学】ビジネスサークル「とくしまサイコー塾」定例会

毎回県内の起業家や業界リーダー2 名を招いて、講演と参加学生によるグループワークを行います。
第 21 回定例会　平成 30 年 7 月 12 日（木）
第 22 回定例会　平成 30 年 10 月 11 日（木）
第 23 回定例会　平成 30 年 11 月 8 日（木）

【四国大学】「社長のかばんもち」（随時）

県内企業と学生とのマッチングを随時行っています。

【四国大学】「とくしま学生ビジネスプラン道場」

平成 30 年 8 月 1 日（水）から一次エントリーを開始します。

【徳島大学】実践力養成型（寺子屋式）インターンシップ（通年）

正規科目として目下施行中です。

事務局だより

今年度は実践力養成型（寺子屋式）インターンシップの中で IPPOO（internship project perform outwork operation）が立ち上がりました。インターンシップのプロジェクトをサポートしていくことを目的とした、昨年度までの本インターン修了生による有志のサポートチームです。自分たちの経験をもとにプロジェクトで起こる様々な事態を事前に予測しながら、プロジェクトの完遂に向けてサポートを行うと共に、プロジェクトマネジメントのスキルの習得を行います。このニュースレターを読まれて COC プラス事業に興味を持たれた方は、ぜひお気軽に下記事務局までご連絡ください。（IPPOO の MTG 風景の写真を添付予定）

徳島大学 COC プラス推進本部事務局（研究・社会連携部地域創生課内）
徳島市南常三島町 1 丁目 1 番地（地域創生・国際交流会館 3F）
電話：088-656-9885 FAX：088-656-9880
e-mail：coc-plus@ml.tokushima-u.ac.jp

Tokushima University COC Center of community

とくしま元気印イノベーション人材育成プログラムニュースレター

Vol.5
2018.12

CONTENTS

●ご挨拶
●平成 30 年度の事業概要について／コンソーシアム構想について
●会議の報告
●【四国大学】創業支援事業の取り組み
●【徳島大学】実践力養成型（寺子屋式）インターンシップの取り組み
●協働事業の報告
●今後の予定事業



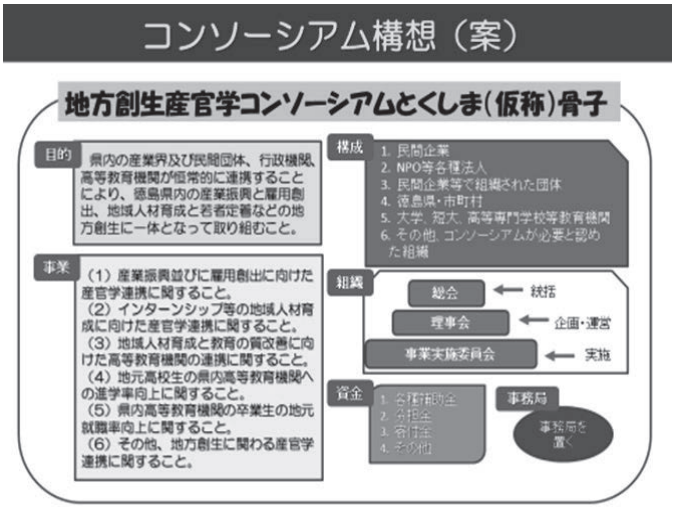
【徳島大学】中間報告会の様子

ご挨拶　COC プラス推進監　玉真之介

みなさま、COC+も 4 年目を迎えています。来年度が最終年度です。そこまでに県内就職率を事業開始年から 10%向上するのが目標です。これは達成が難しいかもしれません。しかし、この 4 年間の取組の中で、3 つの重要な成果が生まれてきています。1 つは、県内高等教育機関の連携です。6 つの大学・高専が協力して集中講義「徳島の魅力、徳島で働く」を開講しました。これはかつてなかった高等教育機関の連携です。2 つ目は、地域人材の育成を目的とした産官学の連携です。そして、3 つ目が地域創生に資する新しいインターンシップの開発です。インターンに取り組む学生の能力開発はもちろん、受入企業の経営革新にも貢献する実践力養成型のインターンシップは、今後の地方創生を考えていく上できわめて画期的な取組と言えます。この 3 点を COC+のレガシィとして事業終了後もしっかりと継続していく体制を創ることが最重要な課題です。

平成 30 年度事業の概要／コンソーシアム構想について

挨拶でも述べたように、COC+補助事業の終了後も、実践力養成型（寺子屋式）インターンシップをはじめとして、地域人材育成のための事業を継続していくための恒常的な組織を創ることが課題となっています。この課題に応えるために構想しているのが「地方創生産官学コンソーシアムとくしま（仮称）」です。このコンソーシアムは、組織的には県内の民間企業や経済団体、徳島県、そして高等教育機関で構成している COC+推進のための「とくしま元気印イノベーション人材育成協議会を引き継ぐものです。ただし、重要な特徴は、組織的には会員制として、事業運営費の一部を会費負担によってまかなう点です。このためには、参加いただく民間企業や経済団体に地方創生につながる人材育成という趣旨の理解のみならず、会員となるメリットが必要となってきます。その意味でも、現在は徳島大学だけで行っている実践力養成型インターンシップを県内高等教育機関の学生にも広げ、このコンソーシアムがインターンシップ推進協議会の役割も担うことによって、学生の能力向上のみならず、地元企業の経営革新につながる事業として行くことが重要と考えています。そうしたコンソーシアムの趣旨と事業内容を伝えて、事業終了年度に向けて準備を進めています。



会議の報告

平成 30 年 4 月 25 日	協働事業に関するワーキンググループ兼参加校協働事業実施委員会
平成 30 年 5 月 14 日	とくしま元気印イノベーション人材育成協議会
平成 30 年 5 月 23 日	協働事業に関するワーキンググループ兼参加校協働事業実施委員会
平成 30 年 7 月 4 日	協働事業に関するワーキンググループ兼参加校協働事業実施委員会
平成 30 年 7 月 17 日	徳島大学 COC プラス推進本部執行会議
平成 30 年 7 月 18 日	徳島大学 COC プラス推進機構会議
平成 30 年 8 月 1 日	協働事業に関するワーキンググループ兼参加校協働事業実施委員会
平成 30 年 8 月 7 日	コンソーシアムプロジェクトチーム会議
平成 30 年 8 月 29 日	平成 29 年度事業外部評価委員会
平成 30 年 9 月 13 日	コンソーシアムプロジェクトチーム会議
平成 30 年 9 月 26 日	教育プログラム開発委員会及び協働事業に関するワーキンググループ兼参加校協働事業実施委員会
平成 30 年 10 月 31 日	協働事業に関するワーキンググループ兼参加校協働事業実施委員会
平成 30 年 11 月 28 日	協働事業に関するワーキンググループ兼参加校協働事業実施委員会

【四国大学】創業支援事業の取り組み

【とくしまサイコー塾】

将来的な「起業」という選択肢や、起業家の考え方、生き方を知っていただくことを目的とした起業家講演とワークショップを組み合わせたセミナーです。

実施分では「ＩＴ、スポーツビジネス、食品開発、藍染め」など様々なテーマで定例会を開催しました。

毎月第二木曜日 18 時 30 分から会場を 3 大学（徳島大学、徳島文理大学、四国大学）で持ち回り開催しています。




【社長のかばんもち】

座学では知識を得ることが困難な「経営者の仕事」について、実際に社長に３～１０日間の期間中つきっきりの状況で経営や経営者の仕事のイメージをより深めていただきます。今期 12 名の学生がかばんもちを実施し、報告会を開催しました。




【とくしま学生ビジネスプラン道場】

自分で生み出したアイデアを事業計画に拡げ、人に伝えるプレゼンテーションまでを学びながら競い合う、県内学生を対象にしたビジネスプランコンテストです。　今年度は 217 名（105 プラン）の応募があり、平成 31 年 1 月 27 日（日）に最終審査会が行われます。




【チャレンジショップ】

商売における全てを学生が実践するプログラムであり、学生自身が実際にコストを背負い、仕入れや必要資材の調達、広報や販売までを行うプログラムです。

今年度は 6 月の一カ月間、46 名の学生が 5 チームに分かれ、東新町商店街内店舗にてチャレンジショップを実施しました。





＜四国大学 COC＋事業へのお問い合わせ＞

TEL：088-665-9953　　E-Mail：sudachisuishin@shikoku-u.ac.jp　（COC＋担当：岩野、吉田）

【徳島大学】実践力養成型（寺子屋式）インターンシップの取り組み

徳島大学では、教育カリキュラム改革の１つとして、寺子屋式インターンシップの開発を進めています。寺子屋式インターンシップとは、受入団体側にはメンターを、大学側にはドン（学内メンター）を配置し、相互が密に連絡を取り合い、事前学習から事後の振り返りまで「課題・レポート・ディスカッション」を繰り返す「寺子屋式指導法」を取り入れた少人数制の企業の経営課題から抽出したプロジェクトに学生、受入企業・団体がチームになって取り組む課題解決型インターンシップです。

現在、16 の企業・団体のプロジェクトに学生 45 名が挑戦しており、各プロジェクトに１名ずつ教職員をメンターとして、取り組みを行っています。また、昨年、一昨年の当該インターンシップ修了生の有志によって立ち上げられた、インターンシップの取り組みをサポートするチーム、IPPOo（Internship Project Perform Outwork Operation）９名が各プロジェクトの推進をそれぞれの経験を活かして補助的な役割を担っています。

6 月に行った 3 回の事前研修を経て、プロジェクトが本格始動しました。

そして、本事業の中間時期において、施行中のプロジェクトの現状把握と今後の進め方について再調整を図る機会として、また、自プロジェクト以外の他のプロジェクトの学生や企業との交流の場を設けることにより、今後のプロジェクトの完遂に向けた創意工夫などのヒントを得、かつ具体的な修正案や、プロジェクトを進めていく上での課題等の解決策を策定できる場として、平成 30 年 10 月 6 日（土）に中間報告会を開催しました。本会は、IPPOo 及び平成 28 年度、29 年度のインターンシップ修了生計 14 名が運営し、受入団体、インターン生、ドン、学内関係者など計 94 名が参加しました。

本会は 3 部構成で開催を行いました。第 1 部、第 2 部では、各プロジェクトの進捗状況をポスターセッション形式で発表し、他のプロジェクト参加者と意見交換を行いました。第 3 部では、意見交換で得た意見をもとに、プロジェクトチームごとに今後の取り組みについて策定し、発表を行いました。

参加した学生や企業からは「他プロジェクトの進捗や、様々なケースでの改善案を知ることができ大変参考になった。」や「現在の状況について客観的な視点でとらえる事ができ、今後の動き方も明確になったように思う。」などの感想がありました。現在、インターン生たちはプロジェクトの達成に向けて邁進しています。成果報告会は平成 31 年 1 月 12 日（土）を予定しております。

【中間報告会の様子】



ポスター発表の様子



ワークショップの様子



司会を務める IPPOo メンバー

【取り組みの様子】

それぞれのプロジェクトで現地調査や成果報告会等が行われています。



社内成果報告会の様子



テストプロモーションの様子



最終報告会の事前説明会を行う IPPOo メンバー

なお、本事業にて実施するインターンシップは来年度が最終年度となっております。事業の内容や、参画に関するお問い合わせは、ニュースレター最終ページに記載している、徳島大学 COC プラス推進本部事務局までお気軽にお問い合わせください。また、本事業の取り組みに関する報告は平成 31 年 2 月 22 日（金）の FD 地域人材育成フェスタでも行います。

【協働】共同授業「徳島の魅力、徳島で働く」の報告

平成 30 年 8 月 20 日～23 日、参加校で連携して開催する共同授業「徳島の魅力、徳島で働く」が開催されました。「徳島県の将来ビジョン」と「徳島県で働く・暮らす」の 2 つの観点を学生に伝えることを目的とし、地域の様々な分野で活躍する企業や NPO、行政などのリーダーを講師に迎えて、地域社会の将来ビジョンをご講演いただくと共に、地元で活躍する若手 OB,OG から自らのワークライフバランスや仕事のやりがいを語ってもらうプログラムを実施しました。

本講座は、複数の参加校の学生が正課の授業として導入しています。また、今回はメイン会場での講義を映像でサテライト会場である徳島県立海部高等学校、徳島県西部総合県民局に配信し、複数人の高校生も受講しました。徳島大学、四国大学、四国大学短期大学部、徳島文理大学、徳島工業短期大学、阿南工業高等専門学校が連携して、4 日間の授業を行い、のべ 706 名が受講しました。



学生からの質問に答える
飯泉徳島県知事



パネルディスカッションの様子



サテライト会場の様子
（海部高校）

【協働】「徳島の魅力、徳島で働く～徳島で輝く産業を知る～」の報告

平成 30 年 12 月 15 日に徳島大学共通講義棟創成学習スタジオにて、県内大学、高専、高校の学生・保護者を対象に「徳島の魅力、徳島で働く～徳島で輝く産業を知る～」を実施しました。徳島の未来を創造する①次世代技術、②地域医療・福祉、③6 次産業化、④地域づくり・観光・ICT の各分野において、創造的、革新的な経営をされているリーダーたちの講演や、インターンシップ経験者によるレポート、個別企業相談会を通して、多くの人が実は知らない県内企業の今後の産業動向や将来ビジョン、魅力を伝えました。詳細については次号ニュースレターでご報告します。

今後の予定事業

【徳島大学】実践力養成型（寺子屋式）インターンシップ最終報告会（平成 31 年 1 月 12 日／徳島大学共通講義棟創成学習スタジオ、6 階フロアほか）

現在、徳島大学生 45 名が企業等 16 の団体で、組織の課題解決に取り組むプロジェクト型のインターンシップに取り組んでいます。プロジェクトを終えた学生の成果報告会を実施します。また、

【四国大学】「とくしまビジネスプラン道場」最終審査会（平成 31 年 1 月 27 日／ホテルグランドパレス徳島）

現在、四国大学でビジネスプランコンテスト「とくしま学生ビジネスプラン道場」を進めています。その最終審査会を実施します。最終審査には、二次審査を通過した 6 チームが挑みます。

【協働】FD 地域人材育成フェスタ（平成 31 年 2 月 22 日／徳島グランヴィリオホテル）

平成 30 年度の COC+事業で得られた成果と、事業を進める中で明らかになった教育上の課題を、県内外の高等教育機関、自治体、企業、NPO 等の間で共有するためのシンポジウムを開催します。

事務局だより

コンソーシアム設立に向け、玉推進監が先行事例調査としまして「九州インターンシップ推進協議会」の視察に行って参りました。事業最終年度に向けて、準備を進めて参ります。
このニュースレターを読まれて興味を持たれた方は、ぜひお気軽に常三島キャンパスの地域創生・国際交流会館 3 階の事務所にお越しください。お待ちしております。



徳島大学 COC プラス推進本部事務局（研究・社会連携部地域創生課内）
徳島市南常三島町 1 丁目 1 番地(地域創生・国際交流会館 3F)
電話:088-656-9885 FAX:088-656-9880
e-mail:coc-plus@tokushima-u.ac.jp

地（知）の拠点大学による地方創生推進事業
とくしま元気印イノベーション人材育成プログラム
平成３０年度事業報告書

編集・発行　とくしま元気印イノベーション人材育成協議会

問い合わせ先　徳島大学ＣＯＣプラス推進本部事務局
（徳島大学研究･社会連携部地域創生課内）
〒770-8502 徳島市南常三島町１丁目１番地
TEL　088-656-9888
FAX　088-656-9880
http://www.tokushima-u.ac.jp/coc-plus/

発行月　令和元年６月

文部科学省
地(知)の拠点